
占い師への誘い

ランクーマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

占い師への誘い

【コード】

N8509K

【作者名】

ランクーマ

【あらすじ】

後宮に呼ばれた占い師のお話

1話

一式『魔女』

決して大きいとは言えない中程度の通りにて、不可思議な模様の絨毯の上に胡座をかき、意味もなく威厳を出しふんぞり返る。

それが、流れの占い師のスタンスである。

見慣れた道に、見慣れない女が一人、それも威厳たっぷり座り込んでいるというのは、殊のほか人々の目を引く。

そうして興味を引かれたもの一人が客として訪れればしめたもの。その初めての客の占いをわざと周囲に聞こえるように行えば、後はそういうのが好きな輩が次から次へと舞い込んでくる。

後は、ほとんど何も映らない真つ黒な鏡とおざなりにめくるだけのぼろなタロットを見ながら、客が喜ぶようなことを適当にのたまえば面白いほど銅貨を落としていってくれる。

コツは、十人に一人ぐらいの割合で、不吉な警告を与えること。そうすることで、それ以外の占いに真実味を帯びさせ、客たちの期待を煽り立てるスパイスとなる。

それさえ守っていれば、占いとは実に実入りの良い、おいしい商売である。

占い師として旅する少女・カシムは常々そう思っていたりする。

実際、師匠に免状を渡され、修行として故郷を旅立ってより、世の中舐めてくださいと言わんばかりに、何事も問題なく小金が懐にたまっていくばかり。

少々世の中に退屈してきたと、そう感じたカシムに、唐突にそれが訪れた。

「貴公が、最近話題の占い師・カシムだな？」

占い師というものは、威厳を出すため総じてやたらえらそうな言

葉遣いを使わなければならない。カシムも常々仕事の際にはそれを心がけてきた。

彼女のような路肩で店を開くような占い師に、貴族階級の方々が訪れるはずもなく、自然と偉そうなカシムと、それに恐縮する客たちという構図ができていた。

自分でも鳥肌が立ちそうなくらい似合わない威厳ある上品ぶった言葉遣い。それを他人の口から耳にすることは、旅に出てより今日がはじめてであったように思える。

だからして、目の前の金属鎧に身を包んだ一目で騎士と判る客を、思わずしげしげと珍しそうに眺めてしまった。

そのぶしつけ視線に、騎士は機嫌を損ねたのか、少し目をそらし咳払いをする。フルフェイスの鉄兜越しにもちゃんと咳の音が聞こえることを初めて知った。いや、それがどうというわけではないが、なんとなく。

「ああ、これは失礼を……確かに私がカシムですが？ 何用で？」
商売用の言葉遣いと笑みを浮かべてやる。すると騎士はさらに居心地悪そうに、ごほんごほんとさらに咳き込む。

「風邪ですか？ 私は占いだけでなく、薬の商いも営んでおります。たちどころに咳を止める喉薬などいかが？」

風邪で無いと判っていないながらそんなことを言っただけ。

「い、いや結構……私は薬など、ましてや占いなどを求めてここに来たのではない」

「あら？ そのどちらでもないとなりますと、私には何一つできることがなくなってしまうのですが？」

これは本当である。傲慢ではないが、占い……と称したでまかせで金を稼ぐこと、もしくはそこらに生えている薬草から作った簡単な薬を高く売りつけること、その二つ以外、自分には何の能もない。これはほとんど万能ともいえる師匠の太鼓判つきである。

胸を張って告げられた、

『貴様には何の才能もなく、今までの修行はまったく何の成果もな

かった。だが、師の情けとして、唯一のとりえのその悪知恵とあと
おまけの外面の良さだけで生きていけるよう、占い師の免状を用意
してやった。それをやるからさっさと出て行け」

思い出す度に、胸がむかむかするような非の付け所のない送り出
しの言葉だった。

逆立ちしようが、命がけで挑もうが、師匠には絶対になわな
いという現実がなければ、その場で殴りかかっていたかもしれぬ。

(なにやら、胡散臭げになってきたな……)

心の中でそう呟く。

何の根拠もないが、師匠のことを思い出すような場面では、決し
てろくなことが起こらない。あの忌まわしい記憶が蘇るとき、大抵
何かの災難に見舞われるのである。

カシムはそういう時は、いつでも即座に逃げ出せるように心の準
備をすることになっている。何かがあれば、すぐさま金を占いの道具
でことさら高価な物だけを持ち、風の速さで逃げ出せば、大抵の災
難は避けられる。

相手に不自然さを与えない、何気ない動きで、本日の収入の入っ
た小箱と占いに使う鏡とタロットを手繰り寄せておく。

あとは、それをもって逃げるだけ、ということを経士へ微笑みか
けながら確認し、再度尋ねる。

「それで、騎士様は私に占い以外の何をしろと仰るのです？」

その問いに答えたのは、言葉ではなく一枚の紙だった。

なにやら不自然なほど整った字面で、長々と何かが書かれている。
だが、カシムはそこに書かれている事より、その下方に捺されている
印に目を奪われた。

(これは……確か、この国の国印?)

入国の際に目にした国印に間違いはない。それにとどめを指すか
のように、騎士の言葉が降ってくる。

「勅命である！」

「はあ？」

思わず商売用の外面を忘れ、地で返事をしてしまう。

「占い師・カシム。貴公はレムン国殿下の後宮へ入宮を許された。これはまこと名誉なことである、心して承るべし」

「……………」
あまりの頭痛にこめかみを抑える。聞き違いであれば良いのだが、あいにくと耳の精確さは、頭の回転の次に自慢である。

「……………あの、今、後宮って仰られましたか？」

「そうだ。レムン国殿下の後宮だ。貴公はそこに召されることとなる」

「後宮……………ハーレムのことですよね？」

「それ以外に何かがある？」

「……………そこに召されるって事は、殿下の愛人、というより側室になれって事、ですよね？」

「そのとおりだ」

当然のことのように、騎士は頷く。

カシムは、呆然としつつ、先ほど手繰り寄せていた銅貨の入った箱とタロット、そして鏡を持ち上げる。

啞然としたまま、手に持った鏡に自分の顔を映してみる。

金属を磨いただけの、映りの悪い鏡面には、見慣れた自分の顔が映っている。

自慢ではないが、自分でもかなり整った容姿をしていると自負している。

何しろ、めったなことでは誉めない師匠ですら、カシムの容姿を貶したことがないのである。自信を持つなというのが無理な話だ。

整った顔立ちは十分に美貌と呼ぶに値し、さらには手にした黒鏡ではわからないが、病的なまでの白い肌……………今まで自分を見てきたものが、すべて口をそろえてまずそれを誉める。路肩に店を開き、日中ずつと日光にさらされているというのに、常に透き通るような白さを保った肌、それと女としては長身でありながらも、壊れそうなくらい細い肢体とあいまって、どうやら見る男全てに抱きしめた

いだとか、そういつた劣情を抱かせるらしい。

実際、行く先々で男に言い寄られるなど、珍しいことでもない。

あちこちを旅する女は、ただでさえ軽く見られる。さらに占い師という職業も卑しいものとされているため、カシムが占いではなくそういうことで生計を立てているのだと勘違いした馬鹿に、一晩の値段を聞かれ殴り倒したことは数知れず。

そこらのチンピラから、時にはかなり裕福な商人にまで、そういうお誘いを受けたりしたが、さすがに特権階級……しかもその最たる王族にまでそんな誘いを受けるなど、夢にも思わなかった。

そんなカシムの胸中を、彼女の口が勝手に一言で言い表した。

「……正気？」

「聞くな。それは私の感知するところではない」

まさか答えが返ってくるとは思わなかった。それも、肯定とも取れる答え。

察するに、この騎士も王族の後宮に、一介の……どころか、卑しい占い師風情が招かれることを快く思っていないようである。あたりまえであるが。

「あの、お尋ねしますが、それを私が拒否する権利はありますか？」

「無い。この国において、殿下の命令を拒否できるのは同じ王族のみ、さらにその命令を打ち消すことができるのは、最高権力者であるレムン王のみだ」

「やはり、そうですね」

予想通りの答えに、カシムは顔をしかめる。

「すぐそこに馬車を待たせてある。必要なものがあれば、あとで使いのものにとりにいかせよう」

要するに、文句をいわず今すぐついてこいということである。

おそらく、ここで拒否しても強引に連れて行かれるのだろう。何しろ王族を、占い師一匹程度で非難するものなどこの国には一人もいないであろうから。

カシムは、小さく諦めのため息をつく。

「わかりました。今この場にあるものが、私の持ち物すべてです。今からまとめますので、少しお時間をください」

おそらく渋るだろうと予想していたが、あっさりと承諾され、騎士は一瞬言葉に詰まる。

「……了解した。何なら、私も手伝おうか？」

「いえ、見てのとおりほんの少しですから、すぐに済みます」

そういつて、あらかじめ持っていた箱や鏡を一まとめに小脇に抱え、地面に直接引いた絨毯の端に手をかける。

「本当にすぐ済みますから……ねっ！」

最後の掛け声とともに、絨毯を持った端から跳ね上げ、その上に置かれた占いの装飾品が騎士めがけてぶちまける。

「っ!？」

突然のことに騎士は思わず身を引いてしまう。

金属鎧に身を包んでいるのなら、その程度のことでは動揺することも無いのであるが、従順を装っていたカシムのいきなりの奇襲に、不覚にも虚をつかれてしまった。

装飾品の類が、鎧の胸当てにあたり跳ね返し、跳ね上がった絨毯が地面に舞い降りた跡にはすでに占いの師の姿は無かった。

「くっ、おのれ！」

騎士は慌てて視線をめぐらせ、すぐそばの路地の入り口に目を止める。

ほとんど反射的にその路地に逃げ込んだことを確信し、すぐさま飛び込んでいく。

表通りとは対極に、薄暗く汚れた裏路地に、口汚い罵り声がかかる。

「ふっ、やれやれ、冗談じゃないっての！」

大事な商売道具を抱えながら、カシムは思いつきり地で毒づく。

「後宮？ この俺がたかだか一国の馬鹿ボンボンごときの慰み者に

なんか、何でならなくちゃいかん？ んなの、どつかの同じくらい馬鹿な世間知らずのお姫様にでもやらせてりゃいいだろうに」

複雑に入り組んだ路地をすいすいと通り抜けながら、カシムは宿泊していた宿に向かう。

先ほどは、ああいったものの、実際には宿にこれまでの稼ぎを置いたままなのである。それを取りに行かないと、カシムは明日にでも干からびてしまう。

「あゝ、たく！ せっかく実入りの良い国を見つけたと思ったら、これか…… 師匠のことを思い出したときはいつもこれだよ。……呪いでもかけられたかね？」

本気でそのことが心配になり、ブルルツと身震いする。

何しろ、文句なしにそれだけの能力を持っているのだ。

「……まあいいか、今度はディオ帝国にでも行ってみるかね。ここほど裕福じゃないそうだけど、最近色々と勢いがあるって言うし、飯もうまいって話だ」

「……ああ、ルバトの串焼きが名物だそうだ」

「！？」

物思いにふけり込んでいたカシムだが、突然の声に慌てて顔を上げる。

視線の先に、全身を金属で覆った騎士がいた。素顔が見えないため、先ほどと同一人物かは、見た目だけでは判断できないが、声から察するにそのようである。

「なるほど……それが貴公の本性、というわけか」

「……本性とは人聞きの悪い。ただの商売だよ」

もう取り繕う必要もないとばかりに、慥然とした表情を隠さず表に出す。

「なかなか身軽だな。この裏路地は地元の人たちでも迷うというのに……」

「あちこち旅した経験でね。逃げ道に困らないよう、こういう所の地理は頭に叩き込むようにしてるんだよ」

「なるほどな……路地の入り口の近くに店を開いていたのも、わざとか」

「そ、こういう商売だと、何かとシャバ代だとかいって因縁つけられるからね……で、そっちは？」

「私が？ 何だ？」

「地元ですら迷う路地を、道を覚えた俺をあつさりと抜いて待ち伏せできる君はいったい何なんだろうな、て話だよ」

その問いに、鉄兜の奥から小さな笑い声が聞こえる。

「フツ………たいしたことじゃない。幼少のころ、良くこの辺りを駆け回り、身をもってその複雑さを体験しただけの話だ」

「あら？ 君、市井の出かい？」

意外に思ったカシムの問いに、一度は和んだ騎士の雰囲気が一瞬にしてこわばる。

「どうやら、自分の出身をかなり気にしているようである。」

「そんなことは貴様には関係ない」

「それもそうだね。撤回させてもらうよ」

とりあえず身の危険を感じ、それ以上突っ込まないようにする。

危険と感じたことには、すべからく道を譲るように。これが、師匠の下で人生の大半をすごせることができた、不動の心得である。

「さて………では、もう諦めてもらおうか。言っておくが、貴様の特徴はすでに外門の警備兵達に伝えられている。この場を逃れても、貴様はこの町から出ることは不可能だ」

「うっわ、徹底的だねえ。この国は妾を招くのにそこまで手間をかけるのか？」

「あと………貴様がこの場を逃れることも不可能だ。先ほどのような失態は二度とせん」

「どうやら先ほどのことが、騎士のプライドを傷つけたようである。うっん、そうかあ………困ったねえ」

それほど緊迫感も無く、胸の前で腕を組み苦笑するカシムに、騎士が逆に問い掛ける。

「……そもそも、なぜ逃げる。この国の第一王位継承者であられる殿下の寵愛を受けられることなど、名誉なことだと思わないのか？ それはこの先、一生不自由をしない生活が待っている。貴様のよくなものには夢のような話だろう？」

その言葉に、小さく、馬鹿にするように唇の端を曲げ。答える。「確かに夢のような話だね。でも、あんまり夢みたいで、現実味が無さ過ぎるんだよ。俺は、甘い夢より、面白い現実のほうが好きなんだね」

言い終わると同時に、手荷物を左手に持ち、開いた右手を騎士に向ける。

武器どころか、何も持っていない素手に向けられ、騎士は身構えるでもなく首をひねる。

「何のつもりだ？」

「さあ。何のつもりでしょう？」

このときだけ、地のふてぶてしい表情ではなく、かわいらしく首をひねり。そして、腕を下げ、掌を自分と騎士との間の石畳の地面へと向ける。

ゆっくりと息を吸い、目を閉じ、精神を集中させる。

「アテン・シエジ！」

カシムの声とともに、掌の先から火の塊がほとばしる。

塊は掌の向けられた地面に着弾し、燃え上がる。

何も燃えるものの無いはずの石畳の上で、まるで油でも撒かれていたかのように激しく、高く燃え上がる炎。それは、カシムと騎士の視線を軽く超え、お互いの姿を相手から覆い隠した。

「……魔術!？」

炎の向こうで、呆然とした騎士の声がする。

それも無理の無いことである。魔術は、人が武器を手にしたのと同じく、人が生き延びるために古来より伝えられた秘術である。といても別段、秘匿されているわけでもなく、魔術の理論自体、こちらの少し高等な教育施設なら一般に教えている。

ただし、教えられたもの全てが魔術を使えるわけではない。理論を理解し、それを実践できるものはほんのごく一握り……特に近年はその数も減り、魔術理論を一般に広める動きが出たのも、その魔術師の数の減少を食い止める苦肉の策なのである。

だからして、魔術を使えるものということは即座にその国を抱える魔術師、というエリート入りを意味し、誰もが夢見ることである。要するに、あちこちをふらふらして、日銭を稼ぐ占い師風情が使える道理が無い。

カシムは、騎士の疑問に答える代わりに、その声の発生源に炎越しに掌を向ける。

「イレス・マオ」

掌に槍の刃先程度の炎の刃が生まれる。それがカシムの意志力により掌の向いた方角に炎の帯を槍の柄のように残しながら疾駆していく。

その炎の槍は燃え上がる炎の中に消え、そしてその向こうで悲鳴と爆発音が生じる。

炎が視界をふさぎ、さらにはその炎の中から飛び出す炎の槍……

およそ常人にはよけられるはずも無い。

カシムは汚れてもいない掌をパンパンと叩き、名残も無く背を向ける。

あの騎士の言葉を聞くに、どうやら宿に残したお金のことは諦めたほうが良いようである。どうせ、占いをすればすぐにでも稼げる。それよりも今は、この町……いや、この国から逃げ切ることを考えねば。

そこまで考えて、カシムの感覚は、危険を感知した。

理屈ではなく、本能で……カシムは手にもった荷物を惜しげも無く放り捨て、その場に身を投げ出す。

受身も取らないダイビング、その後頭部に感じたのは、風を切るような音と、何かが割れる音。

地面の体の前面を打ちつけながら、即座に転がり背後を振り返る。

そこには、剣を振り下ろした体勢で、剣を地面に食い込ませたままごちらを睨む騎士の姿があった。その剣先には先ほど地面に放った金属製の黒鏡が真つ二つに割れている。

「げっ、師匠の所から持ち出した唯一の本物だったのに……」
思わずうめいてしまいが、そのうめきも騎士の放つ殺気に押し殺されてしまう。

その背後では、相変わらず炎が燃え上がっている。なおかつ、銀色の鎧の所々が黒く変色し、煙を上げていることから見るに、あの炎の槍を受け、さらには燃え上がる炎を突っ切って、カシムに斬撃を放ったのである。

炎を背にし、影となり黒々とした全身鎧は異様なほど不気味で、カシムはあっさりと両手を上げた。

「降参！」

全面降伏をしたカシムは、拘束され、用意された馬車に詰め込まれ、あっさりと王宮の奥深くまで運ばれてしまった。

周囲の荘厳な建物を見て、ようやく自分がこの国の王子に見初められたという事実を認識する。とは言うものの、それより気になることが一点。

「な、だからごめんって」

「……黙って歩け」

「ハイハイ……でもなあ、大事な商売道具を真つ二つに割られて、なおかつこんな扱いを受けて……」

そう言っつて、カシムは自分の体を見下ろす。胸の下辺りで縄を巻かれ、腕ごと拘束され、騎士に引き立てられている今の状況……誰がどう見たところで、連行中の犯罪者である。

「さらには、同行者がそんなにつんけんしてるんじゃないあ、救いようがあまりに無さ過ぎると、そう思わない？」

「……黙っている。そうすれば悪いようにしない」

「悪いようにはって……女の子を無理やり後宮に連れ込むのって、

悪いことに分類されないの？」

「……………」
カシムの的確な指摘に、騎士が押し黙ったかと思うと。

「……悪いとは思っている」

「おや？」

意外に意外な言葉に、カシムはまじまじとその鉄兜を見つめる。

「だが、殿下の興味を引いた時点で、貴様にこれ以外の選択肢は無くなった。もしこれ以上抵抗して、殿下のご機嫌を損なえば、私とて庇いだてはできない」

「……………あのさあ、ひよっとして」

カシムは呆然と尋ねる。

「君つてば、俺に同情してたり……………するの？」

「……………」

沈黙が肯定する。

「……………ぷっ」

肩を震わせ、ひとつ噴出すと、もうそこで我慢の限界を超えた。

「ぷひゃ、ひゃはは、くくくっ、あっはははははっ！」

もはや遠慮のかけらも無く、笑い転げるカシムに、あたりまえだが騎士は無然と。

「何がおかしい？」

「いや、いやいや、ごめんごめん。あ、面白い、君つて面白い！」

一向に反省のかけらもないカシムに、騎士はギロリと睨みつける。そんな騎士の憤慨すら、面白そうに見つめるカシムは、唐突にとんでもない質問をする。

「ねえ君……………俺、いや私を抱いてみたいと、思わない？」

「……………」

無言でその場にひざをつく騎士。そして、思い切り疲れた声音で、

「……………何のつもりだ？ 色仕掛けでもしているつもりか？」

「ふふ〜ん、だったらどうする？」

楽しげな笑いを浮かべ、騎士の甲冑に包まれた背中に縛られたま

まの身体を擦り付ける。

「……悪いが、効果はないな」

「あらら」

「それに意味もない。私を誘惑したところで、もうこの場から貴様が逃げることは不可能だ。ここは王宮の最深部・後宮なのだから」

騎士が頭痛を振り払うかのように首を振りながら、きつぱりと言つてのける。

「いやいや、そうでもないと思うよ」

「なに？」

「たとえばさ……後宮に招かれた側室が、主人に手をつけられる前に、他の男と関係を持つちゃったら？」

ニコニコと無邪気に笑いを浮かべながら、えげつない発言をする。

「……悪いがその程度では……」

「それが、たとえば騎士様でも？」

「なっ!？」

あまりのことに、言葉を無くす騎士。

「君ってさ、さっき見たけどかなり有能だろ？　そして言動から察するに、かなり忠義に厚いタイプだ。てことは、これから会う殿下にもかなり気に入られている、と。ここまでは合ってる？」

「それがどうした？」

「ずきずきと痛む頭を抱え、とりあえず続きを促す。」

「……そんな君と、俺とが関係を持つちゃって、それをその足で殿下にご報告しちゃったら。どうなると思う……怒る？　それとも、笑って許してくれる？」

「……つまり、貴様は私をたらしこんで、後宮から逃げ出す算段を立てているというわけか……」

「苦々しく、騎士が詰問する。」

「うんっ、悪くない話だと思うよ。それだけのことで、俺を抱けるんだし。もちろん俺、初物だよっ？」

縛られたままで、騎士の背中に体重を乗せる。金属鎧の重量とあ

いまって、騎士の体勢を前かがみにして行く。

「……さっきも言ったが、不可能だ」

「えー！ 何で？ 期間限定なら、結婚してやってもいいなあ、とか思ってたりするんだよ、俺？」

「……期間限定？」

「うん、一年か二年ぐらい、それ以上たったら多分俺、旅に出るだろうし……ああ、そのときは籍のほうは入れといたままでいいよ」

さらに頭痛が増すようなことを、あっけらかんと言つてのける。

「なあなあ、それでもだめ……良かったら、その物陰でも……ああ、あそこなんかいいんじゃないの？」

などと言いつつ、建物の隙間の陰になった部分を指差す。

指……で指している。

「……縄」

「ん？ ああ、こんな簡単簡単。……おお、もしかして縛つてた方が好み？ 悪いね、気がきかなくて、何せ初めてだから」

そそくさと自分で再度縄を巻いていくカシムに、騎士は深い……深いため息をつく。

「……だから、あな……」

「そういえば、名前を聞いてなかったな？ これから伴侶となるやつの名前も知らんとは、いかな。名前なんていうの？」

疲れきった世捨て人のように、力なく首を振り、騎士は答える。

「……エリスだ。エリシエル・ラクール」

「へえ、エリス……えっ!？」

驚愕し、固まるカシムの目の前で、騎士はフルフェイスの鉄兜をとる。

その無愛想な鉄兜の奥の素顔は……名前が表すような、可憐な素顔だった。

「……女？」

「そつだ……別に私は男だと言つた覚えはないぞ」

勘違いしたおまえが悪い、とばかりに女騎士エリスは不機嫌そう

に眉を寄せる。

「は……」

エリスの顔をまじまじと見つめ、ため息をつくカシム。そんなカシムに、どことなくしてやったり、といった優越感を感じ、少しからかうように、

「というわけで、貴様と関係を持つ、ましてや結婚は不可能だ。納得したか？」

「ふむ……困った」

カシムは腕を組んで考え込む。悩みに悩んで、ボソリと、
「実は……そっちのほうが好きだったりするんだけど……」

その瞬間、本能的な嫌悪からエリスは重い鎧を着たまま驚くほどの距離を飛び退り、カシムとの間合いを取った。

コンコンと扉がノックされ、どことなく硬い声がする。

「……連れてきました」

「そうか、入れ」

「はっ」

返事とともに、扉が開き、姿をあらわしたのは一人の女騎士と、どことなく神官をおもわせる長衣に身を包んだ長身の美少女。

「ほう、お前が噂の美貌の占い師カシムか？ なるほど、まあまあだな」

「ほう、お前が噂の女好きの放蕩王子レイドか？ 見た目はまあまあだが、性格チンピラっぽいな。この国も先が暗い。占わなくてもわかるぞ」

「……」

「……」

互いの最初の一言で、王子の自室に重苦しい沈黙が立ち込める。半ばこのような事態を予想していたエリスは、鉄兜の奥の瞳で天を仰ぐ。

はじめ、何を言われたか理解できなかったのだろう、きよとんと

していた王子だが、だんだんと理解していくに従い、秀麗なその顔立ちが憎悪に歪み、カシムの言葉どおりまるでチンピラのような表情になっていく。

「おい……」

押し殺した声の向けられた先は、カシムではなく、その隣のエリスだった。

「何だ、コレは？」

ビツとカシムを指差し、苛立たしげに尋ねてくる。

「……殿下がお望まれになられた女占い師です」

だがそんなことを言われても、エリスにはそれ以外に答えようがない。

「ふざけんな！ オレが欲しかったのは、噂どおりの神秘的な美貌の占い師だ。何だこのふざけた女は！？」

「……殿下……その神秘性は占いという商売のための演技だそうです」

「ああ？」

エリスの言葉に、剣呑な視線をカシムに向ける。

「そうそう、何しろこんな言葉遣いの占い師じゃ。誰も客に来てくれないからね。ちょっととした営業スタイルだよ」

一国の王子、しかも唯一の現レムス王の嫡男……つまりは、まず確実に将来のこの国の王、その男に睨まれているというのに、まったく平然とカシムは答える。

レイドはそれが気に入らなかつた。王と王妃を除き、誰もが自分の前では恐縮し、かしこまる。誰もがそうであり、そうあるべきである。だというのに、この女は、まるで王子がそこらのチンピラでもあるかのように、飄々とした態度を崩さない。

（俺の期待を裏切っただけでなく、この態度、許せんな）

それがレイドの結論であった。

「おい、お前！」

「……………」

「聞こえないのか！ おいつ！？」

「……………」

荒々しいレイドの呼びかけに、カシムは無視を決め込む。

何度呼んでも反応しないカシムに、レイドはエリスに責めるような視線をぶつける。

それに仕方なしにエリスは、カシムに呼びかける。

「カシム、殿下がお呼びだ」

「うん、何？」

あつさりと返事をする。それにレイドは脱力し、馬鹿にされたとさらに怒りをあらわにする。

「てめえ……………なんでエリシエルだとすぐ返事をする。王子であるこのオレ様を無視しておいて……………」

「何って、決まってるだろ？」

「ああ！？ 何だ？」

「君が俺の名前を呼ばなかったからだよ。てつきり、エリス君か、もしくはそこらの壁にでも話し掛けるのかと思っちゃってたね」

その答えに、レイドはあんぐりと阿呆のように口をあける。

「て、てめえ！ オレを誰だと思ってるんだ！？」

「……………ふむ、まあ大体はわかってると思うんだが、さっきみたいに勘違い、ということも、まあありえる。ここは堅実にご本人様に説明してもらおうのが、間違いがないだろう」

「ンナツ！？」

「さあさあ、遠慮せずにごんごん自分をアピールしてね。きちんと、聞いてあげるから」

「んが……………」

あまりの怒りに、その場で咆哮を上げる。それにカシムはフンフンと頷き。

「なるほど『んが……………』か、ふむ……………君もなかなか奇特な人生を送っているようだね」

「こ、この……………はあ、はあっ」

咆哮を勝手に独断で意識し、勝手に納得するカシムに、レイドは何とか激情を抑え、息を整える。

「簡単だ、一言言えばいいのだ、そうすればこの馬鹿女にも自分がどれほど立場の違う存在に話していたのか、わかるはずだから……。」

「オレはレイド……この国の第一王子だ」

「言っただけだ。そう思った。これでこの生意気な女も他の輩同様平伏するに決まってる。そして、哀れっぽく許しを請うのだ、あの整った顔で……考えるだけでぞくぞくする。」

「……………」

「だが、いつまでたってもそれはこなかった。」

「?」

「見ると、カシムの表情は一応歪んではいた……歪んではいたのだが、それはレイドが期待してものではなく……何かとても哀れなものを見ているかのような、そんな視線だった。」

「なんだ？ その目は？」

「……あゝ、言いくいんだが。それだけかい？」

「はあ？」

「聞き返すレイドの言葉を、肯定と受け取ったカシムはとても悲しそうに首を振る。」

「ふう……自分をアピールする言葉が、たった一言……しかも、王子という王族に生まれた最初についている肩書きだけ……ということか」

「とてもかわいそうなものを見る目でレイドを見つめる。」

「レイドはあつけにとられてその視線を受けた。」

「それはつまり……生まれてより、今まで、王子という肩書き以外の何物も生み出すことなく人生を送ってきたということ……とても寂しい人生を送ってきたんだね」

「ご丁寧に涙まで漏らしながら、同情の言葉をレイドにかける。」

「そこでようやくレイドの脳は動きを再発させた。」

「つまり……要するに、この女は自分を哀れんだのだ。王子という」

誰もが羨む存在の自分を、かわいそうだと……レイドのせつかく動き出した脳だが。あっさりと何かが切れる。

「てめえええ、殺す！」

腰に剣を挿しているのに、それに手をかけるといふ発想自体浮かばないようで、その両の拳で殴りかかる。

カシムは、それを予想しているかのようにあっさりとよける。

「このっ、よけるな！」

ぶんぶんと腕を振り回すが、まったくあたらない。というより、まったく見当違いの方向を殴りつけてさえいるので、これではあたるほうが難しい。

どうやら、噂の放蕩王子は、真実に放蕩を続けており。ろくな武術も身に付けていないようだ。

占い師であるカシムですら、殴ることのできないレイドは、すぐさま体力が尽きたかのように、動きを止め肩で息をする。

「エリシエル……」

ぎらぎらとした憎悪の目で、エリスを呼ぶ。

その底冷えのする声音に、エリスは王子の次の言葉を察する。

「こいつをぶちのめせ、オレの命令だ」

予想通りの命令に、エリスは黙って剣を鞘ごと抜き、構える。

「あらら」

それを見て、カシムはようやく緊張した表情を見せる。

エリスはそのカシムの表情をできるだけ見ないようにして、踏み出す。

鍛えぬかれた脚力で床を蹴り、カシムのすぐ横に移動する。

カシムは何が起こったのかわからないような……というより、エリスの姿を見失って戸惑った表情をしている。

エリスは、カシムが気づく前に、速やかに剣を振り、鞘を彼女の首の後ろに打ち据える。

おそらく、カシムは痛みを感じることもなかっただろう。

目がさめたとき、見知らぬ天井が目に入る。

「……んつと」

首の後ろに痛みを感じつつ、何事もないかのように身を起こす。彼女の人生において、おそらく最高のものであるう、異常なほどやわらかいベッドの感触……まるで宙に浮いているようで落ち着かない。

「……やれやれ、ちょっと悪ノリが過ぎたかね」

痛む首根をさすりながら一人ごちる。意識を失うほど打ち据えられたというのに、あまりいたみは残っていない。

「ふむ……手加減して、意識だけを失うように正確に急所に入れたのか……エリス君。やっぱり良い子だな」

動いたたびに身体が沈むベッドの上を泳ぐようにして、何とか床に降り立つ。

だが、その床に敷き詰められた絨毯も、またもや沈むような弾力性を持った最高級品だった。カシムが占いのときに使っていた安物の絨毯とは大違いだ。

「はは……ちょっとこれは、勘弁して欲しいな」

いくら気持ちよかるうが、立っているのが怪しくなるほどの柔らかさは、ちよつとうんざりする。

それがまるで、今の自分の状況を表しているかのようで、少し気分も沈む。

「はあ……さてさて、これから俺はどうなっちゃうんだろっねえ」

カシムの問いに、答えられるものはまだ誰もいなかった。

2話

「失礼します」

丁寧な挨拶とともに、音も立てずに扉が開く。

ゆっくりと開いていく扉から、するりと姿をあらわしたのは……フリルのあしらわれた黒と白を基調にしたエプロンドレスに身を包んだ……

「うわっ、メイドさんだよ」

カシムは思わず感嘆の声をあげてしまう。

そういう職業が存在すると聞いてはいたものの、実物を見るのは初めてなのである。

「はい？」

そんなカシムの感動のほどをわかるはずもないそのメイドはかわいらしく首を傾げる。

「あ、いやいや、こっちの話。こんにちは、可愛らしいメイドさん。名前を聞いても良いかな？」

物怖じもせず、平然と親しげに話してくるカシムに、今度はメイドの方が驚かされる。

この後宮に来たものは、不安にびくびくと臆病になった者か、もしくは己が王族の側室という特別な存在になったのだという特権意識から、居丈高にメイドに命令する者の二種類に分かれていた。

この、自分が新たに身の回りを任されたカシムという新たな側室は、そのどれとも違っていた。まるで同じメイド仲間、いやそれ以上に気安く話し掛けてくる。

「は、はあ、レフィリア・ソウラと申します。この度、カシム様の身の回りのお世話をするよう言いつけられました貴女様専属のメイドです。どうぞ、よろしく願います」

徹底的なまでに叩き込まれた礼儀作法に則り、主人に対する礼を

カシムに向かつてする。

それは教えられた中で、最上級に分類される礼だったのだが、相手はまったくそれには気を払わなかった。

「ふうん、レフィリアね……てことはレフィかな？ それともリリアのほうが良いかな？」

「はい？」

今まで経験したこともない、想定外の事態にレフィリアは困惑を隠し切れなかった。

「うん、俺的にリリアのほうが良さに思うんだが……ねえねえ、君、親しい友達とかに自分のことなんて呼ばせてるの？」

「……ええと、レフィの方で呼ばれています……が、それが？」

「ん、じゃあ、俺もレフィって呼ぼうかね」

ニコニコと勝手に結論を述べる。

「は、はい。それはかまいませんが……」

呆然と返事をするレフィリア。

主人とメイドが必要以上に親しくするのはまずいのだが、まあ、メイドの名前を短縮するぐらいは問題はないだろう。その逆は不可であるが。

「よし、じゃあ、レフィも俺のことをカシムって呼ぶよーに」

その禁忌を、あっさりと言ひこむに驚かされるカシムにレフィは立ちくらみを感じる。

「い、いけません！」

思わず声高に叫んでしまった。

カシムの驚いた顔に、自分のメイドにあるまじき行為に口を抑える。

「も、申し訳ありません！ 主に口答えをするなど、とんでもない無礼を！」

深々と頭を垂れ、必死になって謝罪する。

そんな相手の様子を、居心地悪そうに眺め、ぽりぽりと頬を掻く。「あゝ、無礼うんぬんは、どうでも良いからさ、できたら呼び捨て

できない理由を言ってくれないかな？」

商売用でなく、威嚇用でもない、まじりつけなしに純粹に微笑みかけてやると、レフィは真っ赤になってうつむいてしまう。

そんな彼女の可愛らしいしぐさに、カシムの機嫌は再現なしに上昇していく。

「ほらほら、恥ずかしがらないで、理由を聴いて納得したら、もう二度といわないからね」

安心させるようなカシムの言葉に、レフィはおずおずと口を動かす。

「……叱られます」

「ほう、なんで？」

「その……メイドがお仕えすべき主人を呼び捨てにするなど……もし、それをメイド頭に知られたら、叱られてしまうんです。だから、それだけはできません」

「うーん、叱られちゃうかあ……だったら、無理もいえないね」

「すみません」

再度頭を下げ、謝りながら、どうやらカシムが諦める様子であることにほっと胸をなでおろす。が、それはあまりに甘かった。

「でもね。それはこっちも同じなんだよね」

「は？」

「俺もな、師匠の言いつけで、可愛い女の子とはもれなく親密になるように、と厳命されているんだ……だというのに、レフィ君みたいな可愛い子に“様”だなんて他人行儀な呼び方をさせてるって知られたら……」

「ど、どうなるんですか？」

「最低、殺されるな」

真剣な表情でボソリと呟く。

「最低で……それですか？」

「無論、あっさり苦しめもせずに殺すなんて下の下だね。師匠だったら、誰もが思いつかないような苦しめ方で、徹底的に相手を苦し

め、発狂死させることぐらいお手の物だ……はあ、レフィ君があんまりつれないものだから、俺も明日には師匠の哀れな犠牲者の一人か……」

「そ、そんなあ……」

大仰に涙を流して世を憐むカシムに、レフィはまともに顔色を変えらる。

レフィの困惑気味を確認して、カシムはころつと表情を一転させ、身を乗り出す。

「それで提案だけど、お互い譲れない立場にいるわけだから、ここは一つ最低ラインまでお互い譲歩するってのはどうだろう？」

「譲歩……？」

あまりの変化についていけず、きょとんとするレフィにさらに畳み掛ける。

「そ、レフィ君が俺を『カシム様』て呼ぶのは、そのメイド頭や他人の前だったらしょうがない……でも、二人っきりの時は、俺のことを『カシム』と呼んで、仲の良い……友人として接すること、これで問題ないだろ？」

「え？ え？」

鼻の先が触れ合うほど間近にまで、カシムの顔に接近され、パニックに陥るレフィは、まともに思考すらできない。

そこにカシムに耳元にさらに追い討ちをかけられ、

「……な、いいだろ？ レフィ君」

「は……はい」

耳たぶにかかる吐息に背筋を震わせながら、ついそつ返事をしてしまう。

「ふふーん」

カシムの嬉しげで、誇らしげな笑み。

「ご満悦の表情で、レフィの細い腰を引き寄せせる。

「あつ！？」

先ほどの困惑が尾を引き、なすがままに抱き寄せられてしまう。

「あ、あの、カシム様？」

「ふふ、違うだろ、レフィ君……今は二人つきりだよ？」

「あ、カ、カシム……さん」

「ん、まあ今はそれでいいか……で、何？」

「あの……離してもらえませんか？」

「なんで？」

当たり前前のレフィの要求に、これまた当たり前前のようにカシムが返す。

「なぜって……その、どうしてこんな風に抱きしめたり？」

「うん？ 友人に抱擁するのって、そんななおかしい？」

「いえ……おかしくはない、と思います。たぶん」

「じゃあ、問題なしだね」

「え？ あの、」

話は終わりとばかりに、カシムの手がレフィの背中を好き勝手に撫で始める。

それに困り果てるレフィだが、まさか主を突き飛ばすわけには行かない。だが、やっぱりと引き剥がそうにも、存外にこのカシムという女性は力が強いようでびくともしない。

「カ、カシムさん、あの、私、これからお仕事が……」

「はて？ レフィ君のお仕事は俺の世話じゃなかったの？」

「そうです」

「じゃあこれも仕事の内だね」

「そ、その、困ります」

「う、うん、そう？ 困っちゃう？」

「はい、すみません」

いくらカシムの世話が仕事とはいえ、こうしてカシムの傍にいる以外にも仕事は山ほどある。

「う、うん、じゃあさ、キス一回で離してあげる」

「ええっ！ じよ、冗談、ですよね？」

そうであって欲しかったが、現実にはレフィに敵しかった。

「うっん、キスしてくれないと、離してやんない」

「そ、そんな。困ります」

あせあせと、レフィは何とか許してもらおうと懇願する。が、カシムはまったく構わず。

「ふふーん、俺が離さなくても困るんだよね？ さあ、どっちを選ぶ？」

「ふえーん、もう許してください」

「ははは、泣いたってだめ」

とつとつ涙目になったレフィに、上機嫌に笑うカシム。もうほとんど、いじめっ子といじめられっ子である。

そんないじめられっ子に救いの手が唐突に訪れる。

「いいかげんにしろ、カシム」

「おや？」

聞き覚えのある声に、カシムが振り返ると扉がいつのまにか開いており、そこには全身鎧に鉄兜で身を固めた騎士の姿があった。そのいかめしい格好では判別がつかないが、その兜の中身はりりしい女騎士であることを、カシムは知っている。

「え、エリシエル様……きゃっ！」

エリスの登場にカシムの力が緩んだことと、抱きしめられている自分をエリスに見られてしまったという恥ずかしさから、レフィはカシムの腕からの脱出に成功する。

「あらら……まあ、いいか。約束じゃあ、二人きりのときだけってことだしね」

離れてしまったレフィに少しだけ残念そうにしながら、身体をエリスに向ける。

「……で、何か用？ エリス君」

まるで先ほどのことが無かったかのように平然としたカシムの態度に、エリスは苦々しげにため息をつく。

「……別にたいした用は無い。少し、警告しておこうと思ってな」

咳払いを一つして、気を取り直し、カシムの顔を真つ向から見据える。

「わかつているだろうが、この後宮に一度入ったからには、自分の意志で出ることはいできない。出る方法は、殿下のお許しを得るか、それとも殿下に追放されるか、もしくは死ぬか、だ」

「ふんふん、まあそんなところだろうとは、思ってたよ」

十分に脅しをこめていったつもりなのだが、カシムはまったく堪えた様子は無い。逆に、傍らに控えたレフィの方が、その言葉に顔を真つ青にして立ち尽くしている。

「もちろん貴様のことだから、自ら命を絶つ、ということはありません。ないだろう。となると、残るのは二つだ……」

「んで、さっきの王子様との面会にて、俺の印象は最悪、とくる」

まだ話を始めたばかりだというのに、あっさりと話の核心を先取りされる。

聡い……。エリスは鉄兜の奥で微笑む。

ほとんど確信していたことだが、やはりただの旅の占い師ではない。

「そうだ……貴様が殿下に与えた印象は、私の知りうる限り最悪のものだ。あの後の殿下の不機嫌さは、気絶していた貴様は見えないだろうが……そこで言っていたことだが、無礼を働いた貴様は、今夜、徹底的に思い知らせてやるそうだ」

「ほほう」

「そ、そんな！」

この期に及んでも平然としたカシムはともかく、レフィは主のこの後の余りな運命に涙ぐみ、非難の声をあげる。

エリスはそのレフィの反応に好感を抱きながら、勤めて無感情に話を続ける。

「そこでだ……もはや、貴様がこのまま殿下の側室になるといふことは無い。つまり、今夜、殿下が満足なされ、気が済めば……貴様に対する殿下の興味も完全になくなり、晴れてこの後宮から出られ

ることとなるだろう」

そこで、じろりとカシムの顔を睨み据え。

「……貴様が、妙なことをしでかさないかぎりな」

実際それこそが、カシムに残された唯一の開放されるチャンスである。

そこで、下手にレイド王子を怒らせる、もしくはさらに興味を持たれるようなことをしでかせば、そのチャンスは無に帰す。

そして……このカシムという女は、まず間違いなく面白がつてそういう馬鹿な事をしでかすのである。エリスは、カシムとの本当に短い時間の接触でそれを理解していた。

「もうわかったな。貴様が少しでも、この後宮で一生を過ごしたくないと思っっているなら……今夜一晩、何をされようがおとなしくされるがままにしている！ わかったな」

「……わかったよ」

反論されると思っていて。自分がいかに最悪なことをいつているか、何より自分で理解しているからだ。黙って身体を許せなどと。

だから、カシムの初めて聞くしおらしい返事に、まずエリスが己が耳を疑った。

「カシム……？」

「わかつてるよ。それしか方法が無いってことも……そうだよな。諦めるしかないよな」

「あ……」

その寂しげな表情に、エリスは相手が自分と同じか年下の、うら若い少女であることをいまさらながら思い出す。

そして、本人の口から聞いた言葉……このカシムが男を知らない穢れ無き身体であるということ。

「……まあ、それほど大事だと思ってたわけじゃないけど、ね。やつぱり、あいつ以外の奴に与えることになるなんて……」

「……」

あいつ……聞かなくてもわかる。おそらく将来を誓い合った男性

なのだろう。

エリスは己の鈍さに嫌気がさした。いかに平然と振舞っていたようだが、このような状況で平気なはずが無いではないか。

「ガーランド……あいつがこれを知ったら、なんて言うかな……それを考えたら、ずっとここにいた方がいいのかな、なんてな」

「カシム様……」

自虐的なカシムの言葉に、レフィが涙ぐみながらその手にそっと自分の手を重ねる。

このあまりに可哀想な主に、少しでも安らぎを与えたい。そう心から思った。

のだが……。

「……………なーんて、雰囲気出してもなあ。どうもいかん、俺には似合わんし、自分でも鳥肌立ってきた」

「……………」

「……………」

唐突に、コロツと普段の態度に戻り、鳥肌の立った自分の腕を掻き始めたカシムに、展開に取り残された二人はなすすべなく固まる。何かが、思い切り欠けてしまった穴だらけの思考を復活させるのは、エリスの方がわずかに早かった。

震える声で、とりあえず尋ねたことは、

「……………さっき言ったガーランドというのは何だ？」

「うん？ ああ、あれ、場を盛り上げるために適当に即興で考えた名前。特に意味なし」

平然と返され、エリスの中で盛大にぶちきれたものがあつた。

「……………もういいー！！ 貴様などに警告など無意味だったな！ 好きにするが良い！」

そう怒鳴りつけ、身を翻し部屋を出ようとするその背に、カシムの声がかかる。

「ああ、そうそう。エリス君が俺を昏倒させたこと、ぜんぜん気にしてないからね」

ドアに手をかけたまま、思わず足を止めてしまつ。

「ここに来たのも、それが気になつたからでもあるんだろ？ 大丈夫、ほとんど痛くなかつたからさ、いやいやすごいスキルだね。今度教えてよ」

まるで、多々なることで思い悩むことをあざ笑つかのように、飄々としたカシムの言葉がなぜか拒絶できずにエリスの中に浸透していく。

「ふふーん、そんな俺なんか気に使う、優しいエリス君って可愛いね。……愛してるよ」

「っ！！」

衝動的に満身の力をこめ、扉を叩きつけるように閉める。

粉々に砕けそうなほどの衝撃に生じた轟音だが、カシムの最後の言葉をさえぎるにはあまりに遅すぎた。

耳に残つたその言葉を振り切るように、エリスは足早にその場を後にする。

扉どころか部屋全体が壊れるかのような衝撃と、その後聞こえる足音高に遠のくエリスの気配に、カシムはたまりかねたように含み笑いをもらす。

めつたに聞くことの無い荒々しい轟音に身をすくませていたレフイは、そんなカシムをとがめるように、少しだけ睨む。

「カシム様…… エリシエル様のことがお嫌いidez？」

「様？」

「……カシムさん」

「そうそう……で、エリス君が嫌いかだつて？ ははは、もちろん大好きに決まつてるだろうに」

「ごく当たり前のことのように、ぬけぬけと言つてのける。

レフイの方も、それで納得はもちろんしない。

「その割には、ずいぶんエリシエル様にきつくあたっているように見えましたが？」

「きつく？ どこが？」

本当に心当たりの無いといった風に、きよとんとする。

「あの方は、カシムさんを本当に心配しておられたのに、あんなふうにかかわれて……怒るのは当然だと思います」

エリス同様、レフィ自身もカシムの境遇に同情を感じていただけに、憤慨する気持ちは抑え様が無い。

いつのまにか、最初あれだけ気にしていた主従の関係もやや希薄になりつつある。

それは、カシムが望んでいたことであるのだが、レフィにその自覚はない。

カシムは嬉しそうに、膨れるレフィの相手をする。

「ははは、エリス君のそういうところが可愛いんじゃないか」

「もう……エリシエル様って怖い方なんですよ。どうなったって、私は知りませんからね」

もう付き合いきれないとばかりに、唇を尖らせつんと顔をそらす。

「怖いって、エリス君が？」

「ええ、そうですよ。エリシエル様は、ここに来る前は騎士団で一二を争う強豪だったそうなんですから」

「ほほう、どおりで強いと思った。でも、『怖い』ねえ……ひよつとしてレフィ君、エリス君の素顔を見たこと無い、とか？」

唐突な質問に、首をひね考え込む。

「……はい、ありませんけど？」

「だったら、わからないか。エリス君の素顔を一度見たら、そんなことなんかもうどうでも良いって感じるよ、きつと」

「はあ……ええと、あの、ひよつとしてエリシエル様って……美人なんですか？」

しばし黙考の後、おずおずと質問してくる。

「うん、とつても……やっぱり見たこと無かったか」

「ええ、あの方はいつも兜の面当てをおろしたままにしているので、

一度も見たことはありません。たぶんこの後宮にいる者の大半がそうだと思います」

「いやいや、もったくない話だねえ。いや、そんなエリス君の素顔を見れたオレが幸運なのかね……しかし、レフィ君、エリス君が美人だつてこと、意外そうだったけど、なんか理由でもあるの？」

カシムの質問に、レフィは言いにくそうに答える。

「ええ、その……噂でなんです、エリシエル様がレイド殿下のお傍付きに任命されたのは……その、殿下が絶対に手を出さないような容姿だから、だとか。そういう噂が」

「なるほど、兜の奥の顔は醜女と、そういうわけね」

「はい、そういう噂が……」

もともとこういう陰口じみた会話は苦手なだろう、どこか居心地悪げにそわそわとしてレフィは答える。

「その、先輩のメイドの話では、エリシエル様がレイド殿下の寝室に呼ばれたことは、一度も無いதாகで、それが噂の原因だと思います」

「へえ、あの容姿だからってつきり、あのチンピラ王子に権威を笠にことある度に相手をさせられてるかと思ってたが……ふむふむ、興味深い話だ」

「チンピラ……」

この国の王族、そしてこの後宮で一番の権力者をチンピラ呼ばわりするカシムに、レフィは眩暈を感じる。

このときになってようやくエリスがカシムの何を心配していたのかを痛いほど理解した。

一度打ち解けると、その後はなし崩しに互いの……というか、レフィが一方的に打ち立てていた主従の垣根は崩れていった。

他のメイドと共同の仕事などで部屋を出るとき以外、カシムはレフィに絶えず話し掛け、そしてレフィもその一つ一つに膨れたり、笑ったり……時には怒ったり、穏やかな時間が過ぎて行く。

そんな時間も、窓からさす光が衰え、薄暗い夜が訪れるまでであった。

カシムの寝室の扉が、丁寧にノックされる。部屋の中にはカシムと、そしてレフィ……つまり、このノックはレフィではないということ。

カシムにボディラインのことをからかわれ、涙を流しながら憤慨していたレフィは、即座に態度を切り替え、扉へと歩み寄る。

扉を開けると、そこには同期のメイドがいた。

「何用でしょうか？」

丁寧語を使う仲でもないのであるが、仕事上であるためこのような言葉遣いとなる。

相手ももちろんそれと同じく。

「カシム様への御伝言です。半刻後にレイド殿下の寝室に来られるようにと」

「っ!？」

それをおかしいことなどではなかった。先ほどエリスもこのことを示唆していたのだから。だが、レフィはカシムの変わらぬ態度にその未来を頭の奥にしまいこんでいた。

だが、レフィがいかにも否定しようと訪れるべき未来は訪れる。

同期のメイドは、同僚の異変に気づきながらそのまま礼をして扉を閉める。

レフィは閉じられた扉を前にしばし呆然とする。

「おっ、その様子だと来たみたいだね。いつ来いつて？」

「……半刻後……だそうです」

カシムのように平静を装おうとするも、どうしても声が震えてしまっ。

「ほっほっ……じゃあ、もう準備をしないといけないかね」

平然としたカシムになぜか腹が立ち、レフィの唇は勝手に質問をつむぐ。

「……哀しく、無いんですか？」

「うん？」

「さつき、冗談交じりに言ってみましたけど……初めて、何でしょう？」

「そだよ。……師匠が意識の無い俺からそれを無理やり奪ったりしてない限り、俺は真正正銘の処女、のはずだ」

「どういう人なんですか、その人？」

「無類の女好き、あんな奴の元で俺みたいなまっすぐな人格形成の乙女が生成されたなんて、まさにこの世の不思議だな」

「そ、それは……じゃなくて、始めてだったら、それはとても大切なものでしょう。それを、こんな風に……失うことが哀しくないんですか！？」

声を荒げて訴えるレフィを、カシムは不思議そうに眺める。

そしてしばし考えて……ポンツと手を打つ。

「あゝ、あゝ、そういえば、あれって結構大事なものだっただよな。関係ないから、すっかり失念していた」

「失念って……」

「ふむふむ、そうなるとあんなチンピラに、そんな大事なものと思しきものをくれてやるのは、ちょっと癪だな……さて、どうするか」

「あ、あの、私が言っているのはそういうことでは……えと、そういうことなのかなあ？」

首をひねるレフィは、どことなく自分がとんでもないことをしかしてしまったのではないか、などという不安に襲われる。楽しそうに、考え込むカシムの姿を見ると、なぜか。

そのカシムは、ふと首をめぐらし、周囲の部屋の内装を見渡す……まるで何かを求めるように。そしてその目が止まったその先には……

「ふふーん、いいのみーけっ！」

レフィは慌ててその視線の先に、自らも目を向けるが、何がカシムの興味を引いたのか判別がつかなかった。

そこにあるのは、小物入れも兼ねた台座に、その上に乗っている

かぐわしい生花のさされた円筒状の花瓶……

わけもわからず、そちらに歩みよるカシムを見つめる。

何をするのかもわからないというのに、止めることなどできない。だが、この後レフィはこのときの判断を思い切り悔やむことになる。

「あれは……カシム？」

夜間の後宮内の見回りに従事していたエリスは、視界の端を掠める影に注意を向ける。

チラツとしか見えなかったが、おそらく間違いないだろう。この後宮内でドレスを着ていない女性など、自分以外ほとんど限られている。

しかもあんな真っ白な長衣など……

そしてエリスはそのことを不思議とも思わなかった。

わかつていたことであるからだ、今ぐらいの時間に彼女が王子の寝室に呼ばれることなど……。

それは仕方の無いことである。そうエリスは思うようにしていた。命令され、この後宮に美しい少女を連れてくること……そんな女衛隊の任務をさせられ続け、エリスは自分に言い聞かせるようになった。

仕方の無いことだと。王子に見初められたなら、もう手遅れなのだ。自分にできる、せめてものは、できる限り傷つけないように連れて来て、そして必要以上に傷つけられないように警告をする、ただそれだけだと。

もうカシムに対する自分の役目はすでに十分済ませた。後は、彼女次第である。

そう思っていたものの、エリスの足はいつものまにか見回りの順路を外れ、先ほどカシムを見かけた廊下にまで移動していた。

当然、もうすでにカシムの姿は無く、歩いていった方向に背中すら見えない。

エリスはため息をつき、元の順路に戻ろうと身を翻したとき、床

の絨毯の上に点々とした何か、を見つける。

「？」

廊下の汚れなど、メイドたちが徹底的なまでに注意している。ということは、その赤い汚れは、メイドが掃除をしてから付いた真新しいものであるということである。

エリスは、無償にその赤い点が気になり、その場にかがみこみそのうちの一つを入念に見つめる。

「……これは、血!？」

案内のメイド……無論レフィではない、の後について王子の寝室とのたまう部屋の前にきたとき、カシムは……まず呆れた。

おそらく、百人の間を道案内も地図も無しでこの後宮内を徘徊させたとして、早く人が、ここが王子の寝室であるとわかるだろう。そういう自己主張激しいの扉がデンツと構えている。

「……これって、案内の意味無いんじゃない？」

冗談のように豪華な扉のノッカーに手をやるメイドにそう問い掛ける。

「……案内が、私の仕事ですので」

否定も肯定もせず、そのメイドは丁寧に答え、そしてノッカーで扉を叩く。

返事は……ない。だが、メイドはそれで終わりとはかりに、カシムに対して道を開く。

「……どうぞ、殿下がお待ちです」

「あん？ 返事が聞こえなかったように思えるんだが」

不思議そうに尋ねるカシムに、メイドはまた丁寧に答える。

「殿下は、すでに『お楽しみ』の最中であられます。どうぞ、ご遠慮なくお入りください」

「お楽しみって……」

ぼりぼりと頬を掻きながら、まるで門のような扉に手をかける。

見た目で、重いかと思っていたのだが、少し力を入れるだけでま

るで羽のように軽く扉は開かれる。

そして、開いた扉からまず飛び出したのは……女のすすり泣く声だった。

「やっぱそれかい」

カシムはうんざりと顔をしかめる。その耳に次に入ってきたのは、男の荒い息遣い。

もはや決定的である。

悪趣味に豪華な扉の向こうは、やはり悪趣味に豪華な内装の寝室だった。

その中央に、まるで御伽話をそのまま鵜呑みにして作ったかのような、天蓋つきの大型ベッドまで会ったりする。ご丁寧なことに薄いカーテンつきである。

薄い布地越しに、二人と思しき影が重なり合っている。

否、一方が一方に強引にのしかかり、無闇やたらに相手を責め立てる様が見える。

そこからもれるすすり泣きも、快楽の色合いなど欠片も混じっておらず、ただ苦痛と恥辱に耐える哀しみの色しかない。

ただ、男の声だけが無様なほどに自分勝手に高揚していく。

そして、男がひときわ高い声を上げると、女は絶望の悲鳴を小さくかすかに、だが確かにあげる。

それが、これが少なくとも女の方が望んだ行為ではないということとを証明する。

相変わらず哀しげなすすり泣きを洩らす女を残して、男がこちらに歩み寄ってくる。

薄い布をかき分け姿をあらわしたのは、唇顔を合わせたチンピラ王子・レイドである。

「おう、来たか」

整った顔にあからさまに馬鹿にしたような笑みを浮かべたレイドの言葉に反応せず、カシムはゆっくりと視線を下に下げていく。

レイドも、その視線を追うように視線を下げると、行き着く先は

己の股間……

あるうことか、カシムはそこをしげしげと眺め、そして一言、

「……並以下」

「オゲアツ!!」

気にしていることを真つ向から言われ、レイドは危つく品詞の重症を負いかけた。

思わず意識が遠のきかけたが、何とか持ち直し、虚勢を取り繕おうとする。

「……こ、これは、さっき出したすぐだからであって、だな」

「いや、それでもそれは標準以下だろう」

「や、やかましい!」

虚勢すら張れずに、顔を真つ赤にして絶叫する。

獣のように荒い息を吐き、こちらを睨むレイドを無視して、カシムはその向こうを覗き見る……見たとたん、感嘆に口笛を吹く。

「おおっ! チンピラにはあまりにもつたいないぐらいのとびっきりの可愛い子じゃないか!」

「チンピラというな!」

レイドの抗議を受け流し、カシムはただその美少女に見とれる。

この辺りではほとんど無い褐色の肌……おそらく西方の国の出なのだろう。

カシムと同じ色だとはとても思えないほどの、光沢すら放つ流れのような黒髪。涙を零し、憂いに満ちた顔も美しい……

そして何よりも目を引くのが、その細い肢体のラインである。

カシムも細いことは細いのであるが、師匠曰く『鶏がら』といわれ、全体的に細いだけなのであるのだが、その娘がそれに匹敵するぐらい細いというのに出るべきところはきっちり出ていたりする。ぶしつけない視線に気づき、恥らう様に、カシムは同性でありながら思わず生唾を飲んだりしてしまった。

「いやいや、こんな辺鄙な国のチンピラの後宮なんかで、こんな立て続けに可愛い子達を会えるなんてね。しかも、これは飛びつきり

だな」

素直に大真面目に感嘆するカシムに、呆然としていたレイドはようやく事態を自分にありに把握する。

要するに、自分の女を見て、カシムが恐れおののいているのだから、と。

先ほど無残に叩き折られた鼻っ面が、驚くべき速度で再生する。

「ふん、どうだ？ てめえなんかじゃ、こんな上玉にお目にかかったことは無いだろう。だが、オレの力なら、一声かければこのくらの女山ほど……」

「ねえねえ、君、名前なんていうの？」

鼻高々に自慢するレイドなど、完全に無視してカシムは褐色の美少女に話し掛ける。

「おい、聞けよ」

「あ……あの」

無遠慮に話し掛けてくるカシムではなく、その後ろで不機嫌そうに睨むレイドにおびえ、褐色の美少女は困惑した態度を見せる。

「いやいや、しかし君も大変だね」

そんな美少女の様子に委細構わず、カシムは自然に言葉を続ける。「こんな、『へたくそ』の相手をさせられちゃってさ。大変だろお？」

「うっがーッッ!!」

やたらと広い寝室に、レイド王子の咆哮が木霊する。

「うるさいぞ、チンピラ」

「て、て、て、て、てめえっ、言うに事欠いて『へたくそ』だとおおおおっ!?!」

「ほほう、というつと、君はまさかあれで自分をがセックスが上手いと思っただと」

思いつきり激昂するレイドの氣勢を制して、カシムは落ち着いた声で言っ。

「お、オレのどこがへたくそだつてんだ!？」

「全部」

一言で斬り捨てる。

「まあ、といつても、俺がこの部屋に入ってきたのは最後の辺りだったけど……あれだけ見ても、十分不合格だな」

「だから、何がだ」

まったくわかっていないレイドに、ため息交じりに答えてやる。

「あのねえ。一言も相手の承諾無しに相手の中に射精するなんて、思い切り最低なマナーなんだってば。本当なら、お互いにどのくらい高まつてるか確認しあつて、タイミングを合わせて同時に絶頂というのが理想的だし、それができなくても出す前に声をかけるのが最低限のマナーだ。それを、黙つたまま腰にへばりついて、いきなり出して、はい終わり、か……君は背後霊か？」

「あが……が、ぎぎぐぐ」

齒軋りまでして悔しがるレイドだが、そこであることに気づく。

「てめえ、そこまで詳しいってことは処女じゃねえってことか!？」

「そうだったらただじゃ済まさん、といわんばかりに剣呑に問い詰めてくる。

だが、カシムは飄々と、

「いや、師匠の受け売りだ。もし、そーいうクズなチンピラ野郎を見つけたら、もれなく去勢蹴りで、陰囊踏み潰しとけと言いつけられてる」

レイドは身の危険を感じ、とつさに股間を抑え後ずさる。

「……それと、処女かという質問だが。俺自身半信半疑だったが、さつき確認してみたら、確かに処女だったぞ」

「確認? ……まあ良い。それだったら、さっさとこっちに来い。こいつと一緒にひいひい言わせてやるぜ」

とりあえず処女であるという事で、それ以上深く考えないようにしなから、カシムをベッドに誘う。

「ふむ、その子とか、それは確かに魅力的なお誘いなんだが……残

念極まることに、すでに先客がいるんでね。できないんだわ、これが」

「先客だあ？ この後宮に俺以外の男はいないはずだぞ」

「ふふーん、それがねえ。ちょーと一目ぼれしちゃって、そいつに思わず俺の始めてを捧げちゃった。ついさっき……ちなみに、そのとき血が出たから処女だと確信したわけ」

「んだとお。どこのどいつだ！」

声を荒げるレイドに、カシムは黙って、首の下から足首まで覆う長衣の裾を掴む。

「それはそれ、論より証拠ってね。今紹介するよ」

そう言って、カシムはゆっくりと裾を持ち上げていく。

徐々にその純白でほっそりとした足があらわになり、それが膝、太ももときて、そしてさらにその上まであらわにする。

レイドも怒りも忘れ、思わずその光景に見入ってしまう。

のだが、それもつかの間で、次の瞬間にはその目が驚愕に見開かれる。

その股間を覆うものは布切れ一枚なかった……つまり下着すらはいていなかったのである。しかもそれだけではなく、何よりもレイドを驚かせたのは……

「何だそりゃああー！！」

震える指でカシムの股間……そこに深々と突き刺さっている花瓶を指差し、レイドは思い切り絶叫する。

そのあまりに非常識で、どこか淫靡なその光景にレイドも、そして褐色の美少女すらも言葉を忘れ見入ってしまう。

長衣の裾を捲り上げ、さらされた股間より顔を出している花瓶の頭から、血が滴り落ち、ポツツと、カシムの部屋よりさらに豪華な絨毯の上に赤い斑点を作る。

そう、出血していた。

その花瓶は、確かこの後宮内でよく見るもので、細い円筒状をし

た上質の陶器の花瓶である。それをくわえ込み、出血しているということは……

(あの花瓶で、処女を破ったってのか、んなばかなっ!?)

あまりの結論に、レイドの脳はそれを理解することを拒否する。

だが、あくまで能天気なカシムの声がいやでも耳に入る。

「いやいや、ちょっとひまを持って余していたら、この花瓶君が目に入ってたね。めつたに見ない上物についつい目を奪われちゃったとおもったら。気が付いたら、お互いこういう関係になっちゃってたわけ」

「嘘つけえっ!!!」

「フツ、道ならぬ恋を目の当たりにした奴は、大抵そう言うんだよね」

あからさまに大嘘をのたまうカシムに、激昂するレイドだが、そこをさらに鼻で笑われてしまう。

それに、レイドの頭に血が上がる。

「てめえ! そんな花瓶で膜破るほど、オレがいやだったのか!？」

「そういうわけでも……あるかな」

持ち上げた裾を直しながら、カシムは飄々と答える。

「……こんな上物の陶器だとね。もう表面がすべすべしちゃってさ……そして何よりも」

そこまで言って、再びレイドの股間に目をやる。

そこは、カシムのあの異常な状態を見たときから、これ以上ないというぐらいに猛りその質量を増大させていた、のだが。

カシムはそれをじっくり観察し、あっさりと言ったのける。

「君のより、太くて長くて、立派だしねえ」

レイドの中で太いものが切れた。本日二度目である。

「……!!!」

自分でもわけがわからないようなことを叫び、手近にあるものを手当たり次第カシムに投げつける。

いつもなら淫靡な空気と乙女の鳴き声が響くその寝室に、その日

に限り、置時計や枕や剃刀やらが飛び交った。

「あつはつはつは！！ いやいや、あのチンピラ王子の顔ったら」
必要最低限の明かり以外消され、薄暗くなった通路にて、カシムの大笑いが響く。

あれから、カシムととばつちりを食った褐色の美少女は、レイドの寢室を追い出されてしまった。

というより、ぶち切れ状況もろくに把握できない状況のレイドの被害が、この美少女にも及ぶと判断したカシムが強引に連れ出したのであるが。

豪快に笑っていたカシムだが、唐突に痛み顔に顔を歪め身をかがめる。

「ツツー……やっぱ、まだ腹筋を動かすと、きついなこりゃ」

「あ、あの、大丈夫ですか？」

その様子に、褐色の美少女が慌ててカシムの傍に寄る。

あまりに自然な様子だったので、つい失念してしまうが。彼女はついさつき処女を破ったのである、己自ら。

美少女は自分があの王子に始めてを奪われたときのことを思い出し、身震いする。

その後、痛みとどうしようもない哀しみで、一日中泣いた。そしてその日の晩、また呼ばれた。

あの苦痛を、今日の前の女性が感じているのだと思うと、疑問が浮かんでくる。

「……どうして、そのようなことをしたのですか？」

「うーん、痛いとは聞いてたんだが、まさかこれほどとはね。ちょっと読みが甘かった」

あつさりと、気負い無しの答えが返ってきて、拍子抜けする。

そこには哀しみの一欠片も見当たらない。

「いえ……そうではなくて……」

「それよりさ」

今度は言葉途中に質問で遮られてしまう。

「名前は？」

「はい？」

簡単な質問なのだが、思わず聞き返してしまう。

「だから名前……さっき聞いたけど、結局あのチンピラ君が邪魔してくれちゃっただろ？」

「は、はあ……」

チンピラというスラングを理解できない美少女は曖昧な返事を返す。

「どうやら、あのレイド王子のことを言っていることだけは理解できたのだが。」

「俺、君と仲良くなりたいたんだよね。となると、お互いに名前を教えあうのが、付き合いの第一歩だと、思わない？」

「私と……仲良く、ですか？」

そのようなことを言ってくれたものなど、誰一人いなかった……この異国の地では。いや、もはや遙か彼方となった故郷の地でさえ。「そそ、さっき聞いて知ってるだろうけど、俺はカシム……で、君は？」

「私は……」

轟音が美少女の返事に覆い被さる。

金属の音高く鳴る音……まるで金属鎧を着た何者かがこちらに爆走してきているかのような……

「カーシムー！」

「どおわっ！」

その音の元凶が、すさまじいスピードで駆け抜けたかと思うと、カシムの姿が消えた。

どうやら、駆け抜けざまにカシムの首根っこを掴みそのまま引きずっていったようである。金属の音と、カシムの悲鳴がだんだんと遠のいていく。

「……………」

呆然と取り残された褐色の美少女。

あっという間に消えてしまったカシムの姿を見送りながら、ポツリと、

「……まるで、風のような人……」
いろいろな意味でそう思った。

カシムに割り当てられた部屋の扉が乱暴に開け放たれ、飛び込むように金属の塊、いや鎧を着た騎士が駆け込んでくる。

「見つけた。連れて来たぞ！」

中で待っているメイドに向かって、端的に報告する。

「ああ、ありがとうございます。エリシエル様」

「……て、何でエリス君とレフィ君が結託してるわけ？」

後ろ手で首根っこを引きずられているカシムが疑問の声をあげる。

「うるさい！ 黙ってる！」

エリスはそんなことに耳を貸すことなく、怒鳴りつけ、カシムの身体をその場に立ち上がらせる。

カシムが自分の足で立ったのを確認すると、ためらいなくその長衣の裾を捲り上げる。

「おおっ！ エリス君てば大胆！」

「やかましいっ！ この馬鹿！」

ふざけるカシムを罵倒し、そしてさらされた股間を見てもう一度罵倒する。

「このっ……馬鹿者が！ なんて真似を！！」

いまだ突き刺さったままの花瓶を見て、エリスは思い切り罵り声を上げる。

「うーん、だつて、エリス君がつれないから」

「ふざけるな！」

奇妙に身をくねらせ、甘ったるい声を出すカシムに、エリスはもはや絶叫と言って言いぐらいの大声をあげる。

「貴様は、私の言ったことを聞いていたのか！？ 今日、あの時が、

貴様の開放される唯一のチャンスだったんだぞ！」

裾から離れた手で、カシムの胸倉を掴み、一気にまくし立てる。

「いくらふざけてても、それくらいはわかっていると思っただが……まさかこんな真似をしでかすとは……あの時、血の跡を見たとき、貴様を追いかけるべきだった」

「血の跡？」

「貴様が、通路に垂らしていった血の跡だ、気になってそれを辿ってみれば、着いたのは貴様の部屋だ。気になって中で呆然としている彼女を問いただしてみれば……このっ、馬鹿がっ！！」

何度言ってもいい足りないとはかりに、立て続けの三度目の馬鹿をはき捨てる。

「ははは、そう何度も言わないでよ。照れるじゃないか」

「このっ……」

ほとんどカシムの身体を持ち上げるように、首を締め上げてしまっエリス。

その様子に危険を感じたレフィが、慌てて二人に声をかける。

「あ、あの！ お風呂を沸かしていますので、まずカシム様をお入れになったほうが……」

「むっ……それもそうだな」

エリスもそれに納得し、カシムを開放する。

「早くそれを抜いて風呂できれいに洗って来い。それからきちんと薬を塗るんだ。そうしないと、とんでもないことになるぞ！」

「はいはい、それじゃあ、と」

エリスの言葉に、カシムは無造作に長衣の裾を捲り上げようとする。

「ば、馬鹿者。こっちを向いてやるな」

「……さっき自分で捲って、じっくり見たくせに」

いまさらながら、真っ赤になって恥ずかしがるエリスに、しょうがなしにカシムは背を向け、しばらくこそこそとする。

その動きが、唐突に止まる。

「あゝ、二人とも、聞いてくれないか？」

「なんだ？」

「なんですか？」

「その……なんだ、どうやら血が乾いて固まってしまったようで……花瓶がへばりついて、抜けなくなっただけなんだが……どろしよ〜」

絶句。

「こ、このつ、大馬鹿　　ッ!!」

エリスの怒りの咆哮は、後宮中を揺るがすほどだった。

3話

?・目覚め

後宮創立以来まれに見る騒動の一夜は終わり、朝日がその姿をあらわす。

普段は城の影となり、めったに日光の指さない後宮の中庭にもこのときだけうらかな柔らかな朝の光が舞い降りる。

窓からさす光を感じ、柔らかなベッドの中でカシムは気持ちよさげに寝返りを打った。

「……様、カシム様、朝です。起きてください」
「うーん？」

遠慮がちな声だが、わりかし寝起きのいいカシムはそれだけで意識を覚醒し始める。

感じるのは声と同じく弱々しく揺すられる感覚。

寝ぼけ頭で相手が誰であるのか瞬時に悟る。

顔の表に笑みを出さないように、寝ぼけた声をだす。

「レフィ〜……あれだけ言ったのに、様付けしてる〜」

閉じた瞼の向こうで、戸惑いの気配を感じる。

「お仕置き〜」

問答無用で、自分を揺する気配を抱きしめる。

昨日も堪能したレフィの細く柔らかな肢体の感触、それはまるで絹のような……ような。

「あれ？ 硬い？」

まるで銅像を抱きしめたような異質な感覚に、カシムは目を見開く。するとそこには、

「……目が覚めたか」

鉄兜の面がアップで映り、その中から不機嫌な声が飛び出してくる。

「やあ、おはようエリス君……レフィ君は？」

そう尋ねるカシムの目は、相変わらず抱きしめたままのエリスの向こうにメイド服が見えた。

「むー、どおりで声が小さいと思ったら、レフィ君ってばそんなに離れてたのか」

頬をむくれさせ、抗議するカシムに、レフィはおずおずと……、

「す、すみません。ですが、カシム様を起こそうとしたら、エリシエル様が代わりにやるといつてくださって……」

「うーん、何？ エリス君てば、そんなに俺の寝顔が見たかったの？」

「違う！ 貴様のことだから起抜けに乗じてレフィリアをベッドに誘い込むだろうと予測して、それを未然に防ぐためだ」

「むー、俺はそんなことしないよ」

さらにむくれるカシムに、エリスはまだ鎧の背に回された腕を指し示し、

「では、これはなんだ？」

「これは抱きしめてるだけ。ちょっとしたお茶目だよ」

「……さつさと離せ」

声にちよつとだけ殺気をこめて言う。

「ハイハイ……今度はできれば、その無粋な鎧を脱いでからにして欲しいな。ついでにその兜も」

「うるさい！」

「へえ、じゃあ今日はエリス君が案内してくれるんだ？」

寝着を脱ぎ、下着だけのほっそりとした肢体をさらしながら、カシムは嬉しそうに尋ねる。エリスとレフィの前だと言うのに羞恥の欠片もない。

逆に見ている方が恥ずかしくなり、エリスは動揺を抑えながら答える。

「そつだ……貴様から目を離すとろくなことがないという事は昨

日の一件でいやというほど理解した。よって、もともとレフィリアの仕事なのだが、私が見張りも兼ね後宮の案内をすることにしたのだ」

「ふうん」

エリスの説明に相槌を打ちながら、エリスは占いの衣装である純白の長衣に袖を通す。

それを見て、エリスは顔をしかめる。

「カシム……後宮内をその格好でうろつきまわるつもりか？」

「そうですね、カシム様。この部屋には貴女のためにたくさんのドレスが用意されているんですよ？ それを着ないんですか？」

レフィも心底不思議そうにたずねる。彼女の感覚では、あのきらびやかなドレスを放って、何の変哲もない長衣を選ぶなど信じられない。

「あゝ、だめだめ。俺ってば、そういう動きにくそうなのはだめだね。どちらかというと、こういうゆったりとしたのが良いんだよ」
そういつて、首から足首までをゆったりと覆う長衣をパンツと叩く。

「……でも、この後宮の中でそんな格好をする人はいませんよ……」
カシムが恥をかいてしまうのではないかと、気が気でないレフィが何とか説得しようとする可能性を示唆する。

が、カシムはまたも飄々と、

「それが？ この後宮の女の子たちがどういう格好してようが俺には関係ないだろう？」

「関係ない……ですか？」

「そりゃそうだよ。こういう格好をしているのが俺。自分の意志でこの格好してるんだから、どんなやつに何を言われようがまったく気にするいわれはないね」

「はあ……」

自信満々に宣言され、レフィは二の句を次げなくなる。

エリスはというと、女だてらに金属鎧に鉄兜とで武装している手

前、カシムの言葉を否定できる立場にないため、黙るしかない。

そのエリスに、カシムはニヤツと笑い、からかうように、

「……でも、エリス君がその鎧を脱いでドレスを着てくれるっていうのなら、俺もドレスを着ても良いけどね」

「……………」

カシムの言葉に、レフィがすぎるような視線をエリスに投げかける。

手痛い攻撃に、エリスは目をそらし、慚然とした声でカシムをせかす。

「もうそれでかまわんから、さつさと朝食を済ませる。私もそれほどひまじゃないんだ」

エリスのその様子にカシムは勝利の笑みを浮かべる。

?・後宮

昨夜はただ単に自室と王子の寝室を往復しただけのカシムは、改めて案内される後宮の豪華絢爛さに、ただあきれる。

「……よくもまあ、愛人を詰め込むだけの建築物にこれだけの金をつぎ込めたもんだね」

「……………王も殿下には甘い方なのでな」

「はっ、賢王として名高いレムン国王も人の親ってわけね。しかもベタ甘の」

苦々しく答えるエリスに、カシムは情け容赦なく酷評する。

「……………」

あまりに無礼な批評だが、エリスはそれを咎めることはなかった。カシムにそれを言っても無駄であることはわかっていたし、それは紛れもない事実であったから。……ただ、言うなれば、王と王子の関係にはカシムの知らない深い事情があること……それをエリスは知っていたが、これもまた言うつもりはなかった。

黙ってしまったエリスから注意をそらしたカシムは、無目的にあたりを見渡す。

そこに目的の物を見つけれず、カシムは無造作にエリスの鎧の背中に掌を叩きつける。そこまでしないと中まで衝撃が伝わらないのである。

「ねえねえ、エリス君。今度はこの後宮で女の子たちが集まるところに案内してくれない？」

「っ！」

カシムの要望に、エリスはかすかに動揺を示す。そして沈黙。先ほどの沈黙とは明らかに雰囲気が違う。それに気づかぬ振りをして、カシムは続ける。

「だってさ、エリス君てばさつきから、人気のないところばかり案内してるんだもん。メイド以外誰も見かけないってのは、いささか退屈だよ。人気のない場所で、俺を押し倒してくれるって言うのなら、うれしいんだけど、どうもそういう雰囲気でもないし……」

カシムの冗談交じりの言葉に返ってきたのは、重い重いため息。

「カシム……貴様は自分の立場がわかってるのか？」

「うん？ そりゃあ、チンピラ王子に拉致され、哀れ純潔を失った、可哀想な美貌の女占い師……てなところだろ？」

きよとんとしつ、カシムはすらすらと答える。

「……一部、詐称の痕跡があるが、まあ大体そういうことだ」

「というと？」

「この後宮にいる少女のあらかたはこの国で地位の高い貴族の令嬢方だ。殿下がこの後宮を打建てられてより、この国の有力者たちが喜び勇んで己が息女を差し出したのでな」

「ふむふむ、まあそんなところだろうね。うまくいけば、この国の未来の王妃に自分の娘がなるかもしれない。そうなれば、その父親は晴れて王族の一員って訳だ」

一般常識を語るように、こともなげにカシムは貴族の本音を言い表す。

「……そして、令嬢方たちは皆が皆、親の期待にこたえるためにより多くの殿下のご寵愛を受けられるように日々互いに牽制しあって

いる」

「実に不健康なことだね」

「……一部の例外……あついでに貴様を除いてな」

「うんうん、そうだろうねえ」

皮肉をこめられたエリスの言葉にも、何気にかシムは相槌を打つ。

「そこで、今の貴様の立場は、市井の……しかも道端で店を開くような卑しい占い師風情が、ぽつと出て殿下のご寵愛をさらっていつてしまった不埒者、というわけだ」

「うわ、ひどい誤解だなあ」

「そのような現状にて、貴様を殿下の側室たちの集会場所になど連れて行けば……どうなるか、想像はつくな？」

言葉に十分の脅しを込め、エリスはカシムの顔を振り返る。

だが、カシムの顔にはおびえ一つ無く……

「……まあ、大体想像がつくけど、俺がお嬢様のいびりで、泣く泣く自殺すると、思う？」

「いや、それはまったく可能性はゼロだろう」

エリスは確信をこめて断言する。

「ならいいじゃん」

「だめだ。たとえその可能性が無くとも、余計な厄介事にわざわざ首を突っ込ませるわけにはいかん。貴様も言われもない非難を受け、嫌がらせを受けるのは気分がよくないだろう」

「ふむ、まあ、ね」

それにはカシムも素直に頷く。占い師という商売柄、そういった方面の嫌がらせなどはかなり経験があった。まあそれは同時に、免疫ができたことでもあるのだが。

「ならば、用も無いのにそのような場所に行く事も無い。もともとこの後宮に入ったものは殿下に呼び出される以外に仕事も無いのだから、おとなしく自室にいるか、私が案内する場所で暇をつぶすかをしていればいいのだ」

そうすれば余計な厄介事は避けられると、エリスは締めくくる。

「ふーむ、しかしそうなると残念だなあ……」

心底残念そうに、カシムは腕を組み、唸る。

その様子に、エリスはほとんど反射的に不信感を募らせる。

「何を残念がつている……まさか、また何かを企んでいるのか？」

「エリス君つてば、ひどいなあ。そうじゃなくてね、仲良くなりたい子がいるんだよ。そこに行けば、その子に会えると思うんだけどなあ」

「はあ……貴様は……」

カシムの本音に、エリスはただため息をつく。

「レフィリアだけでなく、その娘にまで手を出そうというのか……」

「うん、その通り。ちなみに、エリス君もその中に入ってるよ」

「……貴様は、目に付く女に次から次にと……ここにくる前の、普段からも貴様はそうなのか？」

「そりゃあね。昨日も言ったけど……て、言ったのはレフィ君にかえとね、師匠の言いつけで、出会う可愛い女の子とはもれなく親密にならなくちゃいけないんだよ」

自信を込め、胸を張って宣言する。が、エリスはそれに冷たく、「師匠の言いつけで仕方なく、ではなく、貴様は喜んでやっているように見えるがな」

「そりゃ当然。だって、楽しいもん」

「はあ、貴様は……」

エリスはなんとなく泣きたくなる。このカシムと出会って、たった一日しかたっていないのに、まるで一年ほどこのめちゃくちゃな女占い師に振り回されているような極度の疲労感に襲われる。

「……お楽しみのところ悪いが。側室の誰かと親密になるというのは、無理だ。さっきも言ったとおり、貴様はこの後宮内では異分子でしかないのだから……諦める」

「ははは、大丈夫大丈夫、そのくらいの障害、俺にとってはちょうど良いくらいだよ」

「私は、貴様が騒動を起こすから、諦めてくれといっているんだが

……」

怒りを抑えて、言い聞かせようとする。

半ば無理だとわかっていたのだが……やはり無理だったようで、カシムは嬉しそうに、エリスの後方を指差す。

「ははは、愛しいエリス君の頼みだからね。聞いてやりたいのは山々なんだけど、さすがの俺も運命には逆らいがたいねえ」

「運命？」

「そ、運命……だってさ、もうそこまで来てるんだもの」

いやな予感を抱えながら、エリスはカシムの指差す方角を振り返る。

そこには、褐色の肌をした美少女がじつとこちらを伺っていた。

その控えめな物腰は、地味ともいえる派手さの無いドレスとあいまって、清楚な風情をかもし出している。

「あの娘は……」

眉をしかめるエリスの横を、カシムが嬉しげに通り過ぎ、その美少女の元へと歩み寄っていく。

エリスは一瞬、それを止めるべきか否か、迷い……結局はそのまま行かせてしまった。

昨夜出会った少女……確かカシムと名乗っていた……と男子禁制の後宮の護衛についている女騎士エリシエルの姿を見つけたとき、その場を離れるべきだと理性では考えていた。

エリシエルと一緒にだということは、彼女の口から自分の正体を話されることとなるだろう……そうならば、あの少女も自分から離れていく、そうとしか考えられない。

ならば、自分から離れていくべきだ……というのが今までの考え方であり、ずっとそうしてきた。

だと言つのに、なぜか足は動こうとせず、目は二人の姿を追っていた。

その二人の顔が……エリシエルの顔は鉄兜に隠れているのだが……

…とても楽しそうに笑っているようであったのがその理由かもしれない。この後宮に来てより、自分は一度も笑ったことが無いから……
そして、少女がこちらの存在に気づき、指で指し示し、エリシエルに語りかける。

その無邪気ともいえる表情から、彼女がまだ自分のことを聞いてはいない事がわかる。

だが、それも一瞬きするころには、エリシエルから伝えられるだろう。

そう思っていた褐色の美少女だが、問題のカシムという少女は、あっさりとこちらに向かつて歩いてくる……ニコニコと。

そして、元気良く片手を挙げ……

「やあ、またあったね」

「……………?」

美少女は、返事が返せない。というより、何も考えられない状態だった。

目の前のカシムという少女の存在が、何から何まで意外であって……まるで夢を見ているような感覚にあった。

「? どうかした?」

カシムの不思議そうな声に、はっと我に返る。そして、相手の挨拶に返事も返さないという非礼に気づき、慌てて口を動かす。

「は、はい。またお会いしましたね。……カシム様」

「む……っ」

とりあえず無難な返事を返せたと思った矢先、見る間に相手の顔がむくれていく。

「あ、あの、カシム様……私、何か失礼をしてしまったのでしょうか?」

「カシム」

「はい?」

「俺のことはカシムって呼ぶよーに」

「え? 呼び捨てにしろ、と?」

「そつ」

美少女は返事を躊躇う……相手を呼び捨てにするなど、今までたった一人の妹にしかしたことが無い……それ以外は、敬称か役職などで呼びかけるのが常だった。

「ですが……」

困ったような返事をもらすと、カシムは勝手にぽんつと手を打つ。「ああ、そういえば、まだ名前を聞いてなかったっけ。昨日も良い所でエリス君にかっさらわれてしまったから……じゃあ、今聞き直そうつと」

「はい？」

「さて、俺の名前はもう昨日言ったから、今度は君の名前ね」

相手の戸惑いなど意にも介さず、勝手に話を進める。

だがその質問は、美少女の躊躇いをさらに大きくするものだった。名前を知らない……それはつまり、まだカシムが美少女の正体を知らないということ……そして、名前を知るということは、それを知らせてしまうということである。

知れば、この少女も見る目を変えるだろう。忌まわしいものを見るような目、蔑みを込めた目……憎悪を込めた目。

この国で、自分がそういう目で見られることは必然である。それはわかっている。

でも……罪深いことかもしれないが……当たり前のように自然に接してくれるカシムという少女には、わずかな間だけでも良い、本当のことを知られずにこのまま話していたかった。

その想いが、口に鍵を掛け、言葉を封じてしまう。

沈黙……そして自然と顔を俯けてしまう。

「あれ？ どうしたの？」

カシムの不思議そうな声……純粹にこちらを心配する声である。それを心地よいと感じるが故に、美少女の口はさらに重く閉まってしまう。

その進展の無い沈黙に、終止符を打ったのは……やたら居丈高

な、高い女の声だった。

「ここにいたのね。リディア・アトゥム・ラー！」

「っ……！」

「ご丁寧にもフルネームでの呼びかけに、美少女……リディアは己の立っている世界が崩れ落ちる感覚に陥った。

己の名に続くアトゥム・ラーという言葉……それは彼女の故国の名である。

国名を名の一部とする者……それはその国の王族、王の直系の血筋を引く者しかない。

だが、その名は今のリディアにとって罪の証でしかない。

祖国の犯した罪をあがなうために、リディアはここに送られたのであるのだから……

？・リディア

「いつもどこに隠れてるかと思えば、こんな所でこそそそしていたのね……実に貴女らしいこと」

実にいやみったらしく、後ろに幾人もの女たちを従えたきらびやかな……はつきりといえば派手な……ドレスを身にまとった美女がリディアに蔑んだ視線とともに毒舌を放つ。

いつもなら、その声を聞くだけで恐怖と屈辱に歯を食いしばるのだが、このときだけは別のことが気にかかって、それどころではなかった。

「リディア……アトゥム・ラー？」

カシムの驚きの声が、耳に痛かった。

その名で、彼女がリディアの正体を悟ったことは疑いようも無い。いつもそうであった。リディアが何をしようと、運命は彼女から何の躊躇いも無く様々なものを失わせていく。

「あら……貴女、見ない顔ね」

派手な美女がようやくと言った感じに、カシムの存在に気づく。

そして、自分に注意を向けず、カシムの方を青ざめた顔で見つめ

るリディアの様子にも。

相手の弱みを見つけることに掛けては、右に出るものはいない彼女の目が、一瞬でその状況を把握し、口元にいやらしい笑みを浮かべる。

「そう、貴女、この女が何者か知らなかったのね」

美女の言葉に、リディアは見を硬くする。

いつも無反応な彼女の反応に、美女は悦に入っただように、さらにカシムに語りかける。

「クスクス……知らなかったからこの女なんかと仲良くしていたのね。可哀想に……だから、教えてあげるわ。この女は、リディア・アトウム・ラー……アトウム・ラー、この忌まわしい名を知らないはず無いでしょう?」

「そりゃあ、ね。アトウム・ラー……太陽の神の名であり、その神を主神と祭る宗教国家の名前でもある」

「そう、この女はその王族……もう、わかったでしょう?」

「ああ、皆まで言う必要は無いよ」

カシムの答えに、美女は満足そうに頷き。そしてリディアは絶望のため褐色の肌が見る間に色を失っていく。

「ふふ、そうこの女は……」

「お姫様なんだね!」

「はい?」

握り拳を作り、きらきらと目を輝かせるカシムに、リディアと美女、そしてその後ろにいる取り巻きの美少女たちの皆の目が点になる。

誰もが動くことのできない、静寂の中、カシムのはしゃいだ声だけが響く。

「そうかあ、お姫様かあ……道理で可愛いと思ったら、うんうん、なるほどね」

いきなりリディアの方を向くと、その手をぎゅっと握る。

「ひゃっ」

驚きのあまり、硬直が解け身を竦めるリディア。

「いやいや、お姫様の友達なんて……いや、いるんだけど、そいつがまた『お姫様』なんて呼び方が死ぬほど似合わない子でね。君みたいに見えるからに『お姫様』な子なんて、見るの初めてだよ。いやあ、感激だなあ」

握った手をぶんぶん振りながら、その感動のほどを言葉にして言い表す。

「え？ はい？ あ、あの……」

あまりに予想外な反応に、パニックに陥るリディア。

自分が姫ということは生まれたときからのことであり、カシムがなぜこんな感動しているのか、理解の範疇外であった。

しかし相手は、そんなリディアの困惑などかまわずにべたべたと肩や腰に触れてくる。

馴れ馴れしい行為だが、不思議と不快感は感じない。

「ねえ、改めて友人になってくれないかな？ もう、ぜひぜひ仲良くなりたくなってきた」

「あの……でも……」

果たしてこの少女は人の話を理解しているのか、そんなことをリディアが考え始めた矢先、端から苛立たしげな声がかかる。

「ちょっと、貴女！」

「うん？ 何かな、やたらと派手なお姉さん」

何気ないカシムの発言に、その派手な美女のこめかみがピクツと痙攣する。

思わず怒声をあげそうになるが、何とかそんな品性に欠ける行動を思いとどまる。

「……し、失礼な方ね。いったい、貴女は誰なの？」

「俺？ カシムだよ」

「カシム……ああ、殿下が気まぐれで呼び寄せた下賤な占い師の娘ね」

その名に思い当たると瞬時に、その美女の顔から礼儀というもの

があっさりと取り払われる。後に残ったのは侮蔑と嫌悪……リディアに向けられていた表情と同じである。

「道理でこの私を知らないような素振りと思えば、無知蒙昧な下賤の出だったのね。納得だわ。ふふふ、無知な下賤の民と汚らわしい売女、とつてもお似合いな組み合わせだこと。好きなだけ仲良くすると良いわ、私が心から祝福してあげてよ」

「そうかい、いやありがとう、じゃ、もう良いよ」

美女の嫌味つたらしい科白を、カシムはあっさりと流し、何事も無かったかのようにリディアに向き直る。

そのカシムの態度に、美女のこめかみはさらに激しく痙攣する。

もうほとんど、今にでも爆発しそうな雰囲気であり、後ろに控えた少女たちの間にも動揺が生じている。

それをおろおろと見守っていたリディアは、これではいけないと、カシムの耳元に口を寄せ、注意をする。

「カシム様……この方は……」

「様？」

「……カシム……あの方は、ローラ・レヴァンド様……この国の名家レヴァンド家のご息女なのです。もう少し、言葉に気をつけないと……」

「レヴァンド家!？」

せっかくリディアが声をひそめて忠告しているというのに、カシムの驚きの声は、あっさりと美女……ローラまで届く音量であった。リディアは思わず身を硬くする。

だが、彼女が予想したような怒りの気配は無く、見るとローラは優越感に満ちた表情でカシムを眺めていた。

「ふふ、おわかりになったようね。貴女がいったい誰に、そんな不遜な口を聞いていたのか……」

カシムの驚きを勝手に解釈して、ローラは口元に手を当て優雅に微笑む。

「いくら下賤の民でもご存知でしょうね。我がレヴァンド家の当主

であられる父上はかつての大戦にて国王軍の軍師として名を馳せ、陛下の懐刀とまで呼ばれた天才軍師にして、現宰相……」

「あの噂の頭でっかちの戦争馬鹿ね」

「ンナツ!!」

悦に入ってお家自慢をはじめたローラを、カシムの軽い一言が豪快に撃沈する。

あまりの暴言に、取り巻きの少女たちは一様に顔色を失い。リディアにいたっては、生きた心地すら失い、ただ口をパクパクさせ、カシムの顔を呆然と見上げる。

「な、な……なんですつてええつ!？」

硬直が解けると、当然のことながらローラは怒りの雄叫びを上げる。

カシムはそれを宥めるように、彼女の目の前で掌をひらひらさせ。「いやいや、俺がそう思ってるわけでもないんだが……あちこちの噂でね。レヴァンド家のロレンツ公も、大戦時には数々の功績を上げ、天才軍師とまで呼ばれたものの……いざ、戦争が終わり平和な時代となると、どうもぱつとした活躍を見せないって話で。実際、二年前のアトゥム国との戦争があるまで、大抵の奴が名前を忘れていたっていう……」

すらすらすると、事細かに噂を再現してみせる。

「そして、ついた字名が『戦争馬鹿学者』……ほかに、『乱世の英雄、治世の凡臣』とか」

「キーーっ!!」

たまりかねたように、奇声をあげ、カシムの言をさえぎるローラ。「こ、こ、こ……この、下賤な占い師の分際で! よくも、私の父上を侮辱してくれましたわね!!」

「うん? いや別に、俺はそんなつもりはまったく無いが。ただ、そいう噂を、ここにくる前にちよつと聞いてたもんでね」

「黙りなさい! 確かに父上は、普段は非常にのんびりとしていて、娘の私ですら名声をほんの少し疑わしく思っていたりしたこともあ

りましたが……貴女のような下賤の者に言われる筋合いは無いですわ！！」

「……一応、言っておくと。全然フォローになってないけど？」

カシムの突込みを無視して、ローラは興奮してまくし立てる。

「もう、手遅れですよ！ もはや、我がレヴァンド家を侮辱した罪は絶対に消えません。ええ、許すものですか！ 貴女には、その罪を徹底的にあがなって貰いますわ」

「まあまあ、そう興奮しないで」

ローラの剣幕とは対称的に、穏やかな風情でカシムは相手に歩み寄ろうとする。

「近寄らないで！ 汚らわしい！ 貴女のような下賤の者が、一時とはいえ、殿下のご寵愛を受けるだなんて、考えるだけでおぞましい！」

寒気でもするかのように、己が体を抱きしめる。どうも演技過剰の向があるようである。

「決して勘違いをしないことね。殿下が貴女を抱くのは、単なる好奇心。貴女みたいな礼儀も何も知らないそこの野良犬に等しい下衆になんか、殿下の正室になる資格なんか無いのだから！」

さすがに、カシムはそれにうんざりと、訂正を加える。

「あゝ、盛り上がっていると悪いけど……別に俺、あんなチンピラの正室になんかなりたくないって……なりたいたらご自由に、俺は邪魔しないからさ」

「……チンピラ？」

その聞きなれない単語に、ローラは一瞬だけ怒りも忘れて尋ね返す。

名家の令嬢として、温室の中で育ってきた彼女がそのようなスラングを知らないのは無理も無い。止まってしまった場の流れの中、取り巻きの一人がローラの傍に進み出る。

カシムはその進み出た少女を見て口笛を吹く。

進み出たのは、この国では珍しい青い髪の理知的な美少女。

知性の感じられる美貌に、カシムは忌憚無く賞賛をあらわす。

その少女がローラの耳元に口を寄せ、何かを囁くと、見る間にローラの表情が険しくなる。察するに、チンピラの語彙を教えているようである。

「なっ!?! な、な、な!」

ローラの唇がわななき、肩が震える。

「で、殿下を……レイド王子が、下賤の民の無法者ですってえ!」

「あ、そういう風に説明したの……まあ、当たらずとも遠からずつてところかね」

いかにもお嬢様な回答に、青髪の美少女がチンピラの語意を知つていても、実際にはどこかの貴族の息女であろうと予測付ける。

可愛い子と目をつけると、その者に対して自然とチェックを入れるのは、もはや習慣であつたりする。

今は、状況が状況であるために、あからさまに声をかけたりはさすがにしないが。

「ゆ、ゆ、許しがたい暴言ですわ! 貴女、自分を何様だと思つてるの!?!」

「俺様」

即答。実は、即座に答えたあと、あまりに月並みな返し方であつたため、言つた本人少し恥ずかしくなつたりした。

ちよつと照れるカシムの目の前で、ローラの美貌がまさに鬼女の面という形容がふさわしい形相に変化していく。

「あ、貴女のような無礼者は、この場で成敗してくれませう! セシル!」

ローラの悲鳴のような呼びかけを受け、取り巻きの中から、先ほどの美少女とはまた違う少女が前に出る。

こちらは、この国でよく見かける色素の抜けたかのような銀髪の、少し冷たい感じがする美少女である。

その少女もカシムの目を引いた……それは、その美貌だけでなく、雰囲気ごとく無くエリスに似ているように感じたからである。

「セシル！ この卑しい女を徹底的に痛めつけてあげなさい！」

？・セシル

ローラの命令に、顔をしかめたのはそれを聞いていたカシムである。

「こらこら、ローラ君、無茶を言わないように。そんな可愛い子に、そんなことが……」

不可能だろうと、言おうとしてその言葉を飲み込む。

セシルと呼ばれた少女は、命令を受け、カシムに向かって構えたのである。

その構えは、カシムの目から見ても見事なもので、何かしらの武術を修めていることが見てとれた。

「……あゝ、なんだ。最近、武術もお嬢様の嗜みの一つになったのかね？」

辟易したようにばやくカシム。

飄々と振舞っているように見えて、カシム自身あからさまに構えないまでも、膝を少し折り、腰を下げ、いつでも反応できるように体勢を整えておく。

構えから察するに、こうでもしていないと、とっさのときに対応できそうに無い。

「しかし……」

カシムが何気に呟く。

「そんなドレス姿で、大立ち回りなんかしないほうが良いと思うんだが……」

ちなみに、セシルの格好は、ローラほど派手ではないにしろ、きちんとした赤いドレスに身を包んでいる。……派手でないとはいえ、動きやすそうな風には決して見えない。

しかし、当のセシルは、カシムの軽口などに耳を貸さず。油断無くこちらを見据える。

(……むゝ、一応俺ってば、今はただの薄幸の美少女占い師……の

はずなのに、何でこのセシル君とやらは、こんなに警戒してくれてんだらう？ 隙が無い〜)

表面で平静を装いながら、心の中で泣き言を抜かす。

半身に構えたセシルの体勢から、カシムに向けて情け容赦なく気が迫が叩きつけられる。

どうやら、一戦は覚悟しなければならないと、ようやくカシムも踏ん切りをつける。

それと同じく、じれたローラの声が、場の均衡を崩す。

「セシル！ 何をしてるの、はや……」

最後まで聞くことなく、セシルの身体が動く。

先日のエリスの動きほどではないが、カシムのそれを確実に超える速度。

だが、カシムは慌てず。冷静に考えを組み立てる。

(……まず、足技は無いな)

何せ、相手の着ているのはドレスである。しかも、腰はコルセットで締め付けられており、まず、蹴りの類は満足に放てない。

そこまで考えると同時に、カシムの顔めがけて、セシルの掌が迫る。

叩きつけるつもりか、掴むつもりか。

それを確かめることなく、カシムは即座にその場にしゃがみこむ。セシルの掌打が頭の上を通り過ぎる。といっても、カシムは速さ

で避けたわけではない。

相手の攻撃に足技が無いとなれば、蹴りの範囲である相手の足元は安全地帯となる。その範囲に身体を縮める動作が、そのあとのセシルの掌打を避ける結果となっただけである。

しゃがんだカシムの目の前に、ヒラヒラとしたドレスのスカートが迫る。

カシムはおもむろに、そのスカートの裾を掴み。掴んだまま立ち上がる。

「おっ、黒！」

立ち上がり、裾を掴んだ腕を高く上げていると、当然スカートはめくれ、その中身が外気にさらされる。ちなみにその中身は、控えめなドレスとは対称的な黒の下着だった。

「あ……なっ！」

カシムにあっさりと攻撃をかわされ、あろうことかスカート捲りをされたセシルは、当然ながら、羞恥と困惑の声をあげる。

慌ててスカートを下ろそうとするが、相手にしつかりと掴まれ捲り上げられているため、びくともしない。しかも、捲り上げられたスカートが相手との間に立ち塞がり、視界を妨害しているために、攻撃もできない。

セシルは混乱する思考の中で、解決策を探り……見つける。

スカートを捲り上げている、それはつまり視界を塞ぐ布地の向こうにカシムが立っているということ。そして、捲り上げられているスカートは足の動きを妨害することは無い。

蹴れば、必ず相手に命中する。

そう判断し、即座に足を振り上げ、正面を横に凧ぐように蹴りを放つ。

だが、予想した手ごたえは感じられず。その代わり、いくら引張っても下げられなかったスカートがヒラヒラと舞い落ちて、元の位置に戻っていく。

塞がっていた視界が徐々に回復していくが……そこにカシムの姿は無い。

蹴り足を上げたまま、呆然とするセシル。

油断無くゆっくりと蹴り足を戻していく。その足首に異変を感じた。

感じた、その瞬間にセシルの身体が宙を舞っていた。

セシルの蹴りを再びしゃがんでやり過ごしたカシム。

もしセシルの追撃があれば、そんな避け方をしたカシムは避ける

ことができなかつただろう。地面に丸まって、即座の反応などできないのだから。

だが、捲り上げられ、舞い落ちるスカートが、カシムの姿をセシルから隠していた。

そのため、追撃は無く、カシムは落ち着いてタイミングを計り、戻ってきた蹴り足の足首を掴み、掬い上げる。

それだけで、目の前のセシルの身体が宙を舞う。

後は、重力に従い背中から地面に叩きつけられる。

「ぐっ……」

衝撃に呻くセシルのスカートの中から顔を出しながら、カシムはもう一度注意してやる。

「ほら、ね。言っただろ？ ドレスなんか着て、暴れないほうが良いって」

そう言つて、カシムは傍らに横たわるセシルの左足を持ち上げる。片足を持ち上げるだけで、相手が立ち上がることを防ぐ。

セシルは力の限りもがくが、左足を掴み上げられた状態では、立ち上がることも、ろくな反撃を出すこともできない。

カシムはニコニコと、地面に転がりもがくセシルの……特に、スカートが捲くれ、剥き出しとなり動きにともないプルプルと震える、黒い下着に包まれたお尻を眺める。

「うーん、よく引き締まった、美事なお尻だねえ。とっても可愛いよ」

「っ！ お、おのれっ！」

セシルは剥き出しになった臀部に感じる舐めるような視線と、そしてカシムの発言に赤面し、さらに激しく抵抗する。

どうにか、残った右足で蹴りを放つが、そんな不利な体勢で放つ蹴りなど、カシムの残った片手であっさりといなされる。

その様を、ローラをはじめ、周囲の少女たちは呆然と眺めていた。武家の出であるセシルに適う者など、この後宮内ではレイド王子もいれて、ただ一人エリシエルだけのはずである。

だが、目の前の現実は一介の占い師にまるで子供のように弄ばれるセシルの姿。

「放せっ、放せっ！」

「ははは、もうちょっとじっくりと鑑賞させてもらってからだよ。こんな美事なお尻めつたに見れるもんじゃないからね」

「……………」

カシムのふざけた返事に、セシルは沈黙する。

言葉とともに抵抗もやめる。

「うん？」

その沈黙に不審なものを感じたカシムは、首をかしげる。

その目の前で、セシルは倒れ、左足首を掴まれたままの状態で軀を捻る。

思い切り、可能な限り身体を捻らせ。身体中の力を溜める。

「……………ちよつと、なんかやばそう……………」

カシムの呟き。

呟いたすぐ後に、セシルの身体から離れるつもりだったが、相手のほうが速かった。

捻った身体とともに、溜めた力を開放し、その勢いで上半身を起き上がらせ、足首を掴んでいるカシムの腕に、右腕を叩きつけようとする。

だが、当然届くはずも無く、その寸前で空ぶった……………かのように見えた。

「ッ……………」

鋭い痛みとともに、カシムが掴んだ手を放す。

見ると、掴んでいた腕の袖が切り裂かれ、その奥の白い肌に傷が生じている。

『キヤー……………ッ！』

ローラの取り巻きの内の、何人かの声だろう。恐怖に引きつった悲鳴が上がる。

彼女らがおびえる原因は、怪我をしたカシムでもなく、右手に刃

物を持ったセシルに、である。

「……おいおい、どこから出したの。そのナイフ」

慌てて間合いを取りながら、カシムは尋ねる。

しかし、セシルは答えようとせず。無言で己のスカートを動きの邪魔にならぬようナイフで切り裂き、構える。その構えには、紛う事無き殺気が思い切り込められている。

その殺気の濃さに、カシムの心臓は怖気づいてしまう。

「こらこら……君って、本当にお嬢様？」

「……関係無い」

ぼそりと、ようやくセシルが答える。小さな呟きだが。

「……これから死ぬ、貴様にはな」

「うっわー……」

真正正銘、本気の脅し文句に、カシムは冷や汗を垂らす。

そういう荒事に慣れていようはずも無い周囲の本当のお嬢様たちは、その雰囲気になんて耐え切れず、徐々にその場を逃げ出し始めている。ちなみに、ローラの姿もすでに無い。

気が付くと、残っているのは二人のほかに、リディアと例の青髪の美少女のみだった。

その二人の観客の視線の中、カシムとセシルはお互いに見つめあい、互いに間合いを計る。セシルは相手ののどを切り裂くために、カシムは何とかその場から逃れるために。

しかし、セシルに微塵のすきも無く、カシムは逃亡を諦めざるおえない。

諦めのため息をつき、目を閉じる。

(まあ、しょうがないか)

閉じられた視界の中で、呼吸を整え、意識を集中する。

そして、セシルの武器を吹き飛ばすための魔術のイメージを創起する。

? . 騎士

「そこまでにしておけ、セシル」

その場にいる四人の誰でもない声で、両者の緊張はあっさりと解ける。

「おお、エリス君」

「……エリス」

カシムは嬉しそうに、セシルは慥然と同じ名を呼ぶ。

「エリス様……」

青髪の美少女も、冷静だったその表情を和らげ、頬を紅潮させてエリスの名を呟く。

そんな中で、リディアは最悪の事態を避けられたことに、一人胸を撫で下ろす。

エリスはずかずかとセシルに向かって歩み寄り、すっと手を差し出す。

「さすがに私も……後宮内での刃傷沙汰を見逃すわけにはいかんな」
「……………」

セシルは慥然としながらも、おとなしくその手にナイフを手渡す。

「レムス！」

「は、はい！ セシル様」

不機嫌なセシルの声に、レムスと呼ばれた青髪の美少女が慌てて返事をする。

セシルに呼ばれるまで、そのレムスの視線はエリスのかぶっている鉄兜に注がれていた。

「戻るぞ」

「はい」

今度は落ち着いて返事をして、さっさときびすを返すセシルの背中を追う。

途中で振り返り、エリスにだけ向かって頭を下げていく。

そのエリスは手渡されたナイフを手で弄びながら、ため息をつく。それに、カシムが少しジト目で、

「刃傷沙汰は見逃せない……て、つまり俺への私刑は見逃すつもり

だったわけだ。道理で登場が遅いと思ったよ」

「それは貴様の自業自得だから……」

悪びれることなく、エリスは肯定する。

「それに……貴様が黙ってやられるはずも無いしな」

「はいはい」

少し面白がっているようなエリスの言葉に、カシムは適当に相槌を打ち、今度はリディアを振り返る。

「さて、やっと静かになった所で、さっきの続きといこうか」

「え？」

カシムの言葉に、すでに安心しきっていたリディアはきよとんとする。

「えと、リディア君だったね。互いの自己紹介も……まあ、多少変則気味だが、終了した。これで、晴れて君と俺は友人同士ということ、で良いかな？」

「え、ええと……その……」

「それとも、俺みたいなのと友人になるのは、嫌？」

それは慌てて否定する。

「い、嫌だなんて、そんなことはありません！ 絶対！」

「じゃあ、了解って訳だ」

ニコニコとカシムが締めくくろうとする……だが、

「でも、その……ごめんなさい！」

「あら？」

「私も貴女と友達になりたいです……貴女といろいろお話してみた
いって思ってます……でも、だめなんです。ごめんなさい」

呆然とするカシムに向かって、深々と頭を下げる。

「え……と、何でか聞いても良いかな？」

何とか搾り出した問いに、リディアの表情が曇り、そして答える。

「……私は、汚れてるから……躯体……魂も……」

「ふえ？」

「ごめんなさいー！」

最後にそついい残し、リディアは足早に走り去ってしまった。

? 誓い

小さくなっていくリディアの背中を見送りながら、カシムはうめく。

「あゝ……………」

しばし、熟考し、そして結論をつけると同時に隣のエリスにすがりつく。

「エリス君、俺振られちゃった……………慰めて〜」

「うつつうしいから、離れる!」

「うつつ、エリス君てば冷たい……………」

邪険に振り払われたカシムは大仰に泣きまねを披露する。

「うつつ、何で振られたかなあ? 最初からフレンドリーに話し掛けてたし、意地悪派手姉ちゃんから庇ってもやったし、嫌われるはず無いのにな……………」

「まったく、貴様は、何から何まで計算ずくか……………」

一応落ち込んでいるカシムに、エリスは深々とため息をつく。

そして、嫌々と声をかける。

「……………安心しろ、おそらく貴様は嫌われてはいない」

「ふえ?」

「彼女が貴様の誘いを断つたのは、おそらく貴様のためを思っただろう」

早々に泣きまねを止めて振り返るカシムに、エリスは説明をはじめめる。

「もう知っているかもしれないが、彼女は……………」

「アトム国のお姫様だろ」

「そうだ……………その姫君がなぜここにいると思う」

エリスの問いに、カシムはあっさりと即答する。

「そりゃ人質だろう。何しろ、アトム国はついこないだこの国に大敗してんだからね」

「そう……敗戦国の王族であり、休戦の人質として送り込まれたのが彼女だ……王族の姫君という高い地位を持ちながら、この後宮での彼女の立場は限りなく弱い」

「なるほどね……だから、あのローラ君たちがこぞつていじめの的にしちゃってるわけだ」

「そのとおりだ……そして、彼女が敵国の王族ということも起因して、彼女を庇う者は裏切り者、非国民のそしりを受けることになる……そういうわけで、彼女はこの後宮内で孤立している」

「エリス君は？」

カシムの何気ない問いに、エリスは兜の中で皮肉げな笑みを浮かべる。

「私が？ 彼女に何をしてやれるというのだ……私は、その戦争のとき、この国の騎士として彼の国へ攻め入っていたんだぞ」

「なるほど……」

「まあ、彼女の境遇に同情して、味方をするものもかつてはいた……が、そのほとんどが非国民として、彼女同様糾弾の的にされ、そのほとんどが後宮から姿を消した……様々な理由で……聞きたいか？」

「いや、大体想像できるし」

カシムの返事に、どこと無く安堵しながらエリスは続ける。

「つまりそういうことだ……彼女が貴様の誘いを断ったのは、貴様を犠牲にしたくないという意味の現れであり、決して貴様を拒絶したわけではない」

「……ふーん」

少し不機嫌そうに、カシムは相槌を打つ。

リディアに理由もわからず拒絶されたときより、今ははっきりと不機嫌を表している。

そんなカシムを観察しながら、エリスは考えていたことを口にする。

「……そういうわけで、私は今まで、できうる限り彼女のことに関

しては不干涉を貫いてきた……これまでも、そしてこれからも……この意味がわかるか？」

それを聞いて、見る見る間にカシムの顔から不機嫌が消えていく。ニヤリとした、まるで子供が悪巧みをするかのような笑みを浮かべ、

「……つまり、俺がリディア君にちよつかいをかけても、エリス君は何も干渉しない、てわけだ」

「そういうことになるな」

「ふふーん」

エリスの返事に、満足げな笑みをもらす。

その笑みを見ながら、エリスは最後の核心を伝える。

「……アトム国は宗教国家だ……つまり、彼女は姫君であると同時に、神に仕える巫女でもある。生まれてより、極力、男性を近づけないよう、神殿で育て上げられてきた」

そこで深呼吸をして、目を閉じる。

「……考えてみるといい、そんな彼女が今の状況に追い込まれ、何を感じているか……神に捧げるべき己の身体を、敵国の地にて男に陵辱される今の状況……おそらく、すでに彼女の心は壊れかけているだろう……」

無意識のうちに、エリスの手が腰に下げた剣の柄に移動している。

「……そんな彼女を友とするというのなら、まず彼女の心を救わなければならぬ……貴様にそれができるか？」

「……できないといったら？」

「……明言はできんが、おそらくいずれ私の手で貴様を斬るだろう」

「……できるといったら」

「その時は……」

エリスはその続きを、言葉ではなく態度で示した。

カシムに向かって、頭を下げる。

騎士の礼でも無い。エリシエル一人としての低頭……

生贄となっている姫君リディアが救われることを望んでいる、そ

のことがありありと感じられた。

カシムは、それを見て、深い深い笑みを浮かべ、頷く。

「了解……もともと、なんとしても友達になるってさっき決めてたしね」

「……言っておくが、私が見逃すのは友となるまでだ……それ以上の不埒なまねをすれば、当然阻止するからな」

「え〜？ エリス君てば、けち〜」

それまでの雰囲気打ち壊し、カシムは頬を膨らませる。

「すでに、不埒をやる気か……大体、さっきもそれでセシルを怒らせていただろう……あいつは怒らせると私の手にも負えないんだぞ！」

「ははは、あれは良いお尻してたなあ……エリス君見たことある？」
「だから！ 貴様は〜！」

後宮の通路にて、二人の喧騒は遠くまで響いていく……

遠く、遠く……逃げてしまった姫君を追いかけるように……

4話

?・懺悔

友となりたいたい……と、初めてそう言ってくれた人は生まれた故郷の者でも、今居る敵国の者でもなかった……

自他の境遇をまったく歯牙にかけない、無邪気な態度で顔を合わせるたびに話し掛けてくる。己がどれだけ友となることを望んでいるのか、周囲のことなど委細かまわず、はばかりぬ声音で口にする。彼女の口からその類の言葉が出るたびに、通りすがった人々の目が険しく、忌々しそうに歪められるのが、とても嫌だった。

自分への好意の為に、何の責も無い彼女が責められる立場に陥ってしまう。そのことが、頭にこびりつき、彼女からの逃亡を促す。

だが、心のどこかで、いくら逃げても、いくら拒絶しても、変わらぬ好意を示す彼女の存在を欲していた。このまま、その純粋な好意を向けられていたいと。

その相手の不幸も省みない、いやらしい考えに、すでに穢れた己を知る。

清廉を義務付けられた巫女であった時にはこのような汚らわしい考えは、浮かびすらしなかっただろう。自分はこの国に来て、魂の隅から隅まで穢れてしまった。

空を見上げ、黄金に輝く太陽を瞳に写し、寂しげに微笑む。

巫女として主神とあがめた、天にて輝く太陽神の加護も、このよ
うな穢れた女など照らしはしないだろう……

?・尊き令嬢

見たもの誰もを呆れさせる豪華絢爛な後宮内。そこに迎え入れられた側室たちには無論のこと、各々が快適で優雅な生活を送るための部屋をここに用意されている。

とは言つもの、側室の中にランクに応じて、個人の部屋の差が生まれてしまう。

そんな中で、王子の寝室に次ぐ悪趣味なまでに派手な部屋には、当然のようにローラ・レヴァンドが主として其処に居た。

「ああああ！ 忌々しいッ！！ あの占い女！」

ここ数日の日課となった、憤慨の叫びが、派手な部屋の装飾品を振るわせる。

「なんなのあの女？ この私の侮辱や軽蔑の言葉なんか、まるで聞こえないように無視するし！ 嫌がらせをするようにって、誰に命令しよう、結局その子が泣きながら帰ってくるし……！ かついて、殿下にあの女の思いつく限りの悪口を言いつけても、『あんな女のことなんか、オレは知らん！』って、いったい何なのよ！？」
奥歯が磨り減りそうなほど歯軋りをさせながら、手近にあった枕を壁に思い切り投げつける。

最初にあの忌々しい女占い師カシムと会ってより、毎日、思いつく限りの手段で嫌がらせを試みたものの、すべて失敗という結果に終わり、ローラ嬢の不満はピークに達しようとしていた。

今まで、殿下が戯れに呼び寄せた下賤の民の女は、ローラが一言命令するだけで、日に日に弱り、やつれ、怯え……十日もしないうちに、姿を見せなくなるか、もしくは自殺を図ったなどという話を聞くようになった……だと言つのに、あの占い師は、弱るところか、逆に生き生きと、毎日のように後宮内をうろつろとしてくれている。それが何よりローラの癪に障った。

あまりに苛立たしいので、最初のとときに刃物を見ただけで逃げ出したのを忘れたかのように、セシルに再びカシムを痛めつけるよう命令したりもしたが……当のセシルからは、件の一件でこの後宮の警備をしている女騎士エリシエルに目をつけられてしまい、不可能だ、というそつけない返事が返ってきた。

さすがに、ローラもエリシエルに真つ向から立ち向かうわけにはいかない。たとえ相手が、市井上がりの成り上がりの騎士だとして

も……彼女は、軍の上層部に気に入られているのである。そう、ローラの父ロレンツ公にすら……

この後宮で、唯一ローラの……父上の権威の効果が及ばない相手が、エリシエルなのである。そのことも、ローラのプライドを著しく傷つけた。

「……下賤の民に、成り上がりごときに……なぜ、私のような高貴な者がこんな思いをしなくてはならないの!？」

苛立ちに力任せに地団太を踏む……身体の内にとまった激情をこらえる術を彼女は知らなかった。そういう時は、決まって自分より立場の弱いものにそれを向け、発散することを常としていたのだから。

そしてこのときも例外なく、そうやって発散することにする。

ローラは苛立ちを隠さずに、手を打ち合わせメイドを呼ぶ。

ほとんど間をおかずに、メイドが控える隣の部屋から、陰鬱な表情をしたメイドが姿を現した。

「ルビイ、ルドラを持ってきなさい」

まるで、玉鞠でも持ってこさせるかのように『それ』を連れてくるよう命じる。

ルビイと呼ばれたメイドは、それを聞き、泣きそうな顔になった。

「ろ、ローラお嬢様……」

「なに? 早く持つてきなさい!」

ローラの苛立った返事に、ビクツとしながらも、勇気を振り絞り、続ける。

「お嬢様……もうルドラは限界です。ここ数日、毎日お嬢様のお相手をさせられ、もう身体がぼろぼろなんです。どうか、今日……今日だけは休ませてやってください」

必死になって、ルビイは嘆願する。

涙すら流しながらの、メイドの嘆願に、ローラは終始無表情にそれを聞いていた。

そして……

「どうして、私がそんなことをしなくてはならないの？」

あまりにも非常識なことを言われたかのように、不思議そうに尋ね返される。

「お、お嬢様!？」

「だって、ルドラはその為に私が飼ってあげて、養ってあげているのに……どうして、そのくらいのこと、私が一日も我慢しなくてはならないの？」

「お嬢様! ルドラが死んでしまってもよろしいのですか？」

まるで別の生き物を見るような、怯えた瞳でルビイはローラを見上げる。

そして、ローラは当たり前のように、ルビイの予想通りの答えを言っただけだ。

「そうだったら、また新しいのを買えばいいでしょう? どうせ、一匹の値段なんて私のお小遣いの何百分の一なんだから?」

「ッ!」

ルビイはそれを聞いてしまい、唇をかみ締め、スカートを両手でぎゅっと握り締める。

「ほら、何しているの? 早く連れてきなさい」

「……わ、わかりました」

まるで死人のような声で、ルビイは答え、先ほどまで自分が控えていた部屋に踵を返す。

「まったく、相変わらずとろい子ねえ」

ほとんど困り果てたという風に、幼少のころより自分に仕え続けたお傍付きの少女の背を眺め、ローラはため息をつく。

程なくして、ルビイが再び再び姿を表す。その手には一本の縄が握られ、それは彼女に後ろについてきている一匹の中型犬の首輪に繋がっていた。

その何の変哲も無い黒毛の犬は、しかし見るだけではつきりとわかるほどあちこちがぼろぼろとなり、怯えたように部屋に入るのを嫌がっている。

ルビイは、まるで自分がそうされているかのような、泣きそうな顔でそんな犬の首に繋がれた縄を引っ張り、中へと誘導していく。その犬も、ルビイに力なく引っ張られると、抗うことなく付いて来るようになる。

「……ルドラを連れて来ました」

「そう……じゃあ、貴女はもう下がってなさい」

「……は、はい」

一瞬、何かを言おうとするが、結局は主の言葉に従い、その場を後にする。

扉を閉める瞬間、涙のこぼれる瞳で部屋に取り残される犬の姿を見やる。

ローラの飼い犬であるルドラは、もう諦めたかのように黙って床に丸まっている。

静かに扉を閉めると、ルビイは即座に目を瞑り、両手で耳を抑えその場で蹲る。

この後の音と、悲鳴を聞かないために……

だが、いつものようにルビイの身体は勝手に震えだした。

肩で荒く息をしながら、ローラはようやく鞭を振るう手を休める。その視線の先では、たっぷりと血を吸いえぐい色になった黒毛の毛皮の塊があるだけ。

ローラはそれにはもう目もくれず、返り血を浴びた自分の姿に眉をしかめる。

「やだわ。ドレスが台無し……これが無ければこのストレス発散も言うことないんだけど」

とりあえず手についた血をハンカチで拭い取りながらぼやく。

もうこのドレスは使い物にならないだろう……犬の血が付いたドレスなど、もう着る気にもならない。

そこまで考えて、ローラの脳裏に天啓のようにあることが思い浮かんだ。

「そうだわ……そういう手もあつたじゃない……」
ローラは無邪気にその思いつきに喜び、ようやくスタ袋のようになつた飼い犬に目を移す。それは、決してそれを生き物として見ている目ではなかった。

？・蒼髪の少女

レムン国にて、女性に限らず国民のほとんどの肌は白の色素の比率が多い。そんな中、異国の者の褐色の肌は限りなく目立つはずなのであるが……

「やれやれつと……まうた、見失つちやつたな」

「貴様も、思つたほど芸が無いな、これで三十四回目だぞ」

「だつてさあ、リディア君てば、逃げるのも、隠れるのも上手なんだもん」

むくれるカシムに、エリスは苦笑して答える。

「それはしょうがない。彼女は、毎日、あのローラ嬢から逃げ隠れしなければならなかつたのだから、嫌でも上達するだろう」

「なるほど、そりや道理だ」

心の底から納得し、ポンツと手を打つ。

そんなカシムに、エリスは呆れたように鉄兜の中でため息をつく。

「まったく、貴様は真剣なのか不真面目なのか……判別がつかんな」

「ははは、もちろん可愛い女の子のこととなれば、真剣の大真面目に決まつてる！」

握り拳など作りつつ、まったく説得力無く力説する。

「それが信用できたら、私の苦勞も減るのだがな……それで、どうするつもりだ？」

腕組みをして、カシムに詰問する。

「貴様がどうやって、リディアを救つつもりかは知らないが……捕まえられなくては話にもならない。違うか？」

「そうなんだよね……ちよーと、困つてる」

「ちなみに……念のために言っておくが、私は『斬る』といったら、

必ず斬るからな」

「うっ……ちなみに、時間制限は？」

エリスの脅しに、カシムは苦笑いを浮かべる。

「特に無い……かといって、ゆっくりされても困るがな。あえて言うなら、リディアの件が手遅れになってしまっただけから、貴様がこの後宮から出る。すなわち、殿下の手から離れた時点で私が貴様を斬る。というつもりだ」

「うっ、まあそれでいいか」

あっさり承諾してしまうカシム。その声に何の気負いも無く、ともすれば冗談を言っているだけのように聞こえる。

「さてと、それじゃあ搜索再開といきますか！ 何度もいったけど、エリス君。今の俺の頼みの綱は、君のこの後宮内部の知識だ。というわけで、またまた道案内よろしく」

陽気なカシムの要請に、エリスは何度もついたため息をもう一度つく。

「理屈はわかるんだが……私をそう気軽に連れまわさないでくれ。

こう見えても、後宮の警備は忙しいんだぞ」

「まったく。可愛い女の子に囲まれて、天国のような職場じゃないの。いや、心の底から嫉ましいぐらいに」

「それは貴様に限った話だ……実際には大変なんだぞ、たとえば……」

と、そこまで言って、エリスはふと気配を感じ、足を止める。

「うん？ どつたの……て、おおっ！」

つられて振り返ったカシムが、驚きと喜びの声をあげる。

二人の振り向いた先には、青髪の理知的な美貌の美少女がじつとこちらを見詰めていた。

「確か、ローラ君の取り巻きの一人レムス君！ いやいや、リディア君の件が終わってから、声をかけようと思ってたのに、そっちから来てくれるなんて、感激だねえ」

ニコニコと、早速親しげな言葉とともにレムスの元へ歩み寄ろう

とするカシムだが、そのレムスからかなりきつい視線で睨まれる。

「……話し掛けないでください」

「おや？」

「……貴女と話している所を見られたら、私だけでなくエリス様のご迷惑になります。そんなこともわからないんですか？」

「あらら〜」

思いつきり、険のある対応に、カシムは困ったようにエリスのほうに視線を向ける。

エリスは、おそらく鉄兜の奥で苦笑しているのだろう。やれやれという感じで、カシムに言葉をかける。

「カシム……すまないが、少し離れていてくれないか。レムスは私に話があるようだ」

「が〜ん、エリス君まで〜」

心理的な擬音を自分で口にしながら、泣きまねまでし、二人から離れるカシム。

カシムが離れるのを確認してから、レムスは先ほどまでとは一転して嬉しそうにエリスに話し掛ける。

「う〜、俺に対する態度とまったく違う〜」

その様子をカシムは指をくわえて見続けていた。

レムスが一通り話し、そしてエリスに何かを手渡すと、そこで話は終わったようで、足早にエリスの元から離れていってしまった。

「あらら、青春してるねえ」

手渡すときエリスの手に触れた瞬間、顔を真っ赤にしたレムスの表情をはつきりと見ていたカシムが、そんな感想を漏らす。

「いやいや、エリス君てば。お堅いかと思ってたら、あんなおとなしそうな子たぶらかしたりしちゃって」

「何を言っている？ レムスは、情報提供者だ」

「ふえ？」

本当にエリスがレムスを誘惑しているとは露ほども思っていなかったが、その真実もカシムは露ほどにも予想できていなかった。

しばし、思考を走らせ。しばらくして納得をつける。

「ほほう、問題のありそうなグループにスパイを潜入させるなんて、エリス君てばやるう」

「それもまた人聞きが悪いな……勘違いをしないでくれ。別に私があの子に強要しているわけじゃない」

「と、いうと？」

「レムスはこの国の王室御用達の大商人の娘で、父親に無理やりこの後宮に送り込まれた」

「ふんふん」

「……そうになると、当然、今の貴様やリディアのように嫌がらせの的にされるのは目に見えていた……」

「それを、エリス君が守ってやった、てわけ？」

カシムの言葉に、エリスは静かに首を振る。

「私はただ助言をしたただけだ。自分の身を守りたいのなら……ローラ嬢に取り入れ、とな」

「ほほう、それはまた的確な助言だね……しかも、それを実行できるといいうのも、あの子も見かけ以上にしたたかかって訳だ」

「まあな。レムスはもともと学士になりたかったのだそうだ」

少しさびしそうにエリスは付け加える。

たとえどのようなまばゆい夢を持つとも、この後宮に入った時点でその夢がかなう可能性はまったくない。

「……まあ、今言ったように私はそれほどたいしたことをしてやったわけではないのだが、レムスは私に感謝をして、こうして時々、私に情報を流してくれるようになったということだ。納得したか？」
「なるほど……控えめな優しさで、あの子を落としたりってわけね。」
「いやいや、とても参考になったよ」

「……貴様は」

あくまでうがった見方をするカシムに、エリスは怒りを抑えたいめきを洩らす。

「……で？ あの子はどんな情報を流してくれたわけ？」

「む、大抵は、ローラ嬢が何かをやらかす前にその事を知らせてくれるのだが、おそらく今回もその類だろう……」

そうカシムに説明しながら、エリスは手に持った紙切れを広げ、中身に目を通す。

鉄兜で表情はわからないが、そこからもれる気配が明らかに緊迫したもののへと変じる。

「カシム……ついて来い」

一言そう言い残すと、返事を待たずに歩き始めた。

鎧を鳴らして、せかせかと歩くエリスの後をカシムはゆったりとした足運びで追う。

「ねえねえ、何があったわけ？」

カシムの気楽な問いに、エリスが苦みばしった口調で答える。

「……ローラ嬢が、リディアを捕まえ取り囲んでいるらしい」

それを聞き、カシムの眉はひそめられる。

だが、それもエリスの次の言葉を聞くまでであった。

「どうやら、ローラ嬢は貴様に対して、リディアに何かをやらせるよう強要するつもりらしい……」

「はあ？」

呆れた声に、呆れた表情。

「俺に？ リディア君に何をさせるつもりなわけ？」

「さあな。そのことについては書かれていない。多分、レムスも知らないのだろう」

「は、何を考えたのかねあの派手な姉ちゃん」

「さあな。もうすぐその場所につく。そうすれば嫌でもわかるだろう」

お互いに話しながらも、足の運びを緩めること無く。それぞれが徐々に歩く速度を上げながら、変わらぬ口調で話し合っている。

どんどん速度は上がり、ほとんど常人が全力疾走するのと変わらない速度になったあたりで、カシムがふと鼻をぴくぴくさせ、歩を緩める。

それに遅れて、エリスもまたそれに気づき同じく歩みを止める。問い掛けるようにこちらを振り返るエリスに、カシムが尋ねる。

「……エリス君も気づいた？ この匂い」

「ああ……これは、血の匂いだ」

そこからはエリスの案内の必要も無かった。

きらびやかな後宮に似つかわしくない濃厚な地の匂いを追い、カシムはほとんどえ知ると並んで、その場へと走っていった。

血の匂いがどんどん濃くなり、最後の曲がり角の手前に来て、それは聞こえた。

「……ほら、早く言うとおりにしなさいよ」

聞き覚えのある居丈高な声……

「この声は、あの派手な姉ちゃんだね」

二人は足を止め、曲がり角からそつと声のした方を覗き見る。

そこには、ローラとその取り巻きに囲まれた、褐色の肌の美少女の姿があった。

取り巻きの一人が手にバケツを掲げ持ち、ローラがそれを異国の姫リディアにもつよう命じているように見える。

「何だ、あのバケツは？」

「……多分、中身は血だろうね」

いぶしかむエリスに、いち早く血の匂いの発生源に気づいたカシムが答える。

「しかも……持つてる女の子の力の入り具合から察するに、あのバケツになみなみと血が入ってるみたいだな……あの量、かなりの人数から少しずつ採取したんじゃないかな。人が2〜3人ぐらい死んでてもおかしくないな」

真顔でとんでもないことまで推測する。それにエリスは目を剥き、

「馬鹿な！ いくらローラ嬢でも、そんなことはありえない！」

「じゃあ……結論、あれは人間の血じゃないつと」

エリスの激昂……それでも声を抑えていた、にカシムはあっさり

思考を転換させる。

そして、指を顎に当て、

「まあ、実際のところ、あれが何の血かってことより問題なのは、あれをどう使うつもりかってことだな。まさか、この後宮のどこかで飢えた吸血鬼を餌付けしてるってわけでもないだろうし、使い道が無いだろう」

考えても仕方が無いので、カシムは視界の端に映る集団の会話に耳を傾ける。

会話といっても、先ほどのローラの命令を最後に、その場には重苦しい沈黙が漂っていた。どうも、ローラ以外の取り巻きの少女たちは今の状況に乗り気ではなさそうに見える。

運悪く血の入ったバケツを持たされた少女など、今にも倒れそうなほど顔を真っ青にしている。

ただ一人、ローラのみが意気込んだ様子でリディアの返事を待ち、そして苛々とし始めている。

リディアの返事はいつまでも聞こえなかった。結局先に口を開いたのは、我慢が尽きたローラ嬢。

「……聞こえなかったのかしら？　じゃあ、もう一度言いますわよ。この血を、どんな方法でもよろしいから、あの忌々しい占い女に引っ掛けてきなさい」

「……………」

やはりリディアは返事をしようとしなない。

代わりに、カシムは顔をしかめ、エリスに質問する。

「あゝ、大体状況はわかったが……やっぱり、占い女って……」
「貴様のことだろう」

「やっぱり……いやゝ、バケツ一杯の血をぶっ掛けるなんて、最近のお嬢様のいびりは過激でいらっしやる」

「そうだな。私も正直驚いている……なおかつ、それをリディアにやらせようとはな」

エリスの言葉に、はっきりと嫌悪の色が浮かんでいる。

そこにまた沈黙に耐えかねたローラの声が聞こえる。

「……いったい何が不満なのかしら？ 今の命令を聞きさえすれば、負け犬の貴女を私のグループに入れてあげて、ほかの子達と同格に扱ってあげるといつているのに」

リディアはそれにも答えず。ただ己のドレスのスカートをぎゅっと握り締める。

「……カシム」

エリスの深刻な声音。

「うん？」

「……リディアがローラ嬢の命令を聞き、行動に移したら……言い難いのだが」

彼女には珍しく言いにくそうに口籠もる。

だが、カシムはあっさりとその先を読み、先に答えてやる。

「黙っておとなしく、血をかけさせろってわけね。まあ、ローラ君が約束通りにリディア君への態度を改める可能性はかなり低いけど、その前にそれを失敗したりしたらさらに立場が悪くなっちゃうからね」

「……すまない」

相変わらず気楽なカシムの返答に、エリスは頭を下げる。

それにカシムはヒラヒラと手を振り。

「良いつて、良いつて。血を引つかぶるぐらい。別に死ぬわけじゃない」

あくまで気楽に言っただけ。

「……カシム」

そのカシムに対して、エリスが何か声をかけようとしたその矢先に、それは聞こえた。

「……嫌です」

夢中で、だがそれでもはっきりとした意志のこもった言葉が。

「……」

「……」

「あゝ、エリス君。なんか今の俺らのやり取りを、根底から無に帰すような言葉が聞こえたりなんかしなかった？」

「……聞こえたな」

呆然と見つめあい、お互いの耳が正常かどうか確かめ合う二人に、また聞こえる。

「……そのようなこと、はっきりとお断りさせていただきます」

「おいおい」

疲れたように、カシムはうめく。

？・太陽の巫女

「……もう一度、言ってくださらないかしら？」

頬とこめかみをぴくぴくとさせながら、ローラは震える声で尋ねる。

震えているのは、無論怒りのためである。

ありえるはずの無いことであった。この高貴な自分に、よりによつてこの後宮でもっとも卑しい女が……

だが、またもやその相手ははっきりと言った。

「お断りします。そのようなこと、私にはできません」

今まで、取り囲めばうつむき、目も上げられなかった少女が、はっきりとこちらを見て、拒絶の言葉を発している。実際、ローラはこのときはじめて、この美少女の目が天空に輝く太陽のような黄金色であることを知った。

「……あ、あなた。何を言っているのかわかっているの？ 敗戦国の

生贄の貴女を、この私のグループに入れてあげようというのよ！」

その輝きに気おされた己を叱咤し、虚勢を搾り出す。

「……そんな所……」

ぼそりとした呟きに、ローラが耳を寄せ澄ませる。

「そんな所、少しも入りたくありません」

「っ……」

はっきりとそれを聞き、ローラの顔から一瞬だけ血の気が引き、

その後まるで果実のように真っ赤に染まった。

「……な、な……何ですつてえええっ!？」

ローラの絶叫に、周囲の取り巻きの少女たちもおろおろと混乱をはじめめる。

もともと、それぞれの裕福な家元で温室の中で育てられた彼女らに、予想外の状況で臨機応変に立ち回る器用さは欠片も無かった。

ただ、ローラだけは持ち前のプライドの高さにより、それを傷つけられた怒りに任せて、リディアに食って掛かる。

「……貴女、自分の立場をわかってらっしゃるの!？ 貴女は人質としてここに居るのよ!」

「そのようなこと、言われなくとも知っています」

起死回生にと、相手を貶める言葉を吐いたにもかかわらず。リディアはあっさりと認める。まっすぐと、黄金の瞳をローラに向けて

「……な、なによ。大体、アトム国なんて、戦争に負けたくせに国王陛下のお情けで国を存続させてもらってるだけじゃない。その王族だからって、少しも偉くないんだから」

「仰る通りです。私もそう思っています」

「……あ、貴女なんか、自国の存続のために殿下に身体を開いた汚らしい売女じゃない」

「その通りです」

「そ、そうよ。貴女は、惨めに身体を売って生きるのがお似合いなのよ。その癖に、この高貴な私に逆らう気？」

どんな言葉を吐こうとも、リディアの瞳に圧倒されてしまう自分に苛立ちながら、震える声で罵倒を続ける。

「私は……アトム国の受ける責を少しでも減らすことが、王族として巫女としての務めだと、この運命を受け入れました……でも……」

……
それまで、人形のようなリディアの顔。その頬の褐色の肌に朱がさす。

言葉に、確固とした憤慨を込め、それを目の前の女性にぶつける。

「あの方に……カシム様に何の責があるというのです！」
「なっ!？」

言われたことより、リディアの静なる怒りにローラは仰け反る。
そして、数瞬後にようやく言われたことを理解する。

「な、何を馬鹿なことを……決まってるじゃないの。たかが下賤の
占い師の分際で、殿下を誑かし、ご寵愛を受けるなんて、とんでも
ない大罪よ! 責があるに決まってるわ!」

「……本当にそう思ってるらっしゃるのですか？」
「何ですって?」

「本当に、あの方に責があると……殿下を誑かすためにこの後宮に
きたと思っっているのですか?」

「そ、それは……」

真っ向から尋ね返され、ローラは口籠もる。

口ではどう言おうと、さすがに真実は違うことは知っていた。

「あの方は……ただ、旅をしてこの国に訪れただけ……それだけな
のに、噂が殿下の耳に止まってしまい無理やりここに連れてこられ
たのですよ……そのような方が、本当に殿下の正室の座を望むと思
いますか?」

まったくの正論に、ローラは思わず一步後ろに下がる。

だが、そのさらに後方には、己の取り巻きである少女たちが居る。
これ以上弱みは見せられない。

「……そ、それが、下賤の女というものよ! 無理やり手籠めにさ
れたからって、すぐ開き直って、身のほど知らずに欲望のまま殿下
を誑かすに決まってるわ!」

「ありえませんが……少なくとも、あの方には」

確固たる確信を込め、リディアは穏やかに否定する。

「貴女に何がわかるというの!？」

「わかります。だって、あの方は穢れていないから……」

そのことを嬉しそうに、そして少し誇らしげに語る。

「あの方は、身体は傷ついていても、魂は穢れの無い清らかなまま

なのです」

ローラに、そしてその取り巻きの少女らの誰一人にも、リディアの言葉の真意を悟られる者は居なかった。あの、カシムが後宮に入った最初の夜のことを知らぬ者には無理も無いことだが。

だが、それでも、何が穢れで、どういうことが清らかであるか、それぐらいのことをわからぬほど、ローラは初心ではなかった。

そのことだけで、ローラの視界は怒りに染まる。

「……貴女は、殿下のご寵愛を穢れだと言つての!？」

ローラの怒りに燃える目と声を浴びせられるが、リディアは毅然とした態度を崩さず答えを返す。

「……少なくとも、私にとってはその通りです」

「ッ!!」

何を考えるよりも、言葉にするよりも早く、ローラの手が傍らの少女が持つバケツの取っ手を掴む。

次の瞬間に、水音が生じた……

身体の前面に衝撃を感じ、その後鼻腔にそれまで以上に濃厚な血の匂いが刺激した。

「あつ……」

リディアは呆然と、指先で頬をなぞる。

その指を見ると、血まみれだった。なぞった指先だけでなく、掌も、手首も、腕も。

嫌悪に吐き気を催しながら、その血まみれの腕で己の身体を抱きしめる。

グチャツ、とした滑りを帯びた絹の感触……ドレスすらも血で染め上げられていた。

「あ……あ……!」

巫女として、潔癖なまでの純潔を重んじることを教え込まされた身体が、不浄である血による穢れに反応し、ガクガクと震えだす。

神の巫女として、生き物の血は禁忌であった。触れることすら許

されないほどの。

だのに、今リディアはその血を全身に浴びせられてしまった。

その驚愕に震えるリディアに、怒りに染まったローラの言葉が降りかかる。

「……つまり、貴女はこの後宮にいる私も、穢れた女だというわけね」

聞くだけで震え上がりそうな声音は、逆にリディアの性根を奮い立たせた。

穢れに穢れた己の神性の跡に、わずかに残った誇りを胸に、リディアは意思を込めて相手の顔を見上げる。

「……それは、貴女自身が選んだことではないですか。殿下の正室になるために、後宮にいられた貴女方は、それが望みだったのでしよう?」

言い終ると同時に頬が鳴る。

頬にこびりついた血が、音を立てて弾けるのをリディアは肌で感じた。

平手を打った体勢からその手を元に戻しながら、ローラはキツと相手を睨みつける。

「よくも……よくも、高貴なレヴァンド家の一員であるこの私を、売女扱いしてくれましたわね。自分の立場もわきまえずに……貴女のような方に、そのようなこと口にする権利は一片たりとも無いと言っのに!」

今まで、幾度と無くかけられたその言葉に、今度だけは胸の中が燃え上った。

「では、貴女はどのようなのですか……貴女に、カシム様を汚す権利があるというのですか!」

声にはつきりとした怒りを乗せ、リディアがはつきりとローラを非難する。

「このっ……!」

ローラはもう一度、今度は先ほどとは逆の頬を打ち据え、そして

後方に命じる。

「貴女達！ この女を抑えなさい！」

彼女の命令に、取り巻きの中から三人の少女が即座に飛び出し、リディアの血にぬれた腕と首を掴み、動けないよう抑えた。

それを確認し、ローラは先ほどから手にもつていた中身のほとんどをぶちまけたバケツをリディアの顔の高さまで掲げる。

バケツの中から、ちゃぷんっという水音が小さく聞こえる。それが、まだなかにわずかにだが血が残っていることを示す。

「口を開かせなさい」

首を掴んでいた少女の指が、リディアの顎に伸び、口を強引に開かせる。

この期に及んで、リディアは自分がこれから何をされるか理解できていなかった。

そんなリディアに、ローラは気味が悪くなるほど甘ったるい声を浴びせる

「以前聞いたことがありますわ。貴女のような巫女は、獣の肉を食べることを禁じられ、それを口にすることが最大の罪の一つとされていると……」

「……っ！！」

ようやくローラの意図を悟ったリディアは、慌てて逃れようと暴れるが、非力な少女とはいえ三人がかりで抑えられた身体はピクリとも動かない。

「あ……あ……」

リディアはその金の瞳に恐怖を湛え、徐々にバケツの淵に盛り上がっている赤い液体を見上げる。その様を、ローラは満足げに、残酷な笑みを浮かべ、さらにバケツを傾ける。

だが……そうしようとした瞬間に、手の中からバケツが消えていた。

「え？」

慌ててそちらを見やるローラの目に、まず入ったのは、豊かとは

いけない盛り上がり押し上げられた白い布地だった。

さらに視線を上げると、白い肌に黒い髪……

「あ、貴女は!？」

「よっ! 楽しそうなことやってるな、ローラお嬢様」

ローラの驚愕の視界の中で、カシムは気軽にバケツを持っていない方の手を上げ挨拶をする。

「な、なにを……貴女には関係の無いことですわ! さっさと私の視界から消えなさい!」

「おやおや、つれないね……まあ、別に用事も無いしね。従いましよう」

てつきり、リディアを助けに現れたかと思っていたが、カシムはあっさり引き下がる発言をする。だが、続きがあった……

「ただ、ちよつと喉が渴いててね、というわけで、これ貰うね」

「え?」

あっけに捕らえるローラの目の前で、カシムは手に持ったバケツを口に寄せ、傾ける。

そして、躊躇い無くその中身を口内に流し込んでいく。

「なっ!?! な……な!」

その意外な行動に、ローラはあんどりと口をあけ、呆然と立ち尽くす。

周囲の取り巻きも、いまだ取り押さえられているリディアも同様であった。

誰もが、目の前の現実を理解できず、思考が停止してしまっていた。

だから、バケツより口を離れたカシムが、呆然とするローラを抱き寄せた時も、誰も反応はできなかった。

そして、口に含んだ血が端から一筋流れる唇を寄せられる段にいたっては、ローラは正気に戻り、とっさに離れようとする。が、そのときには腰をがっしりと抱きしめられ、離れるどころか、身動き一つできない。

「や、やめ！」

拒絶の言葉すら最後まで言えず、ローラの唇にカシムの唇が覆い被さる。

そして、舌の先に鉄のような味……血の味が感じられ、それがどんだん口の中に流し込まれてくるのを自覚する。

「んっ！ んーっ！ んんっ！！」

必死になって抵抗し、手足を振り回し、相手の背中を叩いても足を踏みつけても、その唇が離れることは無く……息苦しさは徐々にローラの身体を支配する。

そして……その息苦しさから逃れるために、ローラの身体は自動的に喉を動かした。

ゴクツ、ゴクツとローラの喉が鳴る。

それを確認して、ようやくカシムは唇を開放する。

何が起こったのか理解できていないローラに、悪戯好きの子供の顔で、

「ふふ〜ん、お裾分け……お味のほうはどうだった、お嬢様？」

「……………っ！」

カシムの言葉に、数秒をかけて、己の現状を理解する。

即、ローラの膝から力が抜け、地面に跪き……その場に嘔吐した。口から吐き出されたそれは、床の絨毯を真っ赤に染めた。

？・哀怒

「ローラ様！ 大丈夫ですか！」

「しっかりしてください！」

取り巻きの少女たちに支えられ、ローラは魂が抜けたかのような有様で、カシムと呆然とするリディアの前から姿を消していった。

「おやおや、俺が消える前に、向こうのほうが消えちゃったね」

やれやれと肩をすくめ、カシムは口の中をもごもごさせる。

血まみれとなった口内が、やはり気持ち悪いのか眉がひそめられる。

その様を見ながら、リディアはぼそりと呟いた。

「どうして……?」

「うん?」

「どうしてですか? どうして、そんなことを……血を飲むなんて……」

信じられないという表情で、呆然とカシムに問い掛ける。

「ははは、何言ってるの? 君だって、血まみれじゃないの?」

「私は良いんです! それに、そういうことじゃないです」

暢気なカシムの返事に、リディアの怒声が飛び出す。先ほど、口
ーラに向けられたものより、大きく鋭い。

カシムも驚きに目を見開き、じっとリディアの顔を見る。

褐色の肌も、ドレスも血に染まり、惨々たる有様だった。

だが、怒りを宿した美貌は、血にまみれていようと……いや、それだからこそ、

「……きれいだなあ」

心底からの言葉が、勝手にカシムの口から発せられる。

「な、何を!?! 真面目に聞いてください!」

その言葉を聞き、一瞬きよんとしたものの、からかわれたと判断したのか、さらに怒りの声をあげる。

「いやいや、ふざけてなんか無いよ。それに言わせて貰えば、ふざけているのは君のほうじゃないかい?」

「え?」

「なんで、俺が血で汚れるのがいけなくて、君が血で汚れるのは良いの?」

「そ、それは……だって……」

問いかけに、リディアは俯いてしまう。先ほどのローラとの会話と逆の立場に立たされた気分である。カシムの言っていることは、正しい。

だが、リディアもそれがわかっていても言わなければならぬことがあった。

「……私は、もうすでに汚れているから……魂も軀も穢れてしまっているから……」

言い終わると同時に、その後続く言葉を考え、待ち構える。

おそらくカシムは否定するだろう……それを予測してそれに対する答えを用意する。

だが、

「なるほど、で？」

予想に反して……カシムはあっさりと言い放つ。否定で無い言葉を。

否定で無い……それをリディアは肯定と受け止めた。

胸が、痛んだ。そして、まだ傷つく隙間が己の胸にあったことに少し驚く。

「そうです……私は穢れているから、もう、いくら汚れたって……」

「いやいや、そうじゃないって……」

「はい？」

痛みをこらえて、用意した言葉にアドリブを加えて発した答えを、途中でさえぎられてしまう。

「それだけじゃ、俺は納得できないな。その次に、俺が汚れてはいけない訳が聞きたいね」

「え……」

「さっき、なにやら面白げなことをお嬢様に言っただろ？ あの続き」

「あれは……」

リディアは口籠もる。ローラに言うのと、本人の前で言うのとではかなり気分が違う。

「……貴女が穢れていないから……」

「そう、それ。何でそんなこと思ってるわけ？ そこが良くわからん」

本気でわからないというカシムの問いに、リディアは少しムキになって答える。

「それは……貴女は純潔を自らの手で傷つけたことで、王子に貴女の魂を汚させなかった……貴女は自らの手で、魂の尊厳を守ったではないですか」

それを見たりディアは、そんなカシムの行為を信じられなかった。自分はただ泣き、諦めるだけだったから……そのようなことすら考えもしなかったから。

自らの手で自らを傷つけ、己の誇りを保つなど考えられなかった。だが、それをあっさりと行うカシムという女性は、目の前に存在していた。

そして諦めしか知らない彼女は、その存在に淡い憧れを抱いた。

「だから……私は貴女に汚れて欲しくなかった。穢れて欲しくなかった……そう思っていました……なのに、なのに……」

最後のほうは声がかすれ満足に言えなかった。

頬に血の生暖かさは違う熱いものが流れ、それが頬についた血を拭い取るのを感じる。

「貴女は……私などのために、穢れてしまった……どうして、そのようなことをするのですか……どうして……？」

それからは嗚咽となり言葉にならない。

涙を隠すように手で顔を覆ってしまったりディアの前で、カシムは居心地悪そうに後頭部を搔く。

「あゝ、いろいろと言いたいことはあるが。まず最初に……俺がいっつ穢れた？」

少しきつく問い掛ける。

リディアは、小さくしゃっくりをしながら、細々と答える。

「……血を、口にしました。人のものかもしれない血を……」

「人聞きの悪い……なんで俺がそんなことぐらいで穢れなきゃいかん？」

憤慨をあらわに、カシムは抗議する。

「え？ ですけど……」

まるでそのことがなんでもないかのようなカシムの言動に、リデ

イアの方が困惑する。

「まあ、血肉に関するタブーは信仰には付き物だしね。まあしょうがないかな。でも……これははつきりと言っておくと。俺は何もの血肉を口にしようと思われる事はないし、恥じる事もない。それが俺の願いにかかわることだったら尚更ね」

そこでカシムは顔に浮かべた笑いの質を変える。楽しげでも、嬉しげでもない。まるでこちらを威嚇するような獰猛な笑み。

「俺は俺自身の願いに忠実なの。それが俺の生きる理由だし、意義だから。そしてさつきもその信条に基づきあの血を口にした……それを誰にも責められるいわれはないね。たとえ、それが君でも」

声を荒げるでも、怒りをあらわにするでもないのに、カシムのその言葉に反論できなかつた。まるで、先ほど三人がかりで押さえつけられた力の何倍もの強制力で、思考を直接拘束されたように、驚くほど速やかにリディアの思考にカシムの言葉が入り込む。

「願い……カシム様の、願いとは何なのですか？」

それまでの彼女の人生で一度も目にした事のない笑みに目を奪われながら、リディアはそれを問い掛ける。それにカシムは心外そうな顔をする。

「やだなあ。言っただろ？ リディア君と友達になることだよ」
いつもの調子で、いつもの言葉を放つ。

それがリディアの胸を再度痛ませた。

この人はまだわかっていない。傷つきながら説明したというのに、まだわかってもらえていない。わからせるにはもう一度、再び自分を傷つけないければならない。

「……だから、それはできません」

「たしか、リディア君が穢れているから、てのが理由だったよね？」
「はい……その通りです」

汚らわしいと相手の方から敬遠されることより、こうして親愛の情を込めて接近されることのほうが心苦しい場合もある。リディアの心境はそれだった。

「あの時は聞けなかったし、ついでにあれからずっとこのことを聞こうと追いかけてただけだけど……それが何？」

「え？ 何、とは？」

「リディア君が穢れてることの、何が友達になれない理由になるのか、俺にはどうしてもわからないんだわ、これが」

カシムは困ったもんだと肩をすくめる。

それにリディアは啞然とする、まさかこのようなことを尋ねられるとは思わなかった。

「そ、それは、穢れた私なんかと友達となれば、貴女まで穢れてしまっから……」

「それはさつき言わなかった？ 俺は穢れようがどうしようが、自分の望みを優先するって……」

「そんな、そのようなこと、いけません！」

思わず声高く叫んでしまう。

「なんで？」

「貴女は、貴女は穢れていないのに……自分から穢れようとするなんて……そのようなこと、しないでください」

「ふ〜ん、だから何で？」

リディアの必死の嘆願に、カシムは適当な相槌とまったく同じ質問を繰り返す。

わけがわからず顔を上げるリディアに、カシムは不思議そうに問い掛ける。

「何で、俺の行動をリディア君に口出しされないといけない訳？」

「え？」

「俺は、俺が願うから、リディア君と仲良くなるうとしていて。俺が願い、俺が決め、俺がやるうとしていて。それに君に口出しされるいわれはないね」

「そ、そんな……」

あまりの言葉に、リディアは愕然とする。

「俺は君と仲良くなるためだったら、どんな事だってやるつもりだ。」

汚れようが、穢れようが、傷つこうが……どんなことをして、どんなことになっても、君を抱きしめてあげる……こんな風に」

言葉とともに、カシムの腕がこちらに伸びてくる。

リディアは慌てて身を引いた。今の彼女は滴るほどの血に濡れているのだ。抱きしめられたら、その血は大量にカシムに付いてしまう。

近づいてくる純白の長衣が血に染まることを考え、リディアはぞつとする。

「や、止めてください。近寄らないで……」

「だから、君の言うことを聞く気はないね。悪いけど、少なくとも今は……」

背中を壁に押し付けてしまい、逃げ場を失ったリディアに、カシムが迫る。

本能的に身を縮めるリディアの細い身体にカシムの腕がついに届き……一切の躊躇いもなしに、力を込め抱きしめる。

「やつ……いや……」

カシムと自分の身体の間で、滑った血の感触を感じ、カシムの衣服に血が染み込む様子が手にとるようにわかり、リディアは涙を流す。「汚れます……穢れてます……」

「うん、そうかもね。でも俺には関係無い……これは君を手に入れるために必要なことだし、その為に穢れたことで恥じるつもりは一片もないよ」

耳元に響く、カシムの言葉にリディアの身体から抵抗の力が消える。

「……貴女は、ひどい人です……ローラ様よりひどい事をします……」

「そう？　じゃあ、リディア君はローラお嬢様のほうが良い？」

「いいえ……いいえ……」

リディアは速やかに首を振り否定する。

それを満足げに見つめ、カシムが再び問い掛ける。

「さて、見てのとおり俺は穢れることに何の抵抗もない……これで君と友達になれるね」

「……でも、貴女は穢れた私を知りません。魂の穢れた私が、どんなにあさましいことを考えているのか、知りません……それを知らば、貴女も穢れた私を軽蔑するでしょう」

「ほほう」

カシムの目が、面白そうにそして挑むようにリディアに向けられる。

「つまり、リディア君は俺の目を疑ってるわけだ。俺の目がその穢れとやらを見分けられず、理解していないから、友達になるのは無理だと、そういうわけね」

「え、そんな！ 違います」

意地悪なカシムの言葉を慌てて否定する。

「ただ……私の本質は、貴女の目に映るようなものではないと……」
「それなら心配ない。俺は、俺の意志で君と友達になることを決めたんだ。たとえ、その可愛らしい顔が偽者でも、その言葉がすべてうそでも……君の魂がどんなに穢れていても、俺はそれをすべてひっくるめて受け止めてあげるよ……こんな風に」

「あ……」

言葉の続きに、カシムはリディアの顔に口を近づけ、ペろりと舌を這わせる。

そこは当然血のりがべったりとこびりついている。だが、カシムはそれすら愛しそうにさらに舌で舐めていく。

頬から始まり、目蓋の上、額から鼻筋を下がり、逆の頬に映る。しばらくして、一部を残して顔の大部分の血のりをすべて舐めとり満足げに顔を放す。

「うん、綺麗になった……こうやれば、いくら汚れてもすぐ綺麗になる、だろっ？」

血のりのなくなったりリディアの顔を満足げに見つめ、カシムは頷く。

「うんうん、やっぱりリディア君はそういう綺麗な顔が一番だね。俺が少し汚れるだけで、その顔が見れるのなら、安いもんだよ」

「で、ですが……それでは、カシム様が汚れてしまいます」

口元に血をべっとりとつけたカシムの顔を、リディアは悲しそうに見つめ、言う。

「おう、なるほど……じゃあ、これはリディア君に綺麗にしてもらおうかね？」

「え？」

「そうすれば、お互い綺麗になって万事解決……もし、それでまたリディア君が汚れちゃったら、また俺が綺麗にしてあげるよ」

そういつて、カシムは再び口をリディアの顔に近づける。今度は、リディアの口のホンの前に……それが何を求めているのか、リディアですら容易に判った。

「あ、あの……」

リディアは顔を真っ赤にして、目の前のカシムの唇を見る。

「あれ、いや？ それだったら、無理は言わないよ。俺」

そのカシムのその言葉に、甘えられるほどリディアは小器用ではなかった。

リディアは意を決し、ゆっくりと顔をカシムに近づけていく。

カシムの唇は血が付いていた……おそらく、その口内も血まみれとなっているだろう。

先刻のローラの言葉通り、巫女であったリディアにとって、血肉を食すことは禁忌であった。特に、血をすするなど、狂人が魔物がすることと教えられてきた。

だからあの時必死で抵抗して、だが、今は、そのときの気持ち嘘のように、穏やかにそれに口付ける気持ちになっていた。

そして、リディアの唇に暖かく柔らかな感触が……

いつまでも訪れない。

「？」

自然に閉じていた両目をそっと開けてみる。

すると、目の前のカシムはなぜか大きく後ろに仰け反っていた。良く見ると、その後ろに鉄兜が見える。

いつのまにか背後に来ていた女騎士が、カシムの後ろ髪を引っ張ってそういう状態になったようだ……

カシムは、痛みの所為か涙声で抗議する。

「エリス君、君ってば、何でこういう良い雰囲気のために邪魔するの？」

「あえて理由を言うとなれば……貴様が人の話をまったく聞かないからだ！」

「ただだっ！」

「……………」

リディアは呆気にとられて、目の前で大騒ぎをはじめた二人組みを見つめる。

状況から見れば、先ほど彼女とローラがやっていたような口論であるはずなのに……とすれば逃げ出したくなるような剣呑な雰囲気のあるあれとは違い、いまのこれはどこか暖かく、優しい雰囲気が感じられた。

？・贈り物

思いつきり引つ張られた後ろ髪をさすりながら、カシムはジト目で現況を覗む。

「う、あんなに引つ張って、抜けたらどうするの」

「貴様が不埒なまねをするからだ……全くの自業自得だな」

「不埒だなんて……ただ単に、ちよつと舐めっこしようとしてただけじゃない。ねえ、リディア君」

「え？ ええ、と」

それが不埒な真似なんじゃないかなと思いつつ、無難に返事を返すリディア。

「……まあいい。とりあえず、今は風呂で身体を洗うことが先決だ」

「そうだね、俺もリディア君も汚れちゃってるし……お風呂で洗

「いつこをしよう！」

「……カシム、そんなに私に抜刀させたいのか？」

素人のリディアにもはつきりとわかるほどの殺気が、エリスの身体からカシムに放たれる。……リディアはそんな二人のやり取りに少々圧倒されながら、それでも楽しそうに微笑んでいた。

身体は血まみれとなり、ドレスの中に染み込んだ血でべたべたと布地が張り付き気持ち悪いという、散々な状態であるというのに、リディアはこの後宮に来てはじめての安らぎを感じていた。

「……もうすぐカシムの部屋だな……リディア、まず貴女が身体を洗うといい」

「え？ でも……」

まずは部屋の主が入るべきではと、リディアはカシムに目をやる。エリスはそんな彼女の肩に両手を置き、語りかける。

「安心するといい。貴女の入浴時には、私がカシムを見張っている。騎士の誇りにかけて、貴女に不埒な真似はさせない」

「え、ええと……」

視線の意味を勘違いしているエリスに、まずどんな言葉をかければいいのか、リディアは真剣に悩んだ。

「おや？ 開いてる？」

そんな中、カシムが己の部屋の以上を見つめる。

ようやく通路の先に見えてきたカシムの部屋は、扉が開け放たれていた。

「……ええと、俺は出るときちゃんと扉を閉めたよね？」

「ああ、確かにそうだったな」

そのときいつしよだったエリスが肯定する。

「と、いうことは。開けたままにしているのはレフィ君か……珍しいね。あの子が戸締りを忘れるなんて……」

「そうだな……レフィアがそんな基本的なことを忘れるなどとな……」

何気なさそうに二人で言い合いながら、二人の足はどんどん加速

していく。

リディアがあっさりと置いていかれる。

彼女を残し、二人は流れるように開け放たれた扉の中に滑り込む。そして、第一声は少し気の抜けた声だった。

「何だ、居るじゃないレフィ君ってば？」

扉から見える位置に座り込んでいるレフィの背中に、カシムが安堵の声をかける。

だが返事はない。

カシムが第二声を放つ前に、エリスが注意を呼びかける。

「カシム……その向こうを見る」

「うん？ ……おやまあ！」

言われたとおり視界を移動したカシムは、驚きというか呆れた声をあげる。

そこには、カシムの為に用意された……一度も袖を通していないドレスが山と積み上げられた……ご丁寧にも、その一着一着をずたずたに切り裂いて。

「……ひどい」

ようやく追いついたリディアが、それを目にして泣きそうな声ですう呟く。

「やれやれ、ローラお嬢様の考えていたことの正体はこれか」

「どういうことだ？」

「つまり、事前に俺の着替えをすべて使い物にできなくしてから……リディア君に俺の服を血をぶっ掛けてだめにさせる……すると、後宮内で俺の着る物が一着もなくなる、という寸法だったんだろうね」

子供じみた悪戯のようであり……その実かなり根の深い行為である。

この後宮で着替えを無くしたからといって、自分で調達してくることはできない。

貴族の娘などであれば、家元から送ってもらえる場合もあるが…

…カシムにはそんなこと不可能である。つまり、着替えを手に入れるためには、誰か別の側室に頼んで譲ってもらうしかないのである。そして、ローラはこの後宮のほとんどの者に支配力を持っている。つまり、誰も貸し手がない……カシムは裸で生活を強いられることになったかもしれないのである。

「やれやれ……ま、あのお嬢様じゃあこれくらいが関の山か……さて、レフィ君、大丈夫かい？」

ため息をつきながら、レフィに呼びかけるが、反応はない。

「レフィ君？」

「レフィリア？」

カシムと、そしてエリスの声も加わるが、レフィは反応を返さず、ただ何かを呟くのみ。

「あ……あ、あれ……う……」

「おいおい、レフィ君、どうしちゃったの？」

さすがにカシムも慌てて、レフィのそばに駆け寄る。

それでもこちらを見ないレフィの口元に、カシムは耳を寄せる。

少し鮮明になった呟きはこんなものだった。

「あ……あれ……片付け……ら……動い……」

「ふむ……」

カシムは少し考え込むと、おもむろにレフィの額に指先を突きつける。

「レフィ君」

返事はない。だがカシムは、優しい声で、

「お疲れ様。もうお休み」

言葉とともに、レフィの身体はその場に崩れ落ち、すぐに安らかな寝息を始める。

「さて……と。原因は、あのドレスの残骸の山か？」

眠りの術が成功したのを確認すると、カシムはその残骸の山に向かう。

向かいながら、後方のエリスに声をかける。

「エリス君、悪いけどレファイ君をどつかで休ませてくれないかな……後、リディア君のお風呂の件も、どうもここじゃ無理みたいだし……頼める？」

あの残骸の山に何かあるのかわからないが、それがレファイをあの状態に追い込んだことは間違いない……そして、それをリディアに見せれば、彼女も同じ状態に追い込むことになるかもしれない。

その事を察したエリスは、即座にカシムの頼みを承諾した。

「わかった……リディア、行こう」

レファイの身体を抱き上げながら、リディアに呼びかける。

「でも……カシム様は？」

「奴なら大丈夫だ……風呂は、私の部屋にもついているから、そこに入ると良い」

躊躇うリディアを、やや強引に部屋の外に連れ出していく。

それを見送り、それからカシムは残骸の山に歩いていく。

近づいていくと、ほんの小さい動きであるが、その山が震えるように動いていることに気づいた。

「ほほう……さてさて、何が出てくるやら……」

カシムは躊躇いなしに、動きの核と思しき部分のドレスの残骸をかき分ける。

そして、現れたものに……カシムの口元はこれ以上ないというほど皮肉げな笑みを浮かべる。

「……なるほど……『あれ』は、犬の血というわけか」

そう、残骸の山の中でうごめいていたのは……黒毛の犬だった。

それも、体中をずたずたに引き裂かれた……だと言つのに、傷口からほとんど血が流れていない……流れるだけの血を絞り取られたかのような有様。

それでも……その犬は、苦しげにもがくように、うごめいていた。「やれやれ……へたくそに切り刻んでまあ……おかげで、この犬君もこんなに苦しんでるのに死ねないでいるよ」

哀れみの視線で、その犬を眺めながら、呟く。

弱々しい犬の瞳をじつと見ながら、カシムはしゃがみ、その犬の顔に手を差し伸べる。

「さて……あのバケツの血の量は、人間でも死に至るほどの量があった。だと言うのに、君は生きて……そしてあがいている。その生への執着は何か？」

まるで人間にするように、ゆつくりと語りかける。

もちろん犬は答えないが、その瞳をカシムに固定する。

「何かやり残したことがある……やらなければならない事がある……やりたいことがある……そんな所かい？」

犬は言葉では答えられない。その代わりに、犬は差し伸べられた手に噛み付いた。

「なるほど……」

カシムが軽くてを動かすと、あっさりと犬の口は離れる。

もともと、噛み付くだけの力が無いのである。

「それが答えか……それなら、俺も協力しよう……」

噛まれた手と、もう片方の手で犬の顔を挟み、上を向かせる。

「それに……さすがに俺も少々腹が立っていてね……」

そう言いながら、犬の口に、自分の唇を近づける。

そして、呪文のような言葉を口ずさむ。

「では君に、力を与えよう……望みをかなえる力を……」

苦しげな、犬の生臭い息を感じながら、平静な声で続ける。

「君の願いに……魔女の呪いと、祝福を……」

言い終わると、優しい動きで犬の口先に己の唇を押し付ける。まるで愛しい者にキスをするかのように……

5話

?・友の死

少女はいつも泣いていた。

幼少のころより仕えてきた主は、従者を顧みること無く。

主の飼い犬として、そして自分の友としてずっと世話をしてきた友達は、いつしか主の不満をぶつけられるだけの道具とされ。

少女はいつも泣いていた。

だがそれでも少女は幸せだった。

傷ついた友を見て泣く少女に、その友達はいつも優しく涙を舐めとってくれた。

少女は、その暖かさだけで幸せだと、そう思っていた。

だが、そんな想いもあえなく消える。もう、あの暖かさを得られることはない……友は死んでしまったのだから。

?・復活?

後宮内には、そこで生活している側室等の為に様々な施設が設けられている。

内庭となつている庭園もその一つであり、その景観は首都の記念公園以上の費用をかけただけのことはあると、見たものすべてに思わせる。

夜中、その庭園の木々の中から、怪しげな煙が立ち昇っていた。

煙の元凶は、思い切りその庭園の美観を損ねるような大鍋である。大鍋の置かれているのは、なにやら地面に直接描かれた奇妙な文字らしき文様の円の上。火も起こっていないのに、大鍋の中身はぐつぐつと煮えたぎっている。

中身の煮沸する音に混じって、女の声がする。

「え」と、カリコルトにバルーダ……んで、ビエントを入れて……

後は」

意味不明な単語とともに、鍋の中に正体不明の物体が次々と放り込まれる。

一個一個が放り込まれるたびに、煙が様々な色に変化する。

「……ん〜、よしっ！ この『ドラゴンパール』も入れちゃおう。どうせ、師匠の所から持ち出したのだし、他に使い道が無いし……ついでに、古代の竜の血液の結晶だなんて、パチモノくさいからなあ。まあ、高価なものだし、景気付けに……えいっ」

気合とともに、小粒の赤い宝石が放り込まれる。それだけは、鍋に入っても何の変化もたらさなかつた。

「さてと、じゃあ仕上げといくか……」

声の主は、そう言うのと足元に置いていたモノを拾い上げる。

片手で持って、もう片手でくるんでいた布を取り払う。

中から出てきたのは……すでに息絶えた犬の屍骸だつた。

ただ、その口には鍋の下に描かれている文様と同じ模様の印された紙の札が張られている。まるで、そこから何かが出るのを塞いでいるように。

「うんうん、身体は死んでるけど、魂はまだ残ってるね。良好良好」
満足な声とともに、犬の屍骸を鍋の中にポンツと放り込む。

大きな水音とともに、正体不明のどろどろした液体に浮かんだ犬の屍骸は、驚くほど速やかに、あっさりとその形を崩し、溶けていつてしまふ。

それを確かめてより、女は胸の前で両手を叩き合わせ、拍手を打つ。

「それでは……はじめるか」

？・悪夢

その夜、ローラ・レヴァンドはなかなか寝付けなかつた。

腹の中身がほとんど出るほど、何度も何度も嘔吐した喉はがさがさに痛んでしまっている。そして、それほど吐いたというのに、息

をするたびに犬の血の匂いがするかのようで、その度に吐きそうになっってしまう。

(……気持ち悪い……どれも、これも、みんなあの女のせいよ！明日、目に物見せてやるわ……)

気持ち悪さと、嫌悪に涙を流しながら、ローラは憎き古い女に憎しみを募らせる。

高貴な存在である自分がこのような目にあって良いはずが無い。このような目にふさわしいのは、あのカシムやリディアのような卑しい者であるはずである。

ローラは心の底から、そう思っていた。

本当なら、今の最悪の気分は、あの売女のリディアがするはずのものである。それを、自分に押し付けるなど……はらわたが煮え繰り返るほどの怒りが沸く。

(許さない……汚らわしい下賤な女の癖に)

心中で忌々しげにののしり、齒軋りをする。

そんなローラの鼻腔が、忌まわしい匂いを感じた。

犬の匂い……。

再び激しい吐き気に襲われ、ローラは身もたえする。

何とかこらえ、吐き気が通り過ぎると、ローラは思い切り声を張り上げる。

「ルビィ！ ルビィ！」

真つ暗な部屋に響く大声に、隣の部屋からローラ専属のメイドのルビィが現れる。

暗闇で、ローラからは見えないが、目が泣き腫らしたように真つ赤に腫れている。

「……何の御用でしょうか、お嬢様？」

「ルビィ！ 臭いわ！ 臭いのよ！」

陰鬱なメイドの問いに、ローラは己の言葉だけを放つ。

「犬の匂いがするのよ。あのルドラの匂いが！」

ローラの飼い犬ルドラ……ローラが後宮にまで連れてきた愛犬、

と認識されている犬であるが、その実、ローラ本人が世話をすることとは一切無く、ほとんどをルビイに任せ、用つまりストレス発散のとき以外は、自分の部屋に入ってくることも許さない。

つまり、ルビイの部屋にはルドラの匂いが染み付いているのである。

「そ、そんな……でも、それではどうしたら……」

ルビイはほとんど泣き声で尋ね返す。ただでさえ、ずっと世話をしてきたルドラを失ったばかりなのに……ローラに、その匂いすらも拒絶され、罵られる。

「捨てなさい！ あのルドラが触れたもの、全部燃やしてきなさい。今すぐっ！」

「そんなっ!?!」

あまりの命令にルビイは悲鳴をあげる。

この上、ルドラとの思い出の品々まで失わされるとは……

「私の命令に口答えするつもり!? 早々に、言う通りにしなさい！」

「……………はい」

ルビイは涙をこぼしながら、消えそうな声で答える。

そんなメイドの様子に、ローラは毛ほどの関心も示さず。

「あと、出て行く前にその窓を開けておいて、空気の入れ替えをしないと、とても眠れないわ」

「……………はい」

言われた通りに窓を開け、そして自室に戻り、ルドラが使っていたシーツなどをまとめ始める。

作業をする手の甲を、こぼれた涙が幾度も打つ。

開け放たれた窓から入る、新鮮な空気にローラの気分もやや落ち着いていく。

ようやく、意識がまどろみ始めシーツをかぶり目を瞑る。

(全く、いつまでも役に立たない子よね)

瞑った視界の中で、ローラはそんなことを考える。

（いくら小さいころから一緒だったからって、何でこの私の付き人があんなトロイ子じゃないといけないのかしら……もっと有能な子だっているでしょうに……）
なのに、父上はどうしてか、それを許してくれないのよね。全く、娘の私にも良くわからない人だわ）

正直なところ、ローラは自分の父を余り好きではなかった。

ボクっとして、大抵のわがままは聞いてくれるものの、どういう基準か、ある一定の事柄に関しては頑固と言って良いほど頑なに拒むのである。

ルビイの件がそれである。ローラが彼女に暇を出したなら、もう再びローラにお傍付きはつけず、すべて自分で自分の世話をするようにと、半ば脅されるかのように言い渡されたのである。さすがにそのようなことはごめんだったローラは、おとなしくルビイをそのまま自分に仕えさせた。

（……それと、ルドラの代わりをどうしようかしら……もう、犬なんて冗談じゃないわ。考えるだけで吐きそう……かといって、猫じゃ物足りないし……）

自らの手で死に至らせ、血を抜き取った飼い犬のことに思考が行く。

一向に自分になつかない不敬な飼い犬が死んだということは、少し清々した気分にはなるものの、これからのストレス発散に支障が生じるのは問題がある。

そこで、あることを思いつく。

（そうだわ。あの子を代わりにすれば良いじゃない！）

もともと、ルドラはかつてローラがルビイをいじめていたのを、父親に思い切り叱られたことで懲り、その代替品として飼い始めたのである。

そしてこの後宮には、父親はいない。元のようにルビイをいじめても、誰も文句をいうものはいないのである。

そこまで考え、ローラは楽しげに含み笑いを洩らす。

(ふふ、あの子をいじめるなんて久しぶり……鞭で打てば、あの子も少しは役に立つようになるかもね)

己の振る鞭の下で、許しを乞うメイドの姿を想像し、悦に入る。そんなローラ感覚に、何かが感じられた。

「……………？ 何？」

ベッドから身を起こし、部屋を見渡す。だが、何も見えない。

窓から差し込む月明かりに、薄ぼんやりとした部屋。そして所々に転々とした濃い影の塊……それぐらいしか見えない。

「気のせい……………」

これが以前であれば、ルドラが勝手にこちらの部屋に入ってきたのかと疑いもするのだが、もうそのルドラは死んでいる。

おそらく風の音だろうと、ローラはベッドに再び横たわる。

気分を落ち着け、今度こそ寝ようと思った、その瞬間……何かが身体の上のしかかる感覚が襲い掛かる。

「きゃっ！ な、何!？」

ローラは慌てて目を見開き、身体の上を確認する。

そこには、影……としか形容できないものがのしかかっていた。

姿形が影となっているというよりも、そのもの自体の色が真黒なのだろう、薄暗いローラの視界の中で、はっきりと黒い形がわかってしまう。

「な、何なの!？ 誰？ 退きなさい!？」

わけもわからず、ローラはその影に命令をする。それが、人間の言葉を理解できるかもわからないというのに。

案の定、その影はそんな命令に何の反応も見せなかった。

影から何か平たく長いものが伸び、ローラの顔にベチャッと擦り付けられる。

「ひいっ!」

たまらず、ローラは嫌悪に身を竦ませる。

擦り付けられた頬には、ドロドロとした粘液がべったりとこびりついてしまっている。

そして、影がのしかかっている部分から、シートを介して濡れた感触が浸透してくるのを感じた。良く見ると、その影の全身がべちよべちよにその粘液にまみれているのである。

「いや……やつ……むぶっ！」

首を左右に振り、悲鳴をあげようと開かれたローラの口に、その平べったい物体が押し付けられ、押し込まれる。

「んんうううっ！」

不潔な粘液にまみれたそれを、あろうことか口内に入れられたシヨックに、ローラは力の限り手足を振り、暴れ始める。

その物体を突き飛ばすように、ローラの右手が突き出される。

「ツツツ！！？」

それは、あっさりと物体の胸と思しき部分に沈み……そして、何の抵抗もなしに向こう側まで突き通った。

貫き出た左掌に外気を感じた瞬間、ローラの意識はぶつとりと闇に沈んだ。

？・魔女の誘い

「あらら？」

後宮の庭内にて、カシムは呆気にとられた声をあげる。

「もうダウンか？ 最近のお嬢様は、根性が足りないな。せつかく俺が汗水たらして用意したのに……呆気な」

ぼやきながら、目の前の大鍋を叩く。

返ってきたのは、空虚な反響音、それがこの大鍋が空であることを示す。

「やれやれ……まあ良いか。さて、それじゃあ『君』の根拠でも探すとするかね。それまで、そのまま好きにしていよいよ」

その場にいない誰かに語りかけ、カシムは大鍋の前から離れる。

歩きながら、腕組みをし、首を捻る。

「とは言うものの……どこにしようか？ さすがに俺の部屋ってわけにも行かないし、それ以外といってもこの後宮内の間取りをまだ

良くわかってないからな……エリス君にも聞けないし」

まず、エリスに事情を話してもしたら、即座に首が飛ぶ。

かといって、カシムが独力でどうこうできるほど、この後宮は狭くも親切にも作られてはいなかった。

そんなカシムの目が、上空に向けられる。

「おや？」

その目が捉えたのは、夜空にも目立つ白い煙柱……

「こんな夜中に、怪しいことやってる奴がいるもんだね」

自分のことを棚上げに、そう指摘しながら、ごく自然にその方角に足を向ける。

ただ純粋な好奇心のみの進行により、カシムはその煙柱の元凶と思しき場所に辿り着く。

なんと言うことはない、ついたのは庭の外れのゴミを燃やす焼却炉だった。

夜の暗闇の中、一人のメイドが炉に火を入れ、一つ一つゆつくりとゴミらしきものを放り込んでいる。怪しげも無い光景……そのメイドがなぜか泣いていることを除けば……

「何をしているのかな、君？」

「ひっ!？」

何気ないカシムの言葉を唐突にかけられ、メイドが悲鳴をあげて蹲る。

座り込んでがたがたと震えるメイドに、カシムは困ったようにこめかみを指で搔く。

「こらこら、人をお化け扱いってのは、ちょっと失礼なんじゃないの?」

「え?」

苦笑いのカシムの言葉に、ようやくそのメイドが顔を上げる。

「ま、こんな夜中にいきなり声をかけた俺にも非があるか」

「……ええ、と。貴女は、どちら様ですか?」

暗がりとはいえ、明らかに見覚えの無い顔に、メイドが戸惑いを

見せる。

が、少しして、ここ数日の主の不機嫌の原因に思い当たる。

「あ……ひよっとして、カシム様ですか!？」

「へえ、俺のことを知ってるわけ。いやいや、光栄だね。話も早いし」

ニコニコと、可愛い女の子に名前を知ってもらっていただけで上機嫌なカシムだが、その彼女をメイドは複雑な心境で見つめる。

(この人のせいで……)

瞬間的にそんなことを考えてしまい、慌てて振り払う。

確かに、主であるローラがルドラを殺すまでに至った理由の一つが、このカシムという女性にある。

でも、結局のところカシムという理由がなくとも、いずれルドラは死に至ったであろうことは、メイド……ルビイは何よりも良く理解していた。

ただ、死因が刃物か鞭かの違いだけで、行き着く先は一緒……判っていても、止められなかった自分に、何よりも責任がある。

「ん？ どうしたの？」

名前を聞いたとたん黙り込んでしまったルビイに、カシムは首を捻る。

「……え？ いえ、その……なにも」

「ふん、で、君はここで何してたわけ？」

慌てて我に返るルビイに、カシムはさらりと質問する。だが、その質問は今の彼女には辛辣すぎた。

「ただゴミを燃やしてるだけのようには、悪いけど見えないんでね。何しろ、泣きながらである。誰が見てもそう思うだろう。」

ルビイにもそのことは重々わかっている。わかっているのだが、どうしてもカシムの声が、主であるローラの声と重なってしまう。友であるルドラの死を軽々しく罵倒しているように聞こえてしまう。

「貴女の……」

カシムのせいだと、思わず口に出そうになってしまった。

「うん？ 俺の？」

「っ！ 違います！ 違うんです！」

「ううん？」

カシムに問い返され、己の口にした言葉を悟り、ルビィは慌ててそれを打ち消す。

不可解なルビィの慌てように、カシムは不審をあらわにする。

「ふむ、まあ良くわからんが。俺にはあまり言いたくないこと、てわけか」

そういつて、カシムは周囲に目を走らせる。

ルビィの足元には、いまだ残った捨てるゴミの数々が散らばっている。

その一つ一つを見て、その名称を呟く。

「ペット用のシートに、ペット用のトイレ……それで、これまたペット用の遊戯用玩具らしきものに最後にネーム入りの首輪……ふむ」

頭の中でそれらを羅列し、整理する。そして、ポンツと手を打ち

「おう、ひよつとして！ ついさつき、俺の部屋に放り込まれた犬君の飼い主かい？」

いきなり正鵠を突くカシムの言葉に、ルビィは身を竦ませる。

「ッ！！ あ……いえ……あの……」

「いや、そうかそうか。でも、君も災難だね」

慌てて言い逃れようとするルビィの肩に、馴れ馴れしく手をかけ、カシムはのたまう。

「泣きながら、身の回りの品を焼いてたって事から見ると、かなりあの犬君を大事にしていたんだろう？ それをあんなに傷つけられて、嫌がらせの道具になんかされちゃってさ」

「え？」

カシムの意外な言葉に、ルビィは声とともに顔を上げる。

まじまじとカシムの顔を見ながら、思う。今何とあったか……？

『傷つけられて……』と言った。『殺されて』とは言わずに、『傷つけられて』と。

その言葉だけで、希望を見出せるほどルビィも純粹ではなかった。だが、それがわかっていても、それにすがろうとするほど、彼女は追い詰められていた。

「あ、あの、ルドラ……その犬はどうなって……その、死んだのですか？」

恐る恐る、聞く。答えを聞くのが本当に怖い。

「うん？ ああ、ちよつと死ぬほど弱っててね……」

やはり、と一瞬落胆するが、

「ちよつと、俺が手を入れてやったから、もう元気に遊んでるよ」

「……嘘」

思わずルビィの口から本音が飛び出す。それにカシムは顔をしかめ。

「心外だなあ……嘘だなんて、ほんとだよ」

「あ、す、すみません……でも……だって……」

「まあ、さすがに元のままってわけじゃないがね。ある意味、かなり不自由な風になっちゃったりしてるな」

その言葉は喜びに浮き上がりだしたルビィの胸を再び深淵に叩き込む。

「……不自由、とは？」

震える声で尋ねてきたルビィに、含み笑いを浮かべてカシムは答える。

「うーん、まずは、牙も爪も使い物にならなくなっちゃったねえ」

「ああ……」

ルビィはため息のように絶望の吐息を洩らす。もはや、ルドラは好物の肉も食えることはできないのである。

「あと、皮膚とかもだいぶ変質してたから、日光とかにもろくに当たれないだろうな」

「そんな……」

それでは、散歩すらできない。

ただでさえ、不自由でつらい日々を送ってきたルドラから、さらに数少ない幸福を奪われてしまったのである。

ルビイの瞳から、涙がこぼれる。

「……とまあ、そんな感じで。犬君は、一匹じゃあろくに生きれない身体になつてるわけだ……もし、これから幸せに生きるとしたら、誰かサポートする人がいるだろうねえ」

落胆するルビイだが、最後の言葉に光明を感じ取る。

「あの……サポートって？」

「うん、たとえば。牙や爪が使えなくても、それでやることを代わってくれるとか、日光に当たれなくても、日がさしている時間に日に当たらないような場所を用意してくれるとか、ね。そういうことやってくれる人がいたら、それはそれは助かるだろうね」

そこまで聞けば、もう我慢ができなかった。ルビイは勇んで声をあげる。

「私が！ 私がそれをやります！」

「へえ、君が！？」

さも驚いたようにカシムは表情を造って見せる。

「大丈夫？ さっき言ったのだけでも結構大変なことだよ？」

「やります。やりたいんです！ やらせてください！」

「ふむ」

内心ほくそえみながら、表面では渋面を作る。

「では尋ねるけど、牙と爪の代わりも、君はできるんだね」

「はい！」

「それがどういう意味かわかっている？ いま、あんな目にあつた犬君が、牙と爪がちゃんとしていたら、どういうことをやりたがるか、それをわかって言ってるわけ？」

「……？」

カシムの要領の得ない問いに、ルビイは首を捻るが、次第にその意味を理解していく。

それを見取り、カシムはそれを口にする。

「当然、犬君は仕返しをしたがっているだろう。その牙で、爪で…」

「あ……あ……」

ルビイの顔から血の気が引く。

当然の話である。あんな目に合わされたのだ、憎んでいないはずが無い……

その憎しみが、牙と爪に込められ、その向く先が……自分の主であるローラに向くのは至極当然のことである。

そして、その代わりをルビイがする、と言うことは……

「な？ わかっただろう。君にはちよつと無理な話じゃないかな？ カシムの声を聞きながら、ルビイの脳裏にローラの顔が浮かぶ。当たり前のようにルドラを打ち、笑っていたローラ。

泣いてすぎるルビイを無視して、ルドラの身体を切り刻んでいたローラ。その傷口からこぼれる血を、集める作業をルビイは無理やりやらされた。

ルビイの思い出の中のローラは、いつも笑っていた。ルビイが泣いているときも、ルドラが苦しんでいるときも、いつも笑っていた。いつのまにか答えは決まっていた。

それを告げるために、ルビイは唇を動かす……

？ 不在

朝の穏やかな光が頬を暖かくしてくれる中、ローラは目を覚ます。

「う……うん……」

身体全体が重く、まるで鉛のようであった。

「……なにか、とても嫌な……怖い夢を見ていたような……」
頭の中まで重く、それが何であったのか思い出せない。

重い目蓋がまた閉じられようとするのを、ローラは指で擦ろうとする。

その指に、ネチャツとした感触を感じ、ローラの意識は一気に覚

醒する。

指を離し、目の前に持つてくると、透明な粘液が糸をひいていた。

「な……嘘……」

夢だったはず……そう思いながら、己の身体を見下ろす。

「ッ……！」

ローラの肢体を覆う薄い寝着が、びっしょりと粘液に濡れ、肌
張り付いている。

上半身から、下半身まで……まるで頭から水をかぶったか
のように。

「あ……うあ……」

何かを言おうとして、ローラは自分の口の中が、異様なほど粘
っていることに始めて気づく。そして思い出す。

夢の中で、夢だと思っていた記憶の中で、粘ついた何か
が口の中に入り……そして、意識を失ったと……その後、その
何かはどうなったのか……

「あ……あ……い……」

ローラは、思考を止めようとした……だが、走り始めた
思考はどっちらにも止まらなかった。

脳裏に、幾通りもの『あの後』が連想される。

「いや……いや……」

見るも汚らわしい怪物に、のしかかられ、蹂躪される光景を
想像してしまい、ローラの口から絶叫がほとばしる。

「いやあああああああっ……！」

『良い所を見つけた』それが、朝、会うなりに放ったカシム
の言葉である。

そして、返事も待たずにカシムはリディアの手を引き、『そこ』
へ連れて来た。

「ほら、良い所だろう?」

其処は確かに良い所だった。

遮るものの無い朝日が暖かく照らす日溜りの中にて、白のテーブルクロスに覆われたテーブルが、等間隔で並べられている。

朝早くだというのに、何組かのグループがすでにそこで茶会を開いていることから、その場所の人気の高さが感じられる。

だが……

「で、ですが……このような所に居ては、またローラ様に……」

目立つことこの上ない場所な上に、ここはローラのお気に入り場所でもある。

一日のうちに数回、決まってここで紅茶を飲むのがローラの日課であると、リディアですら知っている。

実際、すでにテーブルを陣取っている少女らの視線は冷たく、追いつくようにこちらに向けられている。

「ここはだめです。カシム様はともかく、私が一緒では……」

この国において、異端の褐色の肌を持つリディアはただでさえ目立つ存在である。

このような場所で、ローラに気づかれないはずが無い。

だと言うのに、カシムは気楽に返してくる。

「ああ、心配ない、心配ない」

根拠も何も言わずに、嫌がるリディアを一通りの茶の用意ができたテーブルに引っ張っていく。そこには、すでにレフィが控えていた。

「や、レフィ君。場所取りご苦労様」

能天気なカシムの挨拶に、レフィは陰鬱な顔で答える。

「はい……言いつけですから、茶の用意をしておきましたけど……本当にここでお茶会をするつもりですか、カシム様？」

「うん、もちろん。こんな気持ちよさそうな場所で、お茶を飲まない道理がある？ いいや、断じて俺はそんな道理は認めないね」

不必要なまでにはつきりと断言する。

その様子に、レフィは疲れたため息をつく。正直、レフィは今日は調子が良いとはいえなかった。昨日、あのようなものを目の当た

りにしたのである。できれば、休みたいと思っていたのだが、それを言う前に、カシムは顔を見るなりこの茶会の準備を言い渡されたのである。

それだけなら問題もさほど無いのであるが、ここはいわばローラ嬢のテリトリー……レフィでも、昨日のあのカシムへの嫌がらせはローラの手によるものであることぐらい察しはついている。

なんとしてもとめるべきだったかもしれない……などと思っていると、カシムの声がある。

「……ほら、レフィ君もどうしたわけ？ 早く座りなつて？」

「え？」

意識を現実に戻すレフィに向かって、既に座っているカシムが隣の椅子を引き、手招きをしている。

「座るつて……私がですか！」

驚くレフィに、カシムは極当たり前な口調で。

「当たり前だよ、他に誰が居るつての？」

すでに、カシムの向い側にリディアが腰掛けている。

確かに、座っていないのはレフィのみ。だがレフィの困惑は治まらない。

「で、ですが、私はただのメイドで……！」

本来、メイドが主人と同じ席につくことなど許されないことである。こういった場では、メイドは主の傍に控え、命令があるまで立ち尽くすのが常である。

だが、カシムはそんなレフィの言葉にこそ驚いたようである。

「何言ってるの？ このお茶会の主役が」

「はい？ 主役つて、私が……？」

「そ、言わなかった？」

当たり前のように、とんでもないことを言う。

レフィだけでなく、席についているリディアもさすがに驚きを隠せないでいる。

「な、な、そそんな、とんでもない！ 私が、主役だなんて!？」

慌てるレフィに、カシムは笑って語りかける。

「何がとんでもないわけ？ このお茶会は、君を元気付けるために、俺が発案した……つまり、君が主役ってわけだ。単純明快だと、俺は思っけどね」

「元気付ける……私を？」

目をぱちくりとさせ、レフィは自分の顔を指差す。

「うん、昨日、レフィ君には刺激の強いものを見せてしまったからね。多分、今朝もかなり尾を引いて参ってるだろうなと思ってたら、案の定。顔を見たら一目でわかった」

「あ……」

レフィの頬に朱がさす。

「その顔を見たら、昨夜この場所を見つけたのを思い出してね。即興でこのお茶会を計画したわけ……まあ、エリス君が捕まらなかったのはちよつと痛いけど。澄んだ空気に、気持ち良い朝日、さらには紅茶の良い香りに、おいしいお菓子……最後に可愛い女の子、とくれば、どんな悪い気分だって吹き飛ぶってのが俺の持論」

「カシム様……」

この人は、口先だけでなく、心の底から自分をメイドではなく、友人として思っていてくれるのだ……と言う事実が、レフィの心に暖かな鼓動を生む。

「ささ、座って、座って」

カシムに促され、レフィはそれに従い席につこうとする。

だが、その前に問い掛けるようにリディアの方へ視線を向ける。

いくらカシムがこだわらないとはいえ、リディアはメイドなどとの同席をどう思うだろうか。仮にもリディアは異国の姫君なのである。

どうやらその心配は杞憂であり、レフィと目が合ったリディアは微笑みながら、安心させるように小さく頷いてみせる。

ようやく安堵したレフィは、静かにその椅子に腰掛ける。

「さてと、それじゃあ始めようかね」

カシムはご機嫌な様子で、自ら茶の準備を始める。

「あの……」

「その……」

その手を、二種類の声が留める。

カシムはまず反応したのは、レフィの方の声だった。

「うん？ 何、レフィ君？ は、まさか……、俺のお膳立てが気に食わないとでも……俺はともかく、リディア君は正真正銘可愛い……しかもお姫様だと言つのに……やはり、エリス君を逃したのがだめだったか！」

「違います！」

思わず声を荒げて、否定する。

カシムは、すぐさまふざけた調子を引っ込め。

「まあ、それは冗談として。どつたの、二人して？ このお茶会が嫌とか？」

その代わり身に、レフィもリディアもどつと疲れを感じる。

お互いのため息を耳にし、顔を見合わせると、どちらとも無く微笑みあってしまう。

何か、奇妙な共感を持つてしまった。

「……そうではなく。場所に少し問題がある、と思つのです」

お互い、思っていることは一緒だと確信し、リディアが代表して説明する。

「場所？ うん、これ以上ないというほど最適だと思うのだが」

「私もそう思います。ですが、ここにいて昨日のようなこととなれば、またさらにレフィリアさんに嫌な思いをさせてしまうのではないかと……」

「あの……私なんかより、リディア様が……ローラ様に見つかる、その……」

最後のほうを、レフィが少し付け加える。

レフィも、この後宮に仕えるメイドである。リディアのその不憫な境遇はよく耳にしている。

そんなレフィの心遣いに感謝しつつ、リディアは言葉を続ける。
「あの、良ければ私の部屋を提供しますので、そこに場所を移動しませんか？　あまり、良い場所ではないですが、誰の邪魔も入りませんし……」

カシムの部屋は、昨日の有様を見て、使用不能であることはわかっていた。

今まで、ローラがリディアの自室まで押しかけてきたことは無い。あそこであれば、このお茶会を邪魔されることは無い。

そんなリディアの心配りなど、カシムはあっさりとなににする。

「ああ、大丈夫大丈夫。て、さつきも言わなかった？」

てきぱきと茶を入れながら、カシムは周囲の険悪な目つきのお嬢様たちを指し示す。

「まあ、ちよつと視線が痛いのが難だが。まあ、あの子らの見てくれば悪くないから、俺は気にしないとして……直接的には何もしてこないよ。ローラお嬢様がいない限り、自分たちだけでは何をしようなんて考えられないような連中はかりさ」

ずけずけと、そんなことを言っただけ。

「ですが……ローラ様がもうすぐここに」

リディアの言葉に、レフィが頷いて肯定する。

ローラの茶の時間は、メイドにとっては注意事項である。ローラの茶の一時の安らぎを、ちよつとした粗相でも、邪魔をしたなら、どんな罰が下ることとなるか。

その時間帯、メイドは極力そこには近づかない。主が命令でそこに向かうとき以外は。

「ああ、大丈夫。来ない来ない」

掌をパタパタと、あっさり否定する。

「は？」

「来ないって。少なくとも、今日一日は……いや、ひよつとするとしばらく、かな？　いやいや、ずっとということもありうるな」

「はい？」

呆然とするレフィとリディア。その二人の前で、カシムはしばし考え込む。

「うーん、あ、そうだ！ ねえねえ、レフィ君」

「は、はい！」

「ローラお嬢様が、姿を見せないのが、一日か、しばらくか、それとも……ずっとか？ レフィ君はどれが良い？」

それはそれは楽しそうに、そう質問されてしまい。レフィはきよとんと、その意味を図りかねた。

そのころ、ローラの自室にて。そのローラは、いまだベッドの中でシーツに包っていた。

頭からシーツをかぶり、手に父の友人から貰ったお守りを握り締め、がたがたと震えている。

さすがに、あの粘液を落とすために入浴はしたものの、それからずっとベッドに籠ったままである。

綺麗に洗い流したはずなのに、あの粘液の粘質感がまだ肌に残っている。それがさらに、ローラの恐怖心を煽った。

その部屋の扉の外側にて、ルビイは全身鎧を身まとった騎士と問答をしていた。

「……つまり、ローラ嬢とは話ができないということか？」

「はい、エリシエル様……お嬢様は具合がよろしくないと、朝からずっとベッドに入られたままで、誰ともお会いにならないそうです。ルビイは滞りなく、必要なことをエリスに告げる。」

それに、エリスは鉄兜の中でため息をつき。

「そうか……それでは仕方ないな」

あの後、怯えるレフィに話を聞き、さすがに目に余るとローラに警告にきたエリスだが、相手は仮にも上司の息女である。無理強いはできない。

それに、ローラが今日一日外に出ることは無い、それだけがわかれば十分である。

少なくとも、今日はエリスの胃を痛めるような事件が起こる確立が、大幅に減ったということである。

「では、ローラ嬢には、ゆっくりと養生するようにと、伝えてくれ」
本音では、このままずっと、カシムと顔を会わせて欲しく無かったりしたが、それを口にするほど、正直でもおろかでもない。

「はい、畏まりました」

ルビイは、嬉しそうににっこりと微笑み、深々と頭を下げた。

？・魔女の犬

「や、こんばんは」

などと気安げな挨拶とともに、カシムが姿を現したのは、もう日も沈んだ夜中だった。

夕刻、分かれたばかりだと言うのに、いきなり自室に訪れたカシムに、リディアは当惑する。

「カシム様……このような時間に私の部屋に、何用ですか？」

「いやいや、ちょっとそういうこと聞くのは後に、早く中に入れてくれない。見つかるやばいから」

部屋主の返事も待たずに、扉の隙間からずかずかと入室を果たす。無作法なカシムの行動に呆気を取られ、リディアは呆然となってしまう。

「ほ、綺麗な部屋だねえ」

勝手に中に入ったカシムは、勝手に部屋を物色し始めたりする。

他人に部屋を見られることに、恥ずかしさを感じ、リディアは力を振り絞りカシムに話を振る。

「あ、あの……それで、どういった御用なのですか？」

「ああ、そうそう、ちょーっとお願ひ事があってね」

さり気に服の仕舞っている棚などに興味を示していたカシムが、そこでやっと本来の目的を思い出す。

「お願ひ、ですか？」

「そ、ちょっと不躰だけど、聞いてくれるかな？」

「え、ええ。私にできることでしたら」

不用意にそんな返事を返してしまうのは、育ちだけでなく本来の気質であろう。

カシムは内心ほくそえみながら、そのお願いを口にする。

「何、簡単な事だつて。ちよつとの間、俺の『身体』を見張つててくれつて、ただそれだけ」

「はい？」

どんなに望まなくとも、拒もうとも、夜は必ず訪れる。

締め切った部屋に暗闇が染み込んでくるのを、ローラは絶望的な思いでシーツの中より感じていた。

いつそ意識を失えば、格段に楽なのだろうが。目が冴え、意識がはつきりしてしまっている。とても眠れる状態ではない。

どうしようもないほど、怯えながら、それでもルビィに助けを求めようとは、ローラはしなかった。

己の下につく、使用人に弱みを見せることなど、ローラには考えられないことである。

だから、今一人で心細かろうと、ほんの壁一枚隔てた部屋にいるローラに声をかけることすらできないでいる。

(大丈夫よ…… あれは、夢！ 夢なんだから……)

必死になって自分に言い聞かすが、そのようなこと偽りであることは本人が一番良く理解している。

あれは、昨晚にて現実を起こつたことなのである。

そして、それは同時に、それが今晚も起こる可能性があることを示す。

ローラはぎゅっと手の中のお守りを握り締める。

その彼女の耳に、ベチャツとした物音が聞こえた。

「ひっ!？」

それが何か、考えるより先に、ローラの喉から悲鳴が漏れる。

その声に引かれるように、物音がベチャツベチャツとこちらに向

かつて近づいてくる。

(いや……こないで！)

だが、その願いもむなしく、物音はベッドまで辿り着き、一際大きい上に飛び乗る音がする。

ベッドのきしむ音に、ローラは身体を丸めるように縮め。己の身体を抱きしめる。

気配がどんどん近づいてきて、終にはローラの身体に接する。

「ひいッ！」

背中に重量感を感じ、続いてシートから染みる冷たい感触。

直接的な接触はシートで防いでいるはずなのに、粘液が染み肌まで達するので、まるでその何かが生かすシートを通り抜けて、直接ローラの身体をなぶっているように感じてしまう。

(嫌、嫌よ!?)

昨夜、口にもぐりこんだ平べったい物体が、背中を通り過ぎ、わき腹に至ると、ローラは嫌悪のあまり、恐慌状態に陥る。

相手がいると思しき方向にシートを跳ね上げ、その反対方向に走り逃げようとする。

「きゃっ！」

だが、逃げようとしたその足が、何かに引っ張られその場に倒れてしまう。

「な、何よ!?!」

慌てて足首を見ると、そこには黒く細長いものが例の粘液をたらし、足首に巻きついてた。そしてその細長いものの先は、先ほど跳ね上げたシートの向こうへと……

シートは、その中に何かがあることを示す盛り上がりを見せ、そこからじわじわと黒色の染みが染み出していく。

染みはどんどん広がり、その反対にシートはどんどんしぼんでいく。最後にはシートがペシャッとつぶれると、染みが一点に集まり、盛り上がり、昨晚見た黒い物体へと形造られる。

まるで水のようにシートを透過した『それ』はゆっくりと、恐怖

に硬直したローラに近づいていく。そのとき、ローラは相手が四足歩行する存在であることを知る。

「や……やあ！」

黒い獣としか形容のできないそれは、ローラに近づくなり、顔と思しき場所から、舌のようなものを伸ばし、ローラの頬を舐める。先ほどの平べったい物体はそれだった。

「ひっ、や、汚い」

嫌悪に顔をそむけたローラに、獣はそのまま舌を下げ、首筋に這わせる。

怖気の走る感覚に身震いしながら、ローラは必死になって逃げようとするが、腰が抜けてしまって、立てすらしらない。

舌がさらに下がり、胸元に至るとローラはたまらず助けを求める叫びをあげた。

「ルビイ！ ルビイ！！」

ただ自分に従うだけの、虐げるだけの存在であった彼女の名を、ローラは必死になって叫んだ。ルビイがこの怪物に勝てるなど露とも思っていない。ただ、自分の身代わりになってくれさえすればよい。

「ルビイ！ 早く来て！ 私を助けて！！」

怪物の舌に、王子にしか触れることを許さなかったその豊かな乳房を蹴られながら必死に助けを求める。だが、助けは一向に現れなかった。

確かに、この部屋は通路に音が漏れないように防音がなされてる。犬の悲鳴などを聞かれて、よからぬ噂など立てられぬために……しかしそれは通路側だけの話で、隣のルビイの部屋にはそれは無い。聞こえているはずなのである。

だが、ルビイは現れない。

「ルビイ ……！！ ひいつ！？」

喉が裂けようかというほど絶叫するローラの乳房に、何か鋭いものが突きたてられる感触が襲う。

(噛み付かれた!?)

実際には痛みは感じなかったのだが、ローラは反射的にそう判断し、とっさにそれに向かって腕を叩きつけていた。

お守りを持っていたほうの腕を……

父が友人から贈られたと、手渡されたときは何の感慨も無く。ただ、愛想で嬉しそうに微笑み受け取り、後はほったらかしにしていた護符……それが、怪物の身体に打ち付けられる。

渾身の力が籠ったその打撃は、昨夜同様怪物の身体に沈んでしまふ。……だが、怪物の体に触れた護符は、その中で強力な光を放つ。『ギャンツ!!』

水が蒸発するような音と、獣の悲鳴が重なり。

閃光とともに、光に照らされた怪物の姿がローラの目に飛び込む。それは、ローラが良く知るものだった。光に照らされても、なお黒いその体躯……

その見知った姿を認識したローラの意識は、瞬時に真っ白に染まる。

「え」と、私は何をしていたらいいのかしら？」

リディアは自室にて、困った風に首をかしげている。

自分の身体を見張れと言い残し、カシムはリディアのベッドの上に座り、瞑想するかのように目を瞑り、そのまま動かなくなってしまう。

顔の前で手を振ろうが、頬を軽く叩いてみようが、声をかけようが、全く反応しない。

(巫女の『神懸り』の状態に似ている……)

リディアの先代の巫女がそうなるのを、一度だけみたことがあったが、その状態にそっくりだと感じた。

が、そのことより、当面はリディアが何をすればいいかということが問題である。

明らかに異常な状態のカシムを前に、人を呼ぶべきか……普通に

考えたらそんなのかもしれないが、カシムの言葉を思い出し思いとどまる。

かといって、このままじっと見ているだけでも……

そんなことを悩むリディアが数瞬カシムから視線を放す。

一瞬、リディア達のいる部屋が赤く染まった。

「え？」

慌ててカシムに振り返った途端、目にしたのは彼女の左腕が燃え上がるという衝撃的な光景……腕が燃えているというのに、カシムはいまだ目を瞑ったまま微動だにしない。

「きゃあああっ！」

リディアは思わず悲鳴をあげ、慌てて助けを求めて扉に駆けようとする。

だが、動揺を抑え、カシムの言葉を思い出し、踵を返してカシムの元に戻る。

（私が……どうにかしなければ……）

頼まれたのは自分なのである。このことをカシムが予想していたというのなら、リディアを信頼して、頼んでいったということであり、その信頼を裏切るわけにはいかない。

「火……まず火を消さない」と

周囲を見渡し、水差しを見つける。

とっさに手にとるが、その重さに落胆する。

とてもではないが、カシムの左腕に燃え上がった火を消せる量ではない。

（どうしたら良いの？ …… 水は部屋の外に行かないと……でも、そうしたら……）

もちろんそんな暇はないし、部屋を出ている間に誰かに今のカシムの状態を見られる……リディアは理屈抜きで、それが最も避けるべき事態だと判断していた。

リディアは悩み……解決方法を探す。

「……っ！」

思い出した。かつて巫女として培った記憶の中に打開策となる知識を。

太陽神の巫女は、火神ほどではないにしろ、火に関する知識を教えられる。

巫女の力を失い、その記憶を忌まわしげに心の奥に仕舞っていたのだが、今の事態がそれを掘り起こさせた。

リディアは躊躇うこと無く水差しを手にカシムに駆け寄り、まずベッドのシーツを掴む。

シーツをすばやく、左腕の燃えている部分に巻きつける。

無論その程度では火は消えない。すぐにももシーツを燃やして、さらに燃え上がるだろう。だが、リディアはすかさずそのシーツの巻きつけた部分に水差しの水を振り掛けた。

水の蒸発する音とともに、濡れたシーツは即座に腕に張り付く。

火が燃えるのには、空気が必要である。そして濡れた布は空気を通さない。

恐る恐る巻きつけたシーツを取り去ると、カシムの左腕は軽度の火傷を負っているものの、火は完全に消えていた。

「ふう〜っ」

胸を撫で下ろし、安堵のため息をつく。

安心しながら、カシムの顔を伺う。

呆れたことに、いまだ瞑想をしたままであった。その不自然な様子が不安を誘う。

「カシム様……カシム様？」

頬を軽く叩きながら、呼びかける。

返事が無い……と思ったら、その目がパッチリと開いた。

「いやあ、びっくりした……あれ？ リディア君、なんか焦げ臭くない？」

飄々としたカシムの物言いに、リディアは絶句する。

「おおっ、左手がピリピリすると思ったら、何で火傷してるわけ？」

「……火がついたからです……」

なんとなく疲れた声で、リディアが説明をする。

説明を聞き終わると、カシムは感歎をあらわに右腕でリディアを抱き寄せる。

「いやいや、リディア君てばやってくれるね！ 助かったよ、ありがとう！」

「あ、あの……何があったのですか？」

抱きしめられ、顔を赤くしながら、リディアは説明を求める。

それにカシムは少し考え……無論リディアを抱きしめたまま。

「うーん、その前にちよつと聞きたいことがあるんだけど。この国の宮廷魔術師って、どんな奴だった？」

「え？ ……サーバント家のライル公ですが？」

「えと、そいつはあのお嬢様の父親ロレンツ公と仲良いの？」

「……ええと、あまり詳しくは知らないですが……レムン国の両翼とたとえられるほどですから、仲が悪いということは無いと思います」

「なるほど……迂闊だったなあ」

リディアの答えに、悔しげにカシムが唸る。

「はい？ どういうことですか？」

「いやなに……それを知ってたら、護符があることぐらいで驚かなかったんだけど……」

「護符……カシム様！ いったい何をしていたのですか！？」

聞き捨てなら無いカシムの発言に、リディアは詰め寄る。

巫女であるリディアは、当然護符がどのようなものであるか熟知している。そして、それが先ほどのような事態を引き起こすということが、どういうことであるかも。

先ほどのカシムの問いも合わせて、最悪の予想が浮かび上がる。

「まさか……ローラ様を……」

「ははは……いやまあ、言ってしまうえば、大体そんなところかな」
言い逃れもせず、潔く……というか何も考えていなさそうに、あ

っさり肯定する。

リディアは、真っ青になり、カシムから身体を放そうとする。だが、カシムの腕がそれを許さない。

「どうして……どうして、そんな……」

震える声の問いかけに、カシムは当然のように答える。

「邪魔だから」

まるで、うるさく飛ぶ小虫を払いのけるかのような何気ない表情

……

声も無く、リディアは呆然とそのカシムの顔を見詰める。

「前にもいったけど、俺つては自分の願いに率直でね。で、俺の今の望み、リディア君や、エリス君、そしてレフィ君とここで楽しく過ごすっていう願い……その邪魔なんだよね、あのお嬢様は……だから、邪魔できないようにちよつと仕掛けを、ね」

そこだけ、悪戯好きの子供のような表情を見せる。

「そんな……で、では、ローラ様はどうなってしまうのですか……」

「うん？ どうもならないよ？ なんか勘違いしているみたいだね」
心外だと言いたげに、カシムはため息をつく。

「俺は別に、ローラお嬢様を殺そうとか、どうしようとか考えてもいない。ただ、俺の望み。つまり、俺の進む道の邪魔な小石をどけるだけ……まあ、ちよつと嫌な思いはさせるけど、邪魔ではなくなったら、もう用も無いし、手も出さないよ」

さほど好みでもないしね。と冗談のように加える。

「ですが……」

「ちなみに、これも前にもいったけど、リディア君に責められても止めない。これは、俺が決め、俺がやっていることだから……誰に責められても止めることは無い」

「……………」

「まあ、安心しなつて。一応お嬢様も、まあ可愛い部類に入る女の子ではあるし……そうそうひどい目にはあわさないつて」

不安がるリディアに、安心させるようにカシムは笑いかける。

「……本当、ですか？」

「本当本当……その証拠に、もう二度とこんな風に俺の身体の見張りなんか頼まないって……」

「……他の人に頼むのですか？」

「あうっ……信用無いな。大体、リディア君以外といたら、レフィ君はこういったことを頼み難いし、エリス君に至ってはやることかばれた時点で首が飛ぶよ」

苦笑して弁明するカシムに、リディアはとりあえず納得する。

その彼女の顔をまじまじと見て、カシムは付け加える。

「ただ……頼みはしないけど、これからちよくちよくリディア君の部屋に入れて欲しいな」

「え……？」

「大丈夫、今回みたいなのはしないから。ただ、夜こうやって二人つきりで楽しくお話をしたいだけ……だめかな？」

「え……え、と。それは……」

突然の申し出に、リディアは頬を染め、返事に戸惑う。

「昼間だったら、レフィ君とか、エリス君が一緒に、二人つきりでのとは程遠いだろ？ だから、夜中こうやって部屋を訪ねたいんだけど。だめ？」

「……その、お話……だけなら」

リディアの控えめな答えに、カシムは満足そうに微笑む。

？・反転

「お嬢様……お嬢様……」

聞きなれた呼びかけに、ローラの意識は覚醒する。

目を開けると、朝の光の中に見慣れたメイドの顔があった。

「ルビィ……？」

「どうなされたのですか？ うなされていましたよ？」

ルビィの言葉に、ローラははっと身体を見下ろす。

「……そんな!？」

視線の先には……何も無かった。

あれほど執拗になすりつけられた粘液も……噛み付かれたと思っ
たその跡も……

「どうされました？」

「ルビイ！」

咄嗟に、ルビイの両肩を掴み、迫る。

「昨夜……ううん、その前の晩も、怪物が……怪物が出たのよ！」

「怪物、ですか？」

必死になって、訴えるローラだが、ルビイは要領を得ないように
首を捻る。

「そうよっ！ 貴女も昨日見たでしょう、私の寝着にべったりと何
かがこびりついてたのを、あれをつけた怪物よ……それを、昨夜正
体を見たのよ！」

「はあ……それで、何だったんですか、それは？」

ローラは深呼吸をして、意識を失う寸前に見たあの光景を思い出
す。

「ルドラよ……ルドラの亡霊が私に襲い掛かってきたのよ！」

その叫びに、ルビイは目を丸くし……しばらくして肩を震わせ始
める。

「……な、何よ」

「クス、クスクス……だって、お嬢様、ルドラが亡霊だなんて……」
さもおかしそうに笑うルビイに、ローラの顔に血が上る。

「ほ、本当よ！ 本当なんだから！ 何よ、貴女、私の言うことを
信じられないとでもいうの!？」

己でそう言いながら、自分自身それが信じられなくなっていった。
昨日の朝は、しっかりと残っていた痕跡も、今朝は全く残ってい
ない。寝着に何の変化も無い……シーツにも何の痕跡も残っていな
い。

「本当に……本当なんだから、私が襲われて、そして……お守りで
……ッ！」

ローラは、自分があの護符を持っていないことに気づく。慌てて周囲を見渡すが、どこにも見当たらない。

シーツをまくり、中を調べようとして……気づく。

「ルビィ……このシーツ、いつものと違うわ……」

問いかけながら、改めて己の寝着を見下ろす。

「これも……私が昨日着たのと違う……」

「……………」

「どういうことよ、ルビィ……」

思い切りさめた声で、ルビィに語りかける。

この声で語りかければ、ルビィはいつも怯え、がたがたと奮えながら、言う事を聞いた。

だが、今のルビィは全く平然とローラを見返している。

「貴女がしたんでしょう！ こんなこと……どういつつもりよ！

あのお守りを取ったのも貴女なの！？ すぐに出しなさいよ！」

ローラの険悪な要求に、ルビィは無言で右手に握った護符を見せる。

それを見てローラは眼の色を変える。

「それよ！ 早く渡しなさい！」

唯一のルドラの亡霊に対する対抗手段である。ローラはすばやく立ち上がり、ルビィから護符を奪おうとするが……

護符を握った手の反対の左手にいつのまにか棒が握られており、それが踏み出したローラの左足の脛を打つ。

「あぐつ！？」

脛の急所を一撃され、激痛にローラはその場に転がる。

打たれた部分から、まるで足が粉々に砕けたかのような激痛が染みるようにローラの脳に伝わっていく。

「ああ……うう、……な、何するのよ？ 貴女、私にこんな……」

ローラの抗議も最後まで聞かず、ルビィはもう一度左腕を振り上げ、振り下ろす。

今度は右足の脛を……先ほどより強く打ち据える。

「あああああああつー!!」

激痛に、まるで海老のように床の上で仰け反り、転がる。

激しい痛みが過ぎ去った後は、全く動けなかった。

少しでも動こうとすれば、両足の脛が電撃が走るように鈍痛が生じ……ピクリとも動けない。立ち上がることはおろか、地面を這って動くことも。

「な……に……? 何で、こんな……?」

もはや誇りなどを気にする余地も無く、涙ながらにルビイを見上げる。

「お嬢様……この棒、わかりますか? ルドラを苛める時に、時々使っていたお仕置き棒ですよ……本当は、鞭を使いたかったんですけど、昨日いくら練習しても、お嬢様のように使えなくて……こちらを使うことにしたんです」

全くいつもと変わらない笑みを浮かべ、ルビイは淡々と説明する。「何で……私が、何をしたって言うのよ?」

哀れな涙声で、ローラが問い掛けると、堪りかねたようにルビイは笑う。

「ふふふ……お嬢様だったら、まだそんなことを……わかりました。きちんと説明しますね。まずは、場所を移動しないと……ここでは、光が強すぎます」

最後に意味のわからない呟きを口にして、ルビイは動けないローラの身体を軽々と抱き上げる。

「や……どこに連れてくのよ!」

「私の部屋です……クスクス、いいえ、これからはお嬢様の部屋になるのかしら?」

ルビイの部屋はそこにルドラがいることもあって、めったにローラが入ることは無かった。最初、この後宮にきた始めに見て以来、ろくな記憶が無い。

だが、現在のその部屋の状況が異常であることははっきりとわか

った。

暗闇……窓がすべて塞がれ、光を灯すものがすべて無くなっていく。

「何よ……これ？」

まるでその部屋だけ夜となっているかのような有様に、ローラは啞然とする。

「はい、お嬢様の場所はこちらです」

ルビイはそれを全く無視して、ローラを暗い部屋のさらに薄暗い隅に運ぶ。

そこにおかれていたシートの上に、ローラはゆっくりと降ろされた。

「うぶっ」

おろされた途端、そのシートから濃厚な犬の匂いが立ち昇る。

「こ、これ……ルドラの？」

「ええ、そうですよ」

ルビイはニツコリと肯定する。

「な、なに考えてるのよ！？私を、こんな……こんな、死んだ犬のシートに乗せるなんて………いたい何なのよ！？」

たまりかね、叫ぶローラに、ルビイはまたも笑う。

「何がおかしいのよ！？」

「クス、申し訳ありません、お嬢様。だって、お嬢様だったら、ルドラのこと、亡霊だとか、死んだ犬だとか………クスクス」

そのルビイの笑顔に、何か異様なものを感じ、ローラの身体は自然と震えだす。

「な、何よ。だって……あの犬、死んだじゃない」

さすがに、自分が殺したと、言っただけの良い状況ではないことぐらいはわかった。

それに、ルビイはさらに笑う。

「お嬢様、またそんなことを仰って。ルドラはちゃんと生きているのに………」

「え？ ……嘘。嘘よ、そんなの！？」

「クスクス、じゃあお見せしますね……」

そういつて、ルビイは部屋の扉を閉め、さらに暗くなった中でローラを振り返る。

横にある棚から、一つの大型のビンを取り出し、それをローラに見せる。

暗闇では……いや、暗闇でなくとも変わらないだろう。そのビンの中には、黒々として液体のようなものが詰まっていた。

ローラは嫌な予感を感じる。

「ほら、これがルドラです……今はこんなビンに入ってますけど、明かりを消して、蓋を開ければ……ほら」

蓋が開けられたビンの口から、黒い液体が生きているかのように動き、こぼれる。

こぼれた液体は、床の上に溜まり……うねりながら、徐々に形を整え。胴体を造り、後足を造り、前足を造り……そして頭部を造る。「ひ……なんで……なんでえ！？」

首を振り、目の前の光景を否定するローラの眼前で、黒い液体は一匹の濡れた黒毛の犬にその姿を変える。

「ほら、ちゃんと生きて、元気にしているでしょう」

「いやああっ！」

ローラは両足の痛みすら忘れたかのように、地面を這い逃げようとする。

だが、すぐに襟首をルビイに捕まえられ。

「あらあら、お嬢様ったら、逃げるなんて。あんなに可愛がっていたルドラじゃないですか……やっぱりこれがあるみたいですね」

そういつて、ルビイはローラの首に何かを取り付ける。

「……っ、これ！」

「はい、よく似合ってますよ。お嬢様」

それは犬の首輪だった。ルドラのプレートのついた飼い犬の証。

「い、嫌よ！ 外して、外して！」

「嫌なんですか？ どうして？」

心底不思議そうに、ルビイは尋ねる。

「どうしてって……こんなの……」

「だって、お嬢様がルドラにしていたことじゃないですか？」

「ッー！」

「なのに、お嬢様が嫌がるなんて、そんなのおかしいですよ」

「る、ルビイ……貴女……」

そこでようやく、ローラはルビイの意図を悟る。

ルビイは陶然とした笑みを浮かべ、愛しそうにローラを見つめる。

「知ってます？ ルドラは、お嬢様があんなことをしたから、もう噛み付きも、爪を立てることもできなくなっちゃったんですよ……だから、その代わりになる存在が必要なんです。だから、それに私が立候補しました」

少し誇らしげな言葉。

「そして、ルドラの望みは……お嬢様に恩返しをすること。今までお嬢様がなされたことを、そのまま、お嬢様に返すことです。でも、お嬢様の鞭や棒に変わる牙も爪も、もうルドラには無いですから、私が代わりにそれをするんです」

「……嘘、でしょ」

「嘘なんかじゃないですよ……だから、お嬢様にはこれからずっとこの部屋にいてもらいます……だって、この部屋じゃないと、ルドラはお嬢様に恩返しをしている様子を見れないんですもの。……大丈夫です。お嬢様が外に出られなくても問題ないようにしてくださいね。『あの方』が仰ってくれました。だから安心してくださいね」
ルビイは話は終わったとばかりに、左手に持った棒で、右掌を叩く。

その音に、ローラは身を竦ませ、怯えに震える。

「さあ、それでは始めますね。大丈夫です、護身術の先生から、相手を殺さないような打ち方をしっかりと教えてもらっていますから」
自慢げに、ルビイはそう言った。

数日後……

「……今日も来ないようですね」

金色の瞳を、少しジト目にしてカシムを見つめながら、リディアはポツリと呟く。

「そうですね。でも、来ないほうが良いですよ。もしこんな所をみられたら、それこそ大変ですから」

それにレフィが悪気なしに答える。

ちなみにリディアとレフィ、そしてカシムの三人がいるのは、件の中庭の会談の場。

そこに並べられたテーブルの一つで、またお茶会を開いていた。

最初のころはびくびくとしていたリディア達だが、この期に至っては安心しきって、リラックスしている。

と、言うより、周囲の険悪な視線が無くなったおかげといったほうが正解だろう。

別段、カシム達の存在が認められたわけではない……ただ、誰もがそれどころではないのである。

突如とした、リーダーの不在……一日、二日ならたいしたことは無いが、このように長期……しかも、その間に異分子が我が物顔で振舞っているとなると、動揺は深まるばかり。

「そうだねえ。ずいぶんと、身体の調子を崩しているみたいだねえ」
抜けぬけとそんなことをたまうカシムに、リディアの視線がさらに強くなる。

「本当に……そうなのでしょうか？」

疑惑の言葉。

「さあね。少なくとも俺はあれから何もしてないな……『俺は』」
カシムは、自身たっぷりに断言する。

少女はいつも泣いていた。

だが少女は幸せとなる。

友がいて、愛しい飼い犬がいて……

だから少女は幸せである。

これから、ずっと……

もう、友が死ぬことは無いのだから……

6話

六式『君主という名の犬』

？・夢の終り

昔の自分は夢を見ていた。

当時の自分は夢を信じて疑わなかった。

「私、この国で一番の学者になりたい」

だが、その事を初めて父に言った瞬間、その夢は無惨に打ち砕かれた。

「……馬鹿馬鹿しい。女が一番になどなれるものか！ 一番というのは男がなるものだ、そんなことも知らんで、学者になるなどと笑わせる」

父のその言葉により、希望の世界はあつという間に崩壊した。

？・変化

夢見の悪い目覚めにて、少女は目蓋をこじ開ける。

「……気分悪い」

久しぶりに見た忌まわしい過去の夢、最近は見ないと油断をしていた。

少女は、うつとうしげに目にかかった青い髪を払う。

「あらレムス様、もうお目覚めなんですね」

少し驚いたような別の少女の声。

幼い感じのメイド服の可愛らしい少女が、レムスの顔を覗き込んでいる。

「なに、リサ？ 私が早く起きてたら可笑しい？」

とりあえず最悪の気分を棚置きにレムスは少し冷たい声でリサと言う自分付きのメイドに問い掛ける。だがリサは、その冷たさが主の本質でないことを熟知していた。

リサは、メイドというにはやや打ち解けた感じで、笑いながら答える。

「ええ、だってレムス様は低血圧で、朝はいつも私に苦勞をかけて……」

「わかったから。早く着替えの準備をして」

小さく微笑しながら言葉を返し、ベッドから起き上がる。

「ハイ、レムスさま……ツツ!？」

立ち上がるレムスの姿を見つめていたリサの、その笑顔が一瞬で石化する。

そのメイドの様子に、レムスはきよとんとする

「リサ……? 何?」

「レ、レムス様……ですよ?」

メイドは呆然と主を指差し、尋ねる。

「? 私? 何?」

当たり前のことを尋ねられ、レムスはやや困惑してしまう。

「でも……だって……だって……」

リサは、そんな主の様子には反応せず、ただレムスの顔を指差していた指を徐々に志手に下ろしていく。

レムスの目がそれにつられて、下がっていく。

そして、レムスの視線に『それ』が接触した……

「え」と……」

レムスの聡明であるはずの脳が、その機能を全停止して、認識を拒否する。

何をどう判断したら良いのか。

レムスの視界には、己の股間が映っていた……もちろんそれだけなら問題は無い。だが、その部分の寝着の薄い布地はどう見ても内部より押し上げられているようにしか見えない。

股間の中央から、天をつくようにつきあがっている『それ』……布で内部は見えないものの、それがどういったものであるか。もちろんレムスは一目でわかった。

リサも、それが判ったから、混乱しているのだろう。

レムスは、恐る恐る寝着のスカートを捲り上げる……

レムスとリサの目に、同時に『それ』の正体が暴かれた……

「うーん……」

ばたつと、リサはその場に卒倒する。

「ええと……」

気絶したメイドを前にレムスはというと、全体の半分を下着から飛び出させ、本人の顔に向けて雄々しく自己主張している『男性器』の頭頂部とにらめっこをしながら、途方にくれていた。

レムス・ハバート、レムン国で有数の……というかはつきり言って一番の大商人の一人娘……レムスという国名と一字違いの名前は、成り上がって有頂天になった父の権威欲の現れ……十五になって、即座にレイド王子の後宮に放り込まれたのは、父の出世欲だけではなく、学者になるために上級教育機関に進みたいというレムスの希望を断念させるため……それから、一年、王子の側室として、何度も寝室に呼ばれ伽をさせられた……つまり、その時は確かに己は女性だった。かなり湾曲的に状況分析を進め、そこまで結論付ける。

そして、その結果……理解できたのは。

気を失うという現実逃避法は、他人に先を越されると極端にやり難くなる……というものだった。とりあえずレムスは、気絶したりサの介抱を始める。

『男性器』が鉄のように硬直したままだと、とてつもなく動きづらかった。

「ど、ど、ど、ど、どうでしょう!!?」

動揺のあまり、舌がまともに機能しないのか、どもりながらリサは喚きたてる。

そんな見事なほど慌てまくるリサを眺めながら、レムスは冷静になつていく己を自覚していた。自分が驚く分、目の前のメイドが驚いてくれているのもあるが、自分自身この事態にほとんど拒絶反応

を持つてはいない。

レムス本人が首を捻るほど、すんなりと受け入れられている。

「な、何かのご病気なんでしょうか……医者を……ううん、だめです。このようなことを誰かに知られたら……」

（問題があるとすれば、確かにそれね）

リサの危惧にレムスも心の中で同調する。

男のモノが生えたなど知られれば、当然この後宮に居られるわけは無く、即座に追い出されるだろう。だが、レムスにとってそのことはどうでも良い事である。

（まあ、父さんは別だけど……）

娘を王妃にするという野望が潰えた父の落胆の顔が目には浮かぶ。

そのようなことすら、レムスにはどうでも良いことなのであるが、正直、レムスは王妃の座になど……ましてや、レイド王子に対して何の想いも抱いてはいなかった。

ただ、夢への……学者への道を断られたことによる虚無感……レムスにとって、己の貞操すらどうでも良く感じられていた。この後宮にきた当初は。

言われるままに後宮に入り、レイドと寝室へ赴き、なすがままに純潔を散らさせた。

どうでも良いことだった。そのときまでは……

そこまで考えて、レムスの頬にわずかに朱がさす。

「……エリス様……」

普段は兜に隠れ。わずか数回の機会で目に焼き付けていた女騎士の凛々しい素顔を思い浮かべ、レムスはその名を呟く。

「そうです！ エリシエル様にご相談しましょう！ あの方なら、きっと何とかしてくれます」

ポツリと洩らしたレムスの呟きに、リサは天啓を得たかのように提案をする。

それに慌てたのはレムスである。

このことを他の誰にばれて、後宮を追い払われることとなっても

それはどうでも良い。だが、だがエリスにこのことを知られることなど……考えるだけで心が凍る。

「だめっ！ 絶対にだめ！」

それまでとは打って変わって、必死の形相で今にも駆け出していきそうなメイドを制止する。

「あの人に知らせるのだけはだめ！ そんなことしたら、許さない！」

「わ、わかりました……」

主がエリスに対して並々ならぬ憧れを抱いていることを思い出したりサは、その剣幕に慌てて何度も頷いてみせる。

「でも……どうしましょう。それ……」

改めて問われ、レムスはようやく事の重大さを感じ入った。

とりあえず、できるだけ樂觀的に考えてみる。

「……とりあえず、隠してれば大丈夫……スカートの上からだとは多分ばれない、はず……」

主のその言葉に、だがメイドは否定的なため息を洩らす。

「あの……気づいてないのですか？」

「何を？」

「その……また、大きくなってます……」

恥じらいながら、『それ』から目をそらし、リサは指差す。

「ツツ！？」

レムスが慌ててそこに目を落とすと、先ほど治まったはずなのに、またもや『それ』は膨張している。

「……エリシエル様のお名前が出た途端にそうになりました」「あうっ」

レムスの顔が今度こそ真っ赤に染まる。

憧れの人とはいえ、名前だけでこうも反応してしまうとなると、とてもではないが隠しとおせるものではない。

後宮に居れば、嫌でもエリスと顔を合わせるのだ。そうだったとき、『それ』がどんな反応をしてしまうのやら、考えるだけで頭が

痛い。

「それと……明後日ですよ？」

さらに続くリサの言葉が、レムスの頭痛に止めを刺す。

「明後日、レイド殿下の伽をするようにと連絡がありましたのに……」

「……………」

レムスは、激痛にうめきながら、ベッドに倒れ……とりあえず寝た。

？・究明

が、そのまま寝ていても、状況は悪くなるばかりであることは確かだったので、レムスはしょうがなく起き上がり、腕を組んで考え込む。

(……まず常識から行くと、何の脈絡もなしに、女性の陰核が男性の陽根になったりはしない……)

とりあえず調べてみると、元の女性器はそのまま健在であり、ただ陰核のあった場所に男性器が生えている……というより男性器に変化しているのである。

(そうなれば、ごく最近、私の身にそれを誘発するような『何か』が起こったということ……最近……私は昨日は?)

そこまで考えて、レムスは自分に昨晚……どこか昨日の記憶が全く無いことに気づく。

「リサ……私、昨日は何をしてた？」

「昨日ですか？ 昨日は、朝、私がレムス様を起こして、朝食を取られてからお部屋を後にして……帰りが遅いと思ってましたら、私が気づいた頃にはもう部屋の中で明かりを消してお休みになられていました」

「？ ……それはいつ頃？」

「もう外は真っ暗で……ご夕食にも姿を見せないなので、私が探しに行こうかと思っていたら、いつのまにか部屋にお戻りになられてい

ました。起こそうかと思っただのですが、何かお疲れのようで、それはもうぐっすりとお休みでしたから……」

そういえば……レムスが腹を抑えると、途端に空腹感が襲ってくる。

その後、わずかな情報をまとめ、結論としては、レムスに何かが異変が襲ったというのなら、それは昨日のことだろうということである。

何しろ、昨日一日の記憶がぼっかりと抜け落ちてたりする。

リサに、メイド仲間から昨日のレムスの行動について情報を集めてもらうよう頼み、自分も心当たりを当たってみることにする。

「……レムス様の昨日のことですか？」

ローラの取り巻きである貴族の令嬢の一人はその風変わりな質問に首を捻る。

「ええと……すみません。昨日は、レムス様は一度もお見かけしておりませんから……」

すまなさそうに謝罪し、そして不安そうにレムスの顔を見つめてくる。

「レムス様……これから私たちはどうすればいいのでしょうか？」

今日も、ローラ様はお顔をお見せにならないのです」

さすがのように言われても、レムスはどうすることもできないし、するつもりも無かった。

ローラに対して、この令嬢のように忠義立てなどしているわけでもない。ただ、身の安全をはかるといふエリスの提案に従っただけの話である。

とりあえず、無難な返事をしてから、その場を立ち去ることにする。

最後に目に入った泣きそうなほど不安げな令嬢の表情を思い出し、もう少し優しい言葉でもかけてやればよかった……などと考えている。

「レムス」

その凜とした声にまるで電撃でも食らったかのように、身体中がビクツと竦む。

この後宮に着てより、一時も忘れたことの無い声。

「エ、エリス様！」

「レムス、ちょうど良かった、今から探そうと思っていたところだった」

鉄兜の奥から放たれる声の起伏に伴い、レムスの心臓は早鐘のように鳴り響く。

顔に血が上り、いつもの冷静な賢者の顔が一人の少女の顔に移り変わる。

「は、はい！ 何の御用でしょう！」

上ずった声で答えると、エリスはかすかに首を捻る。

「何……とは？ 昨日、私が頼んだことだが？」

「え？」

一瞬驚き、そして即刻上った血が音を立てて引いていく。

自分の昨日の事を一切覚えていない。そしてエリスから、昨日何か頼み事をされていた……それらを総合するとすなわち、よりにもよって自分はエリスの頼み事を忘れてしまっているという事実。

「あ、あの、すみません！」

「？ 何があった？」

エリスの前ではいつも若干の高揚を見せるレムスだが、今回はあまりに度が過ぎてている。そんなレムスの様子に、エリスは異常事態を察知した。

「……その、私は……昨日の事が全く思い出せない。だから、エリス様に頼まれた事も、覚えて無くて……すみません」

何度も頭を下げるレムスを見つめ、エリスは深々とため息をつく。

「いや、謝る必要は無い。それはおそらく、私の責任だ」

レムスは意外そうに下げた頭を上げる。

「お前にあのようなことを頼んでしまったことを、私はあれから後

悔していた。奴が、お前どのようなことをしでかすかも考えずに、軽率だった。こちらのほうが謝るべきだな」

「え、そ、そんな……頭を上げて下さい、エリス様」

唐突に謝罪をされてしまい、泡を食うレムス。

ただ放しているだけで胸が苦しくなってしまうというのに、このようなことをされてはそれこそ寿命が縮む。

そこでレムスは、話をそらすことにする。

「あの……その頼み事とは……すみません、まだ思い出せないんです……もう一度聞いても良いですか？」

「ああ……昨日の朝方に奴の、カシムの大鍋の件で……」

「エリス！」

エリスの言葉を、硬質な冷たい声が遮る。

エリスとレムスは同時に、その声の主の名に思い至る。

「セシル？」

案の定、振り返るとそこには、声と同じく生真面目そうで少し冷めた感じの美少女がこちらに近づいてきている。武家の生まれの令嬢のセシルである。

「エリス、すまないが私はレムスに急用がある。借りていくぞ」

呼びかけられたエリスの問いかけを無視して、セシルという銀髪の美少女は強引に二人の間に割って入り、レムスの手首を掴むと強引に引きずって行く。

ドレスの包む、細い肢体を裏切る力強さに、レムスの小柄な身体はあっさりと連行されていく。

「え？　ちょ、ちょっと！　セシル様！　私は、エリス様とまだお話が……」

「私の用を優先しろ」

レムスの抗議に、セシルはそっけない言葉を返すだけ。

あっという間に、二人は呆然とするエリスの視界から消えてしまった。

?・親友?

エリスと話していた場所から、角を二つほど曲がり、そこにある階段の影となる部分に、レムスは強引に連れ込まれた。

「セシル様…… いったい、何……?」

さすがに不安になったレムスの問いかけに、セシルはその秀麗な美貌を無然とさせ、問い返す。

「それはこちらの科白だ…… 『それ』は何の冗談だ?」

「え?」

唐突な質問に、きよとんと……だが、漠然とした不安にレムスは自然と己が股間に目を下ろす。

「あつ!」

目にした途端、思わず悲鳴をあげてしまう。

レムスの『それ』はいつのまにか大きく……自室での膨張よりさらに長大に膨らんでドレスのスカートを思い切り突き上げていた。

「エリスは気づいていないようだったが、話を続けていたらいずれ気づいていただろう」

全く自覚は無かった。

エリスと話をするときは、いつも興奮してしまい。自分の状況にすら頭が回らなくなってしまう。だがまさか、目の前で勃起させておきながら、本人が気づかないとは……

「あ……」

もしエリスに見つかっていたら、とそれを考えるだけで背筋が凍る。

「セシル様、ありがとうございます」

心からセシルに礼を述べる。

だが、セシルは相変わらずむっつりとした顔で、

「礼などより、状況を説明しないか。『それ』はいったい何なのだ?」

「うっ……」

この事態に対する、あまりに真つ当な質問にレムスは困る。

なんと答えれば良いのか……下手なことはいえない。このセシルという少女は、エリス以上に冗談の通じない性質であるし、レムスにこの状況を冗談に紛らわせるだけのセンスも無い。

「……殿下のお戯れか？」

悩むレムスに、セシルが仮定を突き付ける。

「レイド殿下にそのようなものをつけさせられているのか？ ……
だとしたら、私が抗議をしてこよう。早々にそれを外せ」

「え？ その、ちが……あっ」

一人納得していくセシルに、レムスは慌てて訂正しようとしたが時遅く。セシルの手が、レイドが時々使う玩具の類だと勘違いした『それ』を抜き取るうと、レムスのスカートの中に入れられる。
そしてセシルの動きが止まる。

「……………」

「……………」

居心地の悪い沈黙……セシルの細い指の中で、『それ』はさらに堅くなっていく。

「あの……だから……」

沈黙を破り説明しようとした、レムスの喉に一瞬にしてナイフが突きつけられる。

「ひゃっ！！」

「……偽者か？」

突き刺すような視線が、レムスの心臓を鷲掴みにする。

「私の知るレムスは女性だった。このようなものは生えてはいない

……貴様は何者だ？」

「あ、あ、あ、あう……レムスです。本物です！」

沈黙は死を招くと判断したレムスは、恐怖に縮む声帯を震わせ必死に弁解する。

「では、なぜこのようなものがついている？」

「あ、朝起きたらこうなって……そして昨日の記憶もなくなって……だから、原因を探して……」

喉に食い込む冷たい刃の感触に、心臓を中心にレムスの身体が徐々に冷え切っていく。先刻まで、あれほど雄々しかった『それ』も萎縮し、縮こまっているのを自覚する。

真つ青になったレムスの表情をセシルはじつくりと眺める。

「……………そうか」

冷たいナイフの刃が首から離される。

「どうやら、貴様がレムス本人だということは間違いないようだ……それさえ判れば、まずは問題ない」

開放され、安堵の息をつくレムスは冷めた汗をびっしょりとかいてしまっていた。

「うっ……………」

「これくらいで泣くな。……………それで、原因に心当たりはあるのか？」
恐怖と、そして安堵に涙するレムスに無茶な事を言いつつ、質問してくる。

「それが……………」

そこで、レムスも思い出す。自分が、エリスの頼み事をされていたことを。

その事をセシルに話してみる。

「エリスに？ 何を頼まれた？」

「それを聞いていたときに、セシル様に連れ出されてしまった……でも……………最後に、カシムという名前を聞きました」

「……………奴か」

セシルは思い切り渋面になる。

ほんの数日前、セシルはそのカシムという新参者に思い切りあしらわれ、最後にはナイフまで出して大事になるところだったのである。

その事を自然と思い出し、レムスはふと関係の無い疑問が持ち上がる。

「あの……………確か、セシル様のナイフはあの時、エリス様に没収されたものでは？ 返してもらえたのですか？」

「うん？ あれが返すわけが無いだろう。これは別のナイフだ」

「……………」

レムスはいじつ目でセシルを見てしまう。

そのレムスの様子に、セシルは少しすねた表情になる。若干、年相応の少女の顔が垣間見える。

「そんな目をしないでくれ、騎士団にいたせいで寸鉄の一つでも持つていないと落ち着かないようになってしまったんだ。別に、これで何かをしようというわけではない」

「……………この前といい、今といい、十二分に活用しているように見えますけど」

「む……………大体不公平なのだ。なぜ、同期のエリスが武装を許され、私だけこんな動きにくいドレスを着せられ、さらには武器を携帯禁止にされるんだ？」

それは、エリスがこの後宮の警備であり、そしてセシルが王子の側室であるから。

万が一、セシルが王子を傷つけないようにするため……………という答えを、レムスは飲み込んだ。そんなこと、セシル本人が十分に理解しているだろう。

自分と同じく、己の意思を無視して後宮に入れられた彼女が……………レムスは学者、セシルは騎士……………目指すものこそ違い、夢への道を親に無理やり途絶えさせられた。そのこともあって、二人は互いに自然と打ち解けるようになった。

……………まあ、レムスの方は、セシルがかつて騎士見習いの際にエリスと同期であり、競い合っていた仲であるということを目にしたことも一因であるが。

「……………カシム、か。奴に何かされたのか？」

ようやく冷静に戻ったセシルの問いに、レムスは首を振る。覚えていないのである。

「ふむ……………奴について、何を頼まれたのか。エリスにもう一度聞く

という手もあるのだろうか……それではな

「はい？」

「私がエリスの名前を出した途端、また大きくなってる」

「~~~~~っ!」

今度は確認するまでも無く、レムスは即座に真っ赤になった。

セシルは感心したように。

「名前だけでそうなるのか……なんと言うか、すごいな」

「うっ~~~~っ」

その部分を手で強引に抑え、真っ赤になって恥らう。

「……まあ、あいつは昔から女に人気があるからな。私には全く理解できない領分だが。貴様だけ極端に変だというわけではないだろう。私の知るだけでも、二十人ほどはあいつに懸想していた」

慰めになるようで、ならないセシルの言葉。その二十人の中に、今のレムスのように名前を聞くだけで股間を膨らませるものも一人もいないだろう。当たり前だが。

レムスがエリスに対して特別な感情を抱いていることは、メイドのリサと、セシルしか知らない。というか、その二人に即座にばれた。

「そんな状態のままでは、エリスとの会話は危険すぎるな。『それをあいつにだけは悟られたくは無いのだろう?』」

「……はい」

確かに、レムスはこのことをエリスにだけは知られなかつた。なぜというわけでもない、おそらく知られてもエリスは軽蔑も嫌悪もしないだろう。

だが、嫌だった。何というか、それがとてつもないことを引き起こすようで……

「では、事の原因。まずはあのカシムを探すしかないな。どうせ今日も暇なのだから、私も手伝おう」

ローラが閉じこもっている間、レムスも、セシルも何もすることは無かった。

?・期待

「レフィリア……レフィリア・ソウラね」

知り合いの令嬢の一人に、確認するようにレムスは尋ねる。

「はい、それがあの女のメイドの名前です」

「外見の特徴はわかるか?」

セシルに詰問調で尋ねられ、その少女は少し怯える。

「は、はい……私も注意して観察したわけではないですけど、多分すぐわかると思います」

「というと?」

「私たちのために用意されたテーブルに腰掛けてるメイドなんて、あの子だけだから」

少し憤慨を込めて答える。

「うん? どういうことだ?」

愛想や嫌味が錯綜するお茶会などに興味の無いセシルとレムスは初めて聞く話に首を捻る。

「あの女が、自分のメイドをこれ見よがしに席につかせて、お茶会を開いているんですよ。ほぼ毎日……:よりによってメイドなんか、私たちのテラスで我が物顔をさせるなんて……:腹が立つつたら」

少女の憤慨は、二人には理解外であるが、それがかなり風変わりな行動であることは理解できた。

「ローラ様さえいらっしやれば、あんなことさせないのに……:エリス様、ローラ様は一体どうなさってしまったのでしょうか?」

先ほど別少女にされた質問を待たされ、レムスはうんざりしてしまう。

その少女から離れると、その事をセシルにぼやいてみる。

「……:どうして、みんな私に同じ事を尋ねるのかしら。私には何もできないのに」

「……:なんだ。わかっていなかったのか?」

「何が?」

心当たりの無いレムスに、セシルはこともなげに言い放つ。

「このまま、ローラ嬢が姿を見せなければ、自然と次のリーダーが貴様になるからだ」

「……え？」

意味を理解するまで数秒を要した。

「私が……どうして？」

「この後宮内の側室の中で、ローラ嬢の家柄に次ぐものといえば、ハバート家の貴様だ。だから皆、ローラ嬢の代わりに貴様に頼るのだ」

「そんな……私の家はただの商家……」

「中小貴族どころか、大貴族にまで金を貸している、な。一人娘を強引に後宮に入れるなどという芸当も、それがあつたためだ」

「そんなの……だからってリーダーなんて……私よりセシル様の方が……」

「私は、ただの一武官の娘だ。家柄で言えば下の部類に入る」

そこでセシルはため息をつき、皮肉げに微笑む。

「まだ理解できていなかったのか？ ここで重要なのは、剣でも知識でもない、家柄というブランドと、生まれ持った美貌のみだ。それだけが優劣の基準となる。それだけが」

？・魔法の知己

レフィリアというメイドは、案外すぐ見つかった。

知り合いのメイドに尋ねてみたら、皆快く教えてくれたのである。

どうやら、仲間内ではかなり人望があるらしい。

「貴女がレフィリア？」

「え？ はい、なんでしょ……て、ああああっ！」

呼ばれ、振り返った途端、レフィリアはセシルを指差して絶叫を上げる。

「なんだ？」

「貴女は！ 数日前、カシム様を殺そうとしたセシル様！」

「あつ」

そのときになって、ようやくレムスもその事を思い出す。

セシルが、喧嘩の末刃物まで出しカシムに襲い掛かったことは、この後宮でもかなり話題になった。その彼女を連れ、カシム付きのメイドに会えば、こうなってしまうのはある意味当然である。

案の定、レフィリアは警戒して、二人から距離を取る。

「……な、何なんですか？ また、カシム様を苛めるんですか？」

思い切り怯えられながら、そんなことを言われては話もし難い。

「……私が、奴を苛めたことなどまったくない」

セシルは無然と事実を述べる。正確に言えば、苛める以前に、悪戯をされてしまったのである。スカート捲りなど、生まれて初めてされてしまった。

「本当ですか？」

「本当だ！ 奴が何もしなければ、私は何もしない！」

「……あ、カシム様の方が先に何かをしたんですか？」

その一言で、レフィリアは納得する。

わずか数日とはいえ、カシムとじかに接して、彼女の性質はよく理解できている。

あのカシムが、セシルという美少女を前にして何もしないはずが無い。

わずかに警戒が和らいだのを見計らい、レムスが肝心な質問をする。

「その貴女の主人に聞きたいことがあるのだけど……あの人は今どこに？」

その問いに、レフィリアはじつとレムスの顔を見つめる。

「ええと……その青い髪はレムス様ですよね？」

「え？ そうですけど？」

異国人の母譲りの青髪である。美少女ばかりを集めたこの後宮内でもかなり目立つ。

「その……カシム様は、朝方、レムス様の所に行くと言って、出て

行かれたきりです」

「は？ 私？」

「はい、レムス様に用があると、はっきりと仰られていました」
レフィリアの答えに、レムスは困惑してしまう。

ほんの一二回だけ、顔を合わせたのみのはずのカシムが、一体私に何のようなのだろうか、と。

「やはり……奴と昨日何かあったのではないのか？」

だんだんと、その可能性が濃厚になっていく。

嫌な予感を覚えながら、最後に眼前のメイドに尋ねる。

「あの……今カシムがいる場所を、知ってる人がいるとしたら、誰？」

それにレフィリアは、考えること無く即答する。

「それは、エリシエル様かりディア様です。私以外で会うとしたら、この二人以外いませんから」

当然、エリスという選択肢は即座に却下した。

となると、残るはリディアということになり。二人は陰鬱な気分を抑えきれない。

何しろ、二人が所属しているローラのグループは、それこそ毎日のようにリディアに嫌がらせをしていたのである。どのような顔で尋ねるといふのか。

だがこのようなときに限って、会いたくない探し人に会ってしまうものである。

あっさりとして、二人の目は黒髪に褐色の肌という異色の美少女を発見した。

「……あっ」

こちらに気づき、リディアは少し驚きの表情を見せた。

「あゝ、その……」

なんと声をかけたら良いのか、口籠もるレムス。セシルも同様に、だが、そんな二人の様子が可笑しいかのように、リディアはくす

りと小さく笑う。

「カシム様ですか？」

「……えっ！」

意外なリディアの反応と言葉に、レムスは思わず大声をあげてしまふ。

「あら？ 違いましたか？」

そんなレムスの反応に不思議そうにリディアは首を捻る。

それに慌ててレムスは首を左右に振りたてる。

「いいえ、でも、どうして？」

「それは……」

そこでリディアはクスクスと楽しげに笑みを洩らす。

「先ほど、エリシエル様がレムス様のこと、あの方を探しに来ていたのですもの」

「エリス様が！」

「ほう」

リディアの言葉に、二人はそれぞれ驚きを表現する。

「ええ、先刻ここで、私はカシム様とお会いして、少しお話をしていたのですが……そこにエリシエル様はすごい剣幕で、レムス様に何をされたのか、カシム様を問い詰められて」

微笑みながら、軽やかに傍の壁を指差す。そこには、まるで刀傷のような切り傷がつけられていた。

「はぐらかすカシム様に、エリシエル様が剣を抜いて切りかかってしまい……二人ともあちらのほうに向かって追いかっこを始めてしまいました」

セシルは壁に刻まれた傷をじっくりと眺める。

おおよそ、手加減の感じられない切り傷……

(エリス……苦勞しているようだ)

「それでレムス様たちも、何かお探し中のようにでしたから、カシム様に御用かと思ったのですが？」

確認するようにリディアは問い掛ける。

そこで、エリスが自分を心配して、カシムの元を訪れたということにうつとりと統帥していたレムスが、本来の目的を思い出す。

「……ええ、あの人に少し聞きたいことが……それで二人はどこに？」

「ですから、あちらの方角に」

リディアは大真面目に通路の反対側を指差す。

「……二人が走っていつてしまつて、私、少し考え事をしてましたから……あちらに行つて、どこに向かつたのかまでは……ごめんなさい」

「考え事？」

「はい、エリシエル様が来られる寸前に、カシム様からの質問のことで……結局、何のことかすらわからなかつたのですが……中庭の大鍋のことで」

何の事が、レムスもわからないでいると、セシルが教えてくれる。「昨日の事だが、中庭の林の中で奇妙な大鍋が鎮座させられているのが、少し騒ぎになっていたのだ。おそらくそのことだろう……何が入っていたのか、すさまじい悪臭を放っていたそうだ」

それで納得する。昨日の記憶が無いので、覚えていなくて当然である。

要するに、昨日そういうことがあつたということだろう。

「そういえば、あの件にはあの女がかかわっているという話も、耳にしたな」

セシルが何気なしに呟き、それにリディアが頷く。

「ええ、カシム様はあの鍋で、庭に生えている草花を煮て、何かいろいろと不思議なことを行つていたので、そのことについて質問したので……そうしたら、質問を質問で返されてしまい……」

失つてしまった記憶について考えていたレムスだが、その言葉に好奇心をくすぐられる。

「どんな風に？」

その問いに対するリディアの答えはこうであつた。

リディアが『あの大鍋で何を作っていたのですか？』と尋ねると……それに対して、カシムは『ふむ、ちょっと支配者を造ってみようかと思っただが……どれができるかわからないんだよな』と答え、リディアが困惑しているとさらに『名君と暴君、もしくは愚鈍な傀儡……君はどれができると思う？』と質問されて、さらにわけがわからなくなってしまい、その場で考え込んでしまったという。そしてエリスの乱入で、話は中断され、答えも聞いていないという。

「そっいえば……」

そこでふと思い出したようにリディアはレムスの顔……という髪を見つめる。

「昨日……大鍋のある方に歩いていくレムス様をお見かけしたように記憶しているのですが……覚えていらっしやらないのですか？」

「それ、本当!？」

「は、はい……かすかにですが、そちらに向かう青い髪の人を見かけたので……レムス様かと……」

この後宮において、青髪はレムス一人だけである。

「どうやら決定的だな……」

セシルは確信を持ってそう呟く。

レムスの失われた記憶と、そして身体の異変はまずカシムに関わりがある。

そこまでわかれば、後はカシムを見つければ……リディアの指示した方角へと歩を進めようとすると、そこをそのリディアが呼び止める。

「あの……今度はこちらから質問してもよろしいでしょうか？」

二人同時に足を止める。

「……カシム様をどうして探してるのですか？」

まあ、まず真つ当な質問である。どうしてそれを最初に聞かなかったのかというほうが疑問に思うほど。

レムスが答えるより早く、リディアの方が確信を込めて尋ねる。

「あの方に……『何か』をされたのでしょうか」

「ッ！」

「……何か知っているのか？」

レムスが息を呑み、セシルが剣呑な視線で問い掛ける。

リディアは落ち着いた表情で頷く。

「……あの方が何かをしたというのなら、それはおそらく私の所為です」

ゆっくりと吐露するように、言葉を紡ぐ。

「二日前、私が一週間後……今日から五日後に殿下の夜伽に指名されたことを言った次の日、カシム様があの大鍋で『何か』を始めたのです……だから、おそらくあの方がこれからすることは、私の所為であると思っていました」

「……？ どうして、それが貴女の所為だと？」

「だって、私はわかってましたから……」

リディアは儂げに微笑み、じっとレムスを見つめる。

「夜伽のことをあの方の耳に入れれば、あの方はきっと『何か』を始める……それが何か判らないけれども……私はこれまでの『通常』より、変化を与えてくれる『何か』が欲しかったから……だから、わかっていながらあの方に言ってしまった。だから」

レムスに向かって、リディアは頭を下げる。

「『何か』に被害を被った方々に、言わなければならぬ事があります。責任の半分以上が私にあることを……貴女方は知っておいてください」

？・探し物は

どうにも釈然としない気分で、レムスは通路を進む。

リディアの教えてくれた方角は、期せずしてレムスの自室のある方角であったので、当たり前のように、一旦は自室への帰路につくことになっていた。

「何をしでかすのかわからない……なのに、何でそんなのに頼るの

かしら？」

先ほどから考えていたことを、何気に隣を歩くセシルに聞いてみる。

「決まっている。それ以外に選択肢が無かったからだろう」

レムスには難解な問題であったが、セシルはあっさりと考えるところと無く答える。

「そうなの？ でも何が起こるか分からない選択肢より、それまでの繰り返しの方を選ぶのが普通じゃない？」

「アトム国の姫にとって、その選択でどのようになっても、現状よりさらに悪くなることが無いと、判断したのだろう。たとえば、どんな結果になろうとも……いや、それとも、あの女なら悪いようにはしないと、信頼しているのかも知れない」

答えながら、セシルは前方を確認する。

「……確か、このまま行けば、レムスの部屋があるのだったな？」

「そうですね？」

「ふむ……どうやら少なくともエリスはこの方角に向かっているようだ」

セシルは前方、というより足元に敷かれる絨毯を見ながらそう指摘する。

「うん？ ……あつ」

レムスがつられて絨毯に目をやると、そこにはくつきりと軍靴らしき足跡が刻まれていた。

「全身鎧は重いからな……あいつが走るとどうしてもこうなる。隠密行動には向かないな」

足跡は、結局レムスの自室まで続き、そこを通り過ぎてしまっていた。

だが、レムスの部屋からは人の気配が……

自室の扉を開けた途端、レムスの脳は真っ白になる。

「……………」

部屋の中に人の気配があるということ、それはリサだろうと、あっさり断定した。それは間違いなかった。部屋の中には確かにリサがいた。

だが、リサだけではなく……しかも、その者がリサを抱きしめ、キスをしている光景など……予想をはるかに越えていた。

意外すぎて、思考能力を停止させたレムスの隣で、セシルが的確な判断と行動を示す。

ドレスより、ナイフを取り出し、その者に向かって投げる。

「おっと」

気の抜けた声と同時に、あっさりとそのナイフを避ける闖入者。

「こらこら、セシル君てば、危ないじゃないか。俺はともかく、リサ君が怪我をしちゃったらどうするの？」

「え？ セシル様……？」

カシムが回避したことにより、唇を開放されたりサが朦朧とした表情でこちらを向く。

「きゃあッ……レムス様！」

そこに己の主の顔を見つけ、リサは慌てて相手から離れる。

「リサ……どうということなの？」

呆然としたレムスの問いかけに、リサはしどろもどろに弁解する。

「あ、あの……レムス様の『それ』のことで、誰に相談したらいいのかわからなくて……だから……そうしたら、すごい勢いで通路を走るこの方が目に入って……」

「……どうして、そこで相談の相手をそいつにする？」

セシルが冷静な声で、突っ込む。その目は刺すように、飄々とした表情のままのカシムに向けられている。

「ああ、それはね。ここ最近、俺が本業を再開してね。その話を聞いて、リサ君は俺に頼ろうと思いついたわけ、悪気は無かったと思っよ」

「本業？」

「占い。メイドの女の子やらを相手にちょっと、ね。結構評判良い

んだよ」

カシムの言葉に、リサが頷く。

「ハイ……その話を他のメイドの子から聞いていたから……ひよつとしたら、何かわかるかもって思ってた……」

「エリス君から、俺をこの部屋にかくまってくれたわけ。いや、助かった」

「それがどうして、キスすることになるの？」

少し苛立った声で、レムスが問い詰める。

リサは顔を真っ赤にして泣きそうな顔で、俯いてしまう。

「ははは、それがねえ」

緊迫した雰囲気など、鼻から無視して、カシムが説明を始める。

「リサ君ってば、占いを頼んできたってのに、何を占ったらいいのかを指示してくれなかったんだよね。どうしても言えない、の一点張りで」

彼女の立場からすれば、それが当然だろう。

リサにしてみれば、評判の占い師なら、その事を話さなくても解決策を導き出せると思っていたのかもしれない。

「で、何度も同じ事の繰り返しで、俺もちょっと飽きてね。まあ……言えないんなら、ちょっと強引に口をこじ開けようか、と」

無理やりキスをした。そしてそこにレムス達が入ってきた、というわけらしい。

話を聞き終わるやいなや、セシルの手から再びナイフが放たれる。

二本。

「おっ、とっ」

眉間と喉に迫るナイフを上半身の動きで何とか躲すカシム。

「……前も思ってたけど。それってどこに何本仕舞ってるわけ？」

それは、レムスも同様に疑問だった。

「無駄な話はない。まず、リサから離れる」

「はいはい、セシル君ってば相変わらずそっけないねえ」

セシルの威圧的な言葉に、毛ほども動揺を見せずカシムはリサか

ら距離を取る。

「さて、で？ セシル君は、俺をどうするつもりかな？ この前のローラお嬢様の命令でそうしたように、また俺を殺すつもり？」

「……まず、質問に答えてもらう。その後のことは、それから判断する」

そういつて、セシルは視線をレムスに向け、促すように頷いてみせる。

「……………」

聞くべきことはたくさんあるのだが、声が出ない。レムスは黙りこくつて、俯いてしまう。だが、カシムはそんなレムスに親しげに「やあ、レムス君。昨日は楽しかったね。例のお願い事は順調かな？」

「はい？」

問い返すレムスに、カシムは眉をしかめる。

「あらら？ まあ、無理にとは言わなかったけど、とりあえず急いでつて頼んでたのに……あと五日だから、まあまだ余裕があるか？」

「え？ え？ ……一体、何の事を？」

レムスには全くわけがわからない。だが、カシムはレムスがそれを知っているという前提で話を進めている。

そのことから推察するに、自分は昨日、このカシムという女性と何か約束のようなものをした……そして、そのことでレムスに何かする義務が生じている。ということだろうか。

悩むレムスに、カシムもようやく会話の不成立に気づく。

「おやあ？ レムス君、ひょっとして君ってば、昨日のこと覚えてないとか言わないよね？」

「あ……その……すみません」

何かなんだかわからないが、約束を忘れているという事実、レムスは謝罪してしまう。

それに、カシムはまともに目を見開き、啞然とする。

「……………マジ？」

「……朝起きてから、昨日のことがどうしても思い出せなくないです……」

「ガーン！」

シヨックを受け、それを体全体で表現するカシム。

「だから、昨日のことを尋ねようと、今まで貴女のことを探して……」

「レムス君！」

説明を続けるレムスに、カシムが真剣な表情で迫る。

「記憶が無くなったって事は……ひよっとして、ひよっとすると『薬』の効果も無くなったんじゃない？」

「『薬』？」

レムスの疑問の声に、カシムは勝手に判断し、うめく。

「……せつかくチンピラ王子なんか比べ物にならないほど、立派な物が生えたというのに、たったの一晩で無くなったなんて……なんてもつたいない」

握り拳をつくり、大いに悔やむ。

「……立派なつて……え〜と……」

「昨日はそれで、俺を押し倒して獣のように何度も何度も……それを忘れるなんて……う、う、酷い……」

カシムは、目を指で抑えながら、嗚咽を洩らす。ちよつと、いやかなりわざとらしい。

「……押し倒す……獣……何度もつて……ええええええつっ！！」
意味のつかめない単語だった。だが、繰り返すように呟くと、なぜかレムスの手に柔らかく暖かな感触が蘇り、目の前のカシムの姿に、衣服が乱れ艶やかな顔つきの彼女の幻想が重なる。異物である男の象徴が途端に反応し勃起するのを感知し、レムスの意識は一瞬で焼き切れた。

気を失ったレムスを見下ろし、セシルが冷たい声を放つ。

「……いつまでその芝居を続けるつもりだ」

「う、う……芝居だなんて、身も心も傷ついてる俺に……酷いや、

セシル君」

「……………」

セシルは言葉も無く右手を振るうと、泣き真似を続けているカシムめがけて白刃が閃く。

「おおっっ」

カシムは、涙を流していたというのに全く腫れていない目を見開き、慌ててそれを躲す。

「ちよっと待った！ それって、ナイフどころかどう見ても剣じゃないの！ どーやって、隠してたの、どこに!？」

斬りつけられたことよりも、そのことに驚いた。セシルの手に握られたそれは、刃渡りがナイフの倍はあるショートソードと呼ばれるものだった。

とてもではないが、ドレスに隠せるような代物とは思えない。

「……………機密事項だ。そのようなことより、説明をしてもらおうか、
真実を」

「真実って……………まるで俺が嘘をついてるみたいない草だね」

「違うというのか？」

「当たり前。本人忘れてるみたいだけど、さっき言ったことは本当の事だって……………」

少しむっとして、カシムが抗議すると、反論が別の方向からきた。

「レムス様がそんなことするはずがありません！ そんな品の無い嘘、信じられません」

「あら、リサ君まで信じてくれない？」

「当然です！」

「うーん、それじゃあ信じてもらうには、『証拠』を見せるしかないね」

？・証拠

暗闇に沈んだレムスの意識は、肉体の表面に感じる衣擦れの感触に引き上げられた。

「う……ん？」

けだるげに重い目蓋を開けると、まず目に入ったのさらけ出された乳房だった。

お世辞にも豊かとは言えない……だが、自分でも綺麗な形をしていると思う……そう、自分の……。

「……………えっ!？」

己のドレスの胸元が開け放たれていること……そして、その上にセシルとリサの顔があることを、数瞬かけて把握し、レムスは慌てて身を起こす。

「な、何してるの。二人とも!」

慌てて胸元を隠し、抗議する。が、二人は無反応。

セシルも、そしてリサも、ただレムスを見つめるのみ。

「な、何？」

「ははは、二人とも『証拠』を見て驚いたみたいだね」

耳に入るのはカシムの明るい声。

「証拠？」

「そ、俺が言っていることが本当って証拠。二人がどうしても示せて言うから、見せてあげたの」

その言葉に、レムスは自分が気絶した理由を思い出す。

「あ、あんなこと嘘に決まって……」

慌てて否定しようとするレムスを、カシムは楽しそうに見つめる。

「ふふーん、そんな事言っつて、シヨックで気絶したつて事は、真っ先に信じたつて事だろつ？ 覚えていなくても、それが本当だつて君は理解したからなんじゃない？」

レムスは先ほど見てしまった幻を思い出し、真っ赤になる。あれは……ひよつとすると忘れてしまっていた記憶の……

「そんなことあるわけが……」

「じゃあ、それは？」

カシムは、愉快そうにレムスの隠された胸元を指差す。

「な、何が？」

「いや、だから、自分でよく見てみなつて。そこに『証拠』はつきりと刻んであるから」

レムスは恐る恐る胸元を隠した腕を外し、言われた通りそこを見る。

そして、レムスの目は『証拠』を見つける。

「これって……」

小ぶりの乳房に点々と刻まれた赤い斑点。

「そ、キスマーク。昨日俺がつけた奴ね」

衝撃に震えるレムスに、カシムはあっけらかんと止めを刺す。

「ちなみに、俺の身体にも君がつけた跡があるんだけど……これは証拠としては弱いからね。そんなわけで、俺の言ってることが正しいって事は信用してもらえるかな？」

「あ……う……」

「じゃ、俺の話を聞いてくれる？ レムス君が昨日のこと忘れたままだと、俺としても都合が悪いからね」

カシムはそういって、懐から一枚の紙切れを取り出す。

「はい、これ契約書」

ズイツと目の前に突き出された文面を読み、レムスは凍りつく。

「読んだ？ これは、君がローラ君の代わりにこの後宮のナンバー1になり、その上で俺の頼み事を聞いてくれるって、約定事ね。そして俺は見返りとして、レムス君にお手製の『薬』をあげる、と」
カシムの説明に、セシルとリサが同時に身を乗り出し、契約書を見る。

契約書には確かにそのように記され、そしてご丁寧に本人のサインとその横に拇印まで押されている。

その拇印が本物だとすれば、レムス本人の意志でカシムと契約をしたということである。

「……見返りの薬とは何のことだ？」

刃物のような殺気を込めた怒りの視線を向け、セシルがそう問う。その手には先ほどのショートソードが握られ、今にでも切りかか

りそんな風情である。

それに答えるカシムの言葉は、レムスもセシルも先ほど聴いた言葉だった。

「名君と暴君、もしくは愚鈍な傀儡……人間を支配者にする薬だよ」

「アトウム国の姫にかけた謎賭けか」

「あら？ リディア君と話したわけ？」

カシムは少し意外そうな顔をする。

「それが、なぜレムスにあのようなものが生えることになる？」

「あんなものって、セシル君ってば酷い言い方……あんなに立派なものなのに」

「質問に答える！」

「はいはい……」

セシルの剣幕に、カシムは肩をすくめる。

「支配者ってのはどういうものだと思う？」

「？」

「上位の者が下位の者に対して絶対の権力を持つ……これが支配というものなわけだ。これは良いね？ そして、人間を上位下位に分ける基準というものがなんだか、考えたことはあるかい？」

答えられない。考えたことが無かった。それは当然のように有り、当然のように決まっていた。

「まあ簡単に並べても、力・金・美貌・その他もろもろ……といった具合で共通性が全く無い、ように見える。だけど、これを一括りにする人間の感情があるわけだ」

さも面白そうに、カシムはそれを口にする。

「『渴望』……絶対に手に入れられないものを、欲しがるその感情……それは、それを持っている者に対して、欲しがる者は劣等感を持たせてしまい。その逆の場合は、優越感なわけだが、この二つが人間の上位下位を決める」

「……それが、貴様の盛った薬とどういう関係がある？」

もともと、こういう話には興味の無いセシルが少し焦れた声を出

す。

「わからない？ では結論、あの薬は『絶対に手に入らないもの』
を手に入れさせる薬……下位の人間を上位に変換する薬なわけ……
つまり、レムス君にとつての『絶対に手に入らないもの』が、その
立派な一物なわけだ。俺も意外に思うんだけど、どうもレムス君つ
ては男性化の願望を持ってみたいだね」

「……馬鹿馬鹿しい」

「ッ！」

「女が一番になどなれるものか！ 一番というのは男がなるものだ」
カシムの言葉に、夢に見たかつて父から浴びせ掛けられた言葉が
蘇る。

あの言葉によってレムスの夢は打ち砕かれた。

女は、決して男より上位に位置することはできない。それをこの
後宮で思い知らされた。

自然と、レムスは自分が女に生まれたことを悔やむようになって
いった。

エリスに憧れを抱くようになったのも、彼女に助けられたという
ことよりも、振舞いの端々に感じられる男性的な雰囲気の所為であ
ることを自分で理解できていた。

であるから、男性化を望んでいるというカシムの言葉にも、レム
スは反論を出せなかった。今朝始めて、身体の異変を認識してより、
あまり動揺しなかった自分。それは、その異常な事態が決して絶望
的な事態では無かったから、自分が望んでいたことであつたからで
あると、レムスは理解した。

そのレムスの顔を、じつと見つめ、カシムは頷く。

「うん、それ。昨日のレムス君も、俺の説明を聞いてそんな顔をし
てた」

そして、向けられたすべての男……いや女性であるレムス達の背
筋も蕩けさせるような淫蕩な笑みを浮かべ、誘うような声音で囁く。
「そして……その後レムス君は、その場で俺を押し倒して、情熱的

に迫ってきたんだが……今日も今からする？」

己の殻の中に引きこもりかけていたレムスだが、その言葉に吹き出す。

「な、な！ そ、そんなこと！？ ……本当に昨日の私がしたの？」
狼狽しつつ、一縷の望みをかけて、念押しに尋ねてみる。

「往生際が悪いねえ、レムス君てば。……昨日のレムス君は、もう激しく、獣のように求めてきたよ。薬を飲ませたのが昼を少し過ぎた頃で……それから、空が暗くなるまで、大鍋のある庭の林の中で休むこと無く、それはもう何度も何度も」

そのときのことを思い返しているかのように、カシムは両目を閉じゆっくりと語る。

「場所がそんな場所だからね。いつ誰かがその場に来て、見られてしまうか……さすがに俺も緊張しちゃったんだけど……段々とそれがいい感じに刺激になって、ちょっと癖になっちゃったかもしれない」

「……うう……嘘ですよね？」

「だから本当だって。いや、さすがの俺も昨日のあれは少々きつかった。それに、俺ってば、自分で破瓜しただけで、実際にそういう性交をしたのってあれが初めてだったからね。なのにレムス君、衝動任せにガンガン突いてくるもんだから、思わず泣いちゃったよ」
あっけらかんと、とんでもない告白がカシムの口から飛び出していく。

なんとなくレムスは、両側から感じる二人の視線がじわじわと冷たくなっていくような錯覚に襲われる。

「さて……昨日の事情説明はこのくらいかな？ 大体のところは理解できただろう？ んで、契約により俺は『薬』を差し出して……なおかつ、そういうサービスまでさせられた……つまり、後はレムス君が契約に従う番、というわけなんだけど何か異論でもある？」

「……………」
言いたいことはいくらでもあるのに、レムスは何も言うことはで

きず。ただ涙を流した。

「異論無しね。じゃあ、俺の頼みってのは……」
カシムの声が、死神の誘い声に聞こえる。

カシムの頼み、とやらの話を聞き終わると、レムスは返事もせず自分のベッドに移動し、毛布を頭からかぶり、横になる。

「おい、レムス君ってば。話はわかったかい？ それともベッドの中でもう一度説明する？」

「……わかりました。わかりましたから、もう私を放っておいて……」

レムスの涙声が毛布の中から漏れ出る。

「あらら、すねちゃったか……」

ほりほりと頭を掻き、カシムは苦笑する。

「さて……そういうわけで、他の二人は納得してくれたかな？」

「……………」

飄々としたカシムの確認に、二種類の視線が険悪な怒気を帯びる。

「うおう！？ ひよっとして、まだ納得してくれない？」

「……当然だ。だが、貴様の要求がレムスにとって、それほど悪いものではないから、今まで黙っていた」

氷のようなセシルの言葉にリサも同意を示す。

「レムス様が、そんなことするなんて信じられません。……きつと、その変なお薬を飲まされた所為です」

「うーん、リサ君結構鋭いね」

見当はずれなところで、カシムは関心を示す。

「……やっぱりこれは言つといた方が良いか。実を言うと、レムス君の記憶が欠けてるって聞いたとき、驚きはしたけど、それほど不自然だとは感じなかったんだよね、俺」

「？ どういうことだ？」

「そのことだけど、さっきはまああまり事を荒立てないように抽象

的な言葉で言い表したけど、実はそのときのレムス君ってばちょっと尋常じゃない状態だったわけなんだよね」

カシムの言葉に、毛布の塊がピクリと反応する。

「……多分、あの時レムス君の理性は全く無かっただろうね。比喻抜きで本当に獣みたいだった。俺を俺だと認識して襲ってきたわけじゃなく、ただ目の前の女だから、襲ってきたって感じだったな」

「……貴様の薬の副作用か？」

セシルが思いついた仮定を口にする。それ以外考えられない。

だが、カシムは首を振り。

「近いけど、違う。俺の薬は正常に作用している。それより問題なのは、レムス君のもつ男性像だろうね。というより、男性に対する偏見かな？」

「……つまり、その獣のような行動は、レムスが持つ男性像の現れだということか？」

「そ、心当たり無い？」

「無くは無い。というより、有りすぎる」

何しろここは後宮であり、女性の権利が踏みにじられる場所である。男性に対する悪感情を育成するには、これ以上ない最適な場所だ。

毛布の塊が、痙攣するように震えていたりする。

「まあ、思いつき欲望を俺に吐き出した後、一晩たったら元に戻ってたわけだから……まあ、ちょっと記憶障害があるみたいだけど……それほど大事無いと思う。だからといって再発の可能性が無いわけじゃない、というかかなり有るね。俺の見解だと」

ピクンツと毛布の塊が大きく跳ねる。

セシルもリサも真剣にカシムの話に耳を傾ける。傾けざるを得なくなる。

カシムの言う通り、レムスの中に男に対するゆがんだ見識という獣性が宿っているとすると、それが目覚めた場合……

「……最も有効な対応策は、まあ誰かが落ちて着くまで相手をするって事なんだけど。二人のうちどちらかがする？」

「そ、そんなツ!？」

顔を真っ赤にして狼狽するリサの様子に、カシムは頷く。

「ま、そうだろうね。というわけで、そうなったら俺に報告してもらいたいわけだ。まあ、俺の作った薬だし、俺に責任のあることだからね。その場合は俺が何とかするから」

毛布の塊が、一際大きく痙攣したかと思うと、死んだかのように動かなくなる。

「ああ、そうそう、ちなみに……」

カシムは思い出したかのように、セシルとリサの耳元に口を寄せ囁く。

「勘違いの無いようにいつとくけど、ビースト状態のレムス君は確かに乱暴だが、チンピラ王子のようにへたくそでは決して無いよ。それどころかその逆で、かなりすごい。と俺は評価する。実際、昨日だけで二桁は余裕で絶頂させられた」

セシルはカシムの言葉の意味を察し、頭痛を感じる。

そんなセシルに、カシムはいやらしい笑みを浮かべ。

「セシル君も、あのチンピラとしか経験が無いんだったら、一度は相手してみるのもいい経験だと……」

言葉途中で、ベッドから毛布が跳ね上がる。

セシルが反射的にショートソードを振るうより早く、置時計が唸りをあげてカシムめがけて飛来する。

無論、そのようなもの当たるはずもなく、カシムは余裕でよける。ベッドの上で、時計を投げた体勢のまま顔を真っ赤にしたレムスは、怒りに震えカシムを睨みつけ、大きく息を吸う。

「出てけえっ!!」

時計の壊れる音とその絶叫は、部屋の外の通路まで響いた。

間を置くこと無く、重い足音と鎧の鳴る音が響く。

「カシムッ! そこか!？」

「げっ! エリス君!」

カシムの狼狽の声と共に、レムスの自室の扉が激しく開け放たれ

る。

開いた扉から瞬時に内部の状況に視線を走らせ、エリスは鉄兜の奥の目をセシルに向ける。この場で最も正確な状況を教えてくれる人物を選抜した結果である。

「セシル！ 何があつた？ カシムはレムスに何をした！？」

無論、セシルはレムスの事をエリスに言うつもりなど無い。だから、的確に、最もその場に適した言葉を選んで、報告する。

「レムスがこの女に『嫁に行けない体』にされた」
「うっわ」

あまりに適しすぎ、カシムは見えもしない天を仰ぐ。
もはや逃げ場は無かつた。

？・新君主

怒れる女騎士の折檻によって、魔女の行動は沈静化した。

エリスも、具体的にレムスが何をされたにしろ、これでカシムがこれ以上手を出すことはないと安心していった。

だが、二日後。

中庭のテラスにて、身体各部に若干の包帯を巻いたカシムと、見張るようにその背後に立つエリス以外、変化の無いいつもどおりの様子でお茶会が開かれていた。

そこに、青髪の美少女、すなわちレムスがセシルとリサを連れ姿を現した。

「レムス！ もうカシムに近づかないよう言っていたらどう！？」

意外そうに驚くエリスに一礼し、それでもレムスはカシムの元へ歩く。

どことなく弱った様子のカシムに、レムスもまた疲れた様子で報告する。

「……言われた通りに、三日後の夜、リディアさんの代わりに夜伽に向かう者を用意しました。これで良いんですね」

本当ならば、カシムと話すということは、かなりの響感を買う行

為なのだが、今のレムスには関係無い……

「あゝ、ご苦労様。ご褒美いる？」

「いいません」

はつきりと、レムスは拒否を示す。

なんとなく耳に入った情報を、整理して、意味が脳に浸透すると、その場にいるカシム以外の……特にリディアが驚きの声をあげる。

「え？ レムス様、それは一体……？」

「……言っていないの？」

「うん、ちよつと驚かせてあげようかなって」

悪戯ツ子の笑みでカシムはのたまう。

レムスはそれのため息をつき、リディアに視線をあわせ説明をする。

「三日後のリディアさんの夜伽を、別の子に代わってもらおうように手配をしたの。カシムに……頼まれて」

最後の部分に多色の感情を込めて苦々しく述べる。

それに、リディアは最初は喜びを浮かべそうになるが、すぐにその顔はしかめられる。

「……ですが、それではその代わりになつた方が……」

「ああ、大丈夫大丈夫、だろ？ レムス君」

カシムが掌を振って遮り、レムスに確認する。

「ええ、嫌がるどころか、喜んで代役を引き受けてくれる子がたくさんいたから、その内の一人に任せただけ……」

ため息混じりのその言葉に、リディアは奇妙な表情となる。

彼女の感覚では、夜伽など嫌なことを好んで代役を引き受ける者がいるなど考えられない。

それを見透かしたように、セシルが説明をする。

「……この後宮にいる側室の中で、正室を望んでいるものがほとんどだ。そうでないほうが例外なのだが……」

ここにいるほとんどがその例外であることに、セシルは少し皮肉に微笑む。

「その者たちにとって、正室になるチャンス……すなわち、レイド殿下の子供を授かることだが……を得るための夜伽の回数は何物にも換えがたい貴重なものだ。一言、代わってくれといえば、即座に十人以上の側室がこぞって名乗りをあげてきた」

「……まあ、そういうわけ。それで、これから後もしディアさんの夜伽の番のときに他の子を代わりにやるように約束したのだけれど……良かったかしら？」

エリスとレフィがバツとリディアの顔を振り返る。

当のリディアは、状況を把握できず目をぱちくりとして、呆然としている。

ニヤニヤと笑っているカシムが、はつきりと言葉にしてやる。

「つまり、これからずっとリディア君がチンピラ王子の寝室に行かなくても良くなった、てことだよ。わかった？」

「……え？」

きよとんと、見開いた金の瞳をカシムに向ける。

その目にはありありと期待と不信の色がある。

「そんな……でも、そのように簡単なことで？」

「いや、実際簡単な事だつて……やりたくないんだつたら、代わって貰えば良い。やりたがる奴はそれこそ一杯いるんだ……気持ちには理解できないけどね。この国の王妃様になるためなら、あのチンピラの子供をはらんでも良いつてのが結構いるみたいだ」

気持ち悪そうにそのことを語り、肩をすくめる。

「だつたら話は簡単で、妊娠する確率を上げるには、性交の回数が重要になる。しかも、その夜伽の機会をただでやるって言うんだから、それこそ向こうにとっては願ったりなことだろうよ。実際、代役の人選に困るぐらいだつたらろう？」

途中で話を振られ、レムスはうんざりした様子で頷く。

あまりに反応がありすぎて、希望者が取っ組み合いのけんかを始めてしまったぐらいである、セシルがいなかったら事態の收拾は不可能だつたらう。

結局、レムスもリディアも、これから軽く十回分はきつちりと代役の予定が詰っている。

そして、その半分ほど消化した頃には、またその後の十回が埋まり……延々と繰り返しとなるだろう。カシムの提案は、簡単であるが、その効果は絶大である。

「ですが……夜伽の順番を私たちが勝手に変えるなんて……」

「大丈夫大丈夫。この後宮にどのくらいの側室がいると思うの？」

何十人だよ？ それを日替わりで抱いてるわけだ、あのチンピラ王子……確信をもって断言するけど、側室の一人一人の顔すらろくに覚えてないだろうよ」

そういえば……自分もこの後宮にいる人たちの顔をほとんど覚えていない。覚えているとすればこの場にいる者たち、それも覚えたのはごく最近である。などとリディアは他人事のように思い浮かべる。

「あいつが後宮に求めていることはただ一つ……昨晚と違う美女を今晚抱き、そして明日の晩にはまた別の美女がくる……それだけ、最低三人いればいいところを、見栄を張ってその十何倍もの人数を引き入れている今の状態で、誓って言うけど、絶対に気づかん」

絶対の自信を込め、カシムは大仰に頷いてみせる。

「……それはわかった。そういうことだったら、私も協力しよう……だが」

エリスが口を挟んでくる。

「それを、なぜレムスが行う？ 理由が思い当たらないのだが？」

カシムとレムスの接点を、結局見出せていないエリスはそんな疑問を抱く。

レムスやセシルが何かを言う前に、カシムが答える。

「そりゃあ、決まってるだろう？ ついでだよ」

「ついで？」

「そ、レムス君もチンピラ王子の夜伽から開放されたがってた。だから、俺がその解決策を提示して、そのついでにリディア君の方も

お願いしたわけ」

「なるほど」

事実には似せた虚偽に、エリスは納得する。レムスが決してレイド王子のことを好いてはいないことを知っていたので、説得力が感じられた。

だから、実はレムスの身体の異常を隠しとおすためという本当の理由が有ることになど、考えが及ぶことは無かった。

「最近、レムスにちよっかいをかけていると思ったら、そのことで口説いていたわけか」

「その通り。ちよくと、説得に苦労したけど……特にエリス君の折檻とか……」

冗談めかして、エリスに言い返ししながら、カシムはそっとレムスに耳打ちする。

「……ちなみに、六日後の方は？」

「……それも、代役を手配しています……ですが、本当にあの人がそれを望んでいるんですか？」

そのようなこと考えられないと、レムスがカシムの耳に囁き返す。

「そだよ。代理のルビィ君が証文持参で来ただろう？」

「……誰よりも正室になりたがっているあの人が……夜伽を拒否するなんて」

「ま、あのお嬢様にもいろいろ事情があるんだろ。いろいろと……」
「うん……」

カシムの言葉に、納得のいかないレムス。

はつきりといえないが、どこかおかしい……代理であったルビィの明るい笑顔を思い出すと、どうしてもそう思ってしまう。

「ははは、心配性だねえ。そんな君に、俺が取って置きの言葉をあげよう。君が忘れた、俺と君の契約のときの俺の口説き文句だ」

師匠直伝の殺し文句だ、と宝物を自慢する子供のように。

「たとえどのようなことをしてでも、俺が君の願いを叶えよう。君が俺の元にいる限り、君の願いは現実となる……君はそれを信じれ

「ばい。後は俺が全てを執り行おう」

レムスにはそれが抗うことの不可能な呪いの言葉に聞こえた。その日のレムスはどのように感じたのか……

レムスにはもうそれを知る術は無かった。

カシムはさらにレムスに顔を寄せ、小さく囁きかける。

「それと……我慢は良くない。君のそれってば、エリス君に反応してるんだろっ？」

「ッ！」

それを指摘され、レムスは身を強張らせる。

あれから、どうやってもエリスを前にするとレムスのそれは敏感に反応し、雄々しく立ち上がってしまう。仕方が無いので、エリスに会うような場合には、必ずセシルかりサと一緒にいてもらい、エリスの目に入らないように間を遮ってもらっている。

が、カシムの位置からは丸見えである。

続けて、カシムが囁く。

「……聞くところによると、それは中身を発散しないことには治まらないそうだ。今晚あたりに俺の部屋に来る？ それとも、俺が君の部屋に行く？」

その言葉に、レムスはまるで鎖に拘束されたような錯覚に襲われる。

背後で、セシルとリサのため息が聞こえ、それに続けてため息をつく。

実際には、自分はりディア同様、レイド王子から開放されたに等しい状態なのである。

だが、レムスは己がもはや手遅れであり、今度こそ容易に逃げられない状況に自分が置かれているような気がしてならなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8509k/>

占い師への誘い

2010年10月8日12時31分発行